

---

# 船乗りと手品師

楽山やくら

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

船乗りと手品師

### 【Nコード】

N2807U

### 【作者名】

楽山やくら

### 【あらすじ】

九つの小さな島からなるイースウエル王国。その島のうちのひとつ、六の島・ローロポールの貴族の娘であるメイリーは、勝手な父親に腹を立て家出を決意した。愛鳩のクルツポを連れて港に行き、一隻の船に飛び乗ると、そこにはやたらと美形な船長（とその仲間たち）がいて　！？　貴族なのに手品師な元氣娘と、無駄に美形な男装船長の、友情やその他あれこれ詰まったコメディ色の強いファンタジーです。

## 【プロローグ】

屋敷のなかはあんなにも広いのに、わたしが行くことのできる範囲はどうしてこんなにも限られているんだろう？

わたしはずっと不思議だった。

わたしだけがいつも、雲の流れについていけなかったから。

「ねえ、じいじ。わたしが離れに閉じこめられてるのは、わたしの髪がお母さまみたいにきれいじゃないから？ それとも、わたしがお父さまみたいに賢くないから？」

まるでつくりもののように、美しく整備された庭園の片隅で。木製の白い椅子に横たわり本を読んでいたじいじに、思いきって尋ねてみたら、

「そうかい？ メイリーの髪の毛はターシアよりも金色がかったやわらかいし、メイリーはダノクレイの幼い頃と比べても十分に賢いと思うがね」

本から顔をあげ、落ちそうになる小さな眼鏡をおさえながらじいじは、そんなふうに答えてくれた。でもそれは、わたしが求めていた答えではなかった。

「じゃあどうして？ わたしも、みんなみたいにお屋敷の外で遊びたい！」

たまにお父さまが連れてくる女の子たちは、夕方になるとみんな雲を追いかけて帰っていった。

楽しそうに笑いながら。

「また明日」と、手を振りあって。

けれどわたしに「明日」はなく、翌日はひどくさみしい思いをするはめになる。わたしも一緒に走っていけたらどんなにか楽しいだろうと、何度夢のなかで思い描いただろう。

じいーっとじいじを見上げていると、やがてじいじは観念したように本を置き、わたしの頭に手を伸ばしてきた。

「それはな、メイリー。おまえがまだ、自分を守る力を手に入れていないからだ」

ぼんぼんとやさしく触れてくる、しわしわのその手がわたしは大好きだ。

「自分を守る力？」

「そう　狙われる運命にあるおまえが、なんの力も持たないまま外に出てしまったら、悪いやつらに捕まって終わりだよ。それは嫌だろう？」

「う、うん……」

「狙われる運命」も「悪いやつら」も、わたしには具体的なイメージなどできなかつた。ただ怖いと思つたのは、本当。それはまるで、暗闇に潜んでいるかもしれない幽霊に対するような、あらかじめ用意されている恐怖と似ていた。なにが怖いのか、自分でもわからないのだ。

「じゃあ……じゃあどうすれば力が入るの？　前に来た男の子たちみたいに、剣を振る練習をすればいい？」

そう、何度か男の子たちがここに来たこともあつた。木の枝を剣に見立てて決闘したり、庭中を走りまわったりして遊んだ。実のところわたしは、女の子たちと遊ぶよりも男の子たちと遊ぶほうが楽しかつただけだ、お父さまもお母さまもそれが気に入らなかつたらしく、女の子ばかり呼ぶようになったのだつた。

言いようのない不安に駆られて、なおも食いさがるわたしの手に触れたじいじは、

「この小さな手で、剣は難しいだろうな。それに、おまえには人を傷つけるような人間になつてほしくない」

表情を変えずに告げたけど、わたしにはわかつてしまった。今、じいじは確かに困っている。それがわかるくらい長いこと、わたしはじいじと一緒に過ごしていたから。

こくと、頭を縦に動かした。

「わかつたよ、じいじ。わたし、自分で考えてみる」

それ以上困らせるのは嫌だったから、そう応えた。わたしはなによりも、じいじの笑顔が見たかった。

そんな気持ち伝わったのか、じいじは顔のなかに小さな三日月ふたつ浮かべて、

「そうだ、それがいい。賢いおまえなら、きっとおまえにしか見つけられない答えにたどりつけるだろう」

「うんっ」

両手でじいじの手をぎゅっと握りしめて、わたしは誓った。

(自分を守る力を、この手に)

そしていつかきつと、あのオレンジ色の雲を追いかけていこうと。

わたしが最初に家出を考えたのは、じいじが亡くなったときだった。

(ずっとふたりきりだったのに)

これからはひとりきりになるのだと思うと、どうにも耐えられなくって、いつそのことこの屋敷を出ていこうかと考えたのだ。

しかし葬儀が終わったあと、お父さまはわたしが本邸に住むことを許し、部屋を用意してくれた。わたしの活動範囲はほんの少しだけ広がり屋敷全体になったけど、やっぱり門の外へ行くことだけは許してもらえなかった。

そのときはわたしもまだ準備の途中で、諦めるしかなかったのだけど

「結婚！？ って、お、お父さま、その歳で離婚&再婚するつもりですかっ？」

「誰がわしの話をしておるのだ、誰が！」

夕食が並べられたあまりにも長すぎるテーブルを挟んで、わたしとお父さまは向かいあっていた。お互いナイフとフォークを手にしているものの、それは料理を食べるためというよりもむしろ、相手を威嚇するためのものだった。

お父さまは右手のナイフをびしっとわたしに向けてと、

「おまえの婚約者が決まったのだ。わしが泣き脅してまとめてきた。ありがたく思えっ」

「なんで望んでもいないことを感謝しないといけないのよ……それに、お父さまがお父さまなら、相手も相手だわ。一体どの誰よ？ 相手と会いもしないで結婚してもいいだなんてバカ男は！」

わたしも対抗して、まだ切り分けていないステーキの刺さったフォークを前に突き出した。

「くうっ」と、なぜかちょっと悔しそうな顔をしたお父さまは、

今度はナイフを戻し、自分のステーキを切り分けはじめる。それでも口を動かすことはやめずに、

「二の爵の四男坊、ルディギー・ニティエルだ」

「名前で却下！」

「おまえだつて会いもしないで決めてるじゃないかーっ！」

ぴゅーんと、器用にもお父さまがナイフで投げたステーキの欠片が飛んでくる。

わたしはそれを、突き出したままのステーキの盾で防御すると、皿の上に戻して立ちあがった。

「名前は重大な問題でしょ！？ わたし、ただでさえローロポールつていう自分の名字が恥ずかしいくらいなのに、夫が呼びにくい名前だなんて嫌よっ」

だからわたしは、他人に自己紹介するときはずっと、「ロロ家のメイリー」と名乗っていた。もつとも、自己紹介をする機会なんて数えるほどしか与えられなかったけど。

「だいいち、お母さまがいないときにそういう話をするなんて卑怯だわ。どうせお母さまには反対されると思うてるんでしょ！？」

テーブルの上を激しく叩きながら告げたら。

「むう……」

図星だったのか、お父さまは眉間に深いしわを寄せて黙ってしまった。鼻の下から左右に突き出したひげだけが、せわしなくびくびくと動いた。

ちなみにお母さまは今日、他の奥さまがたと食事会に行っている。それは今わたしたちがとっている食事と比べたら内容的には地味なものなのだろうけど、気心の知れた相手と楽しくとるならきつとなによりもおいしいごちそうになるに違いない。

（それにひきかえ、わたしたちは）

どんなに豪華な食材でも、この空間では塵に等しい。

「話にならないわ」

わたしはそのまま椅子に戻らず、テーブルに背を向けた。わざと

大きく足音を立てて、廊下に繋がっているドアへと向かう。

その背中に、

「それでも、納得させるぞ。ターシアも、もちろんおまえも」

(お父さま……)

その言葉から、お父さまがまぎれもなく本気であることが窺えた。本気で、「ルディギー」なんて変な名前の婿を迎えてもいいと思っているのだ。

「……勝手にすれば？ わたしも勝手にするから！」

言い捨てて、食堂を出た。

自分の部屋までの廊下を、走る。怒りのおさまらない足取りで。

(結婚だなんて、冗談じゃない！)

それは女を内に縛るための儀式だと、じいじだっと思ってた。

つまりお父さまは、死ぬまでわたしを外へ出すつもりはないと、そういうことなのだ。

わたしは自分の部屋に戻ると、じいじの形見である小さなトランクを取り出して、荷物を詰めはじめた。荷物といっても、いくつかの道具と着替えだけで、よけいなものは一切入れない。

「旅は身軽なほうがいい」

そう教えてくれたのは、わたしの師匠であり、そして多分初恋の人。

そのトランクを、部屋のすぐ外に置いてある大きめの台のなかに隠した。その上に敷かれているきめ細やかな白い布が、とるけるように赤い絨毯まで届いているから、なかに入れてしまえば見つかることはないのだ。そもそもこの台は、誕生日プレゼントとして両親から買ってもらったものだったけど、わたしが考える用途は最初から違っていた。

再び部屋のなかに戻ったわたしは、今度は着替えを始める。いつかわたしが舞台に立つときのためにと、じいじが特注でつくってくれている服に腕を通した。上着は男性用のタキシードとよく形が似ているものの、ズボンのかわりにかぼちゃパンツみたいふわわりと

した形の白いスカートがセットになっている、かなりかわいらしい衣装だ。

着替えおわったわたしは、すっかりその気になって、

(見せてあげるわ、お父さま)

わたしが手に入れた、「自分を守る力」を！

鏡に向かって決意のポーズをひとつ。

それから、

「クルツポ、おいで」

窓辺の鳥かごに手を伸ばすと、なかからオレンジ色の鳩が飛び出してきて、わたしの指先にとまった。この大切な相棒はわたしなんかよりよっぽど賢いから、たとえばこの扉が閉まっていなくとも、おとなしくなかにいて時間がくるのを待ってくれる。

待っていて、くれたんだ。

本当はまっ白なクルツポを、鮮やかに染めあげている空の色を見やった。

そこに流れる雲を。

「今、行くから」

呟いたわたしに反応するかのように、部屋のドアがノックされる。

「メイリーお嬢さま、いらっしやいますか？」

声の主は、メイドのロトウシヤ。この子も発音しづらいから、わたし的にはすぐく嫌なのだけど。お父さまはそれを面白がって、わざとロトウシヤをわたし専用のメイドにしていた。毎日わたしの部屋の鍵をかけるくるのも、この子の役目だった。

(ほんと、バカげてるわ)

わたしの目の前にあるこの窓は、決して開かない。

眠るたびに、外からドアに鍵をかけられる生活。

もつうんざり。

「自由になりましょ、クルツポ」

ロトウシヤには聞こえないよう呟いてキスをしたら、クルツポも小声で「クルツポー」と返事をしてくれた。ほんとかわいいやつだ。

「お嬢さまー？」

もう一度呼んだロトウシヤの声を合図に、胸ポケットにクルツポをしまったわたしは、ゆっくりとドアに近づいた。それから素早くノブをまわして、作戦どおりロトウシヤと対面する。

「ああ、やっぱりなかにいたんですね。でもお嬢さま、その格好は？ 仮装パーティーにでも参加なさるんですか？」

この屋敷にはメイドの制服なんてないのに、自らメイド的な格好をしているロトウシヤには言われたくなかったけど、機嫌のいいわたしは笑顔で答えてあげた。

「あのね、明日みんなにすつつつごい手品を見せてあげようと思つて、今準備してるの！」

「ああ、それ手品用の格好ですか」

「そうよ！ それで、今日は部屋で準備が終わったらそのまま寝るから、もう鍵かけてもいいわよ」

「わかりました」

ロトウシヤが頷いたタイミングに合わせて、わたしは足もとに用意しておいたテグスをつま先で引いた。すると部屋の外 廊下の向こうからガラスが割れる大きな音がして、ロトウシヤの視線はわたしから大きくはずれる。

「なにかしら……？」

（今だわ！）

音がしたのはドアの右側。わたしが台を置いているのは左側。素早く台の陰に身をひそめると、ドアの閉まる音でロトウシヤはまたこちらを向いたようだった。

「メイリーお嬢さま、わたくしが向こうを見てきますから、お嬢さまは安心してお休みくださいね」

誰もいないドアにそう告げ鍵をかけると、すぐに身体の向きを変え、廊下を右へと歩いていく足音が聞こえた。

こんなふうに、ロトウシヤがわたしの返事を待たなかったのは、普段のわたしがわざと返事をしないようにしていたからだ。

（仕掛けは前もって準備しておくものなのよ！）

わたしが花瓶に仕掛けを施していたのは、廊下のつきあたりを曲がったところ。ロトウシヤの背中が見えなくなる瞬間に備えて、台の布をめくりトランクを取り出しておく。

この赤い絨毯の廊下はまっすぐに長いけど、最後まで走り切る必要はない。わたしが目指すのは、ふたつ左どなりの部屋だ。基本的にわたしの部屋以外の窓は開くようになっていて、かつ、その部屋の窓なら木を伝ってこっそり庭におりられる。ひとり遊びが多かったわたしは、女のくせに木のぼりが得意だった。そして一度木にのぼったらおりなければならぬから、同じくらい木おりが得意だったのだ。

（最初は自分でおりられなくて、泣いたっけな）

でもその木は、じいじが手を伸ばせば届く高さの木だったから、おろしてもらえた。

今のわたしなら、もう。

じいじの手がなくても。

たとえ他の誰も、守ってくれなくても。

（わたしはおりられる）

この屋敷からおりて、雲を追いかけるわ！

視界からロトウシヤの背中が消えていることを確認して、わたしは動き出した。

イススウェル王国に住んでいて、一度も海を見たことがない人なんて、きつとわたしくらいだろう。なぜならこの国は、九つの小さな島からできているからだ。三×三のマス目みたいに、四角く並んでいる島の中心にあるのが、国王のいる一の島・イススウェル。「イススウェル」というのは、国の名前であり島の名前であり、そして王族に与えられた名字でもあった。

(いいわよね、かつこよくって)

どうせなら、わたしもそういう名字が欲しかったな。

屋敷から街へと続く一本道を走りながら、わたしはそんなことを考えていた。わたしがこうして六の島・ローロポールの貴族家系に生まれてしまった以上、それを名乗らねばならないのは決まりだから仕方ないことだけど。その決まりを最初に考えやがった誰かを、末代まで呪わずにはいられない。

(せめてわたしが貴族じゃなかったら、よかったのかな)

貴族の娘じゃなかったら、家に閉じこめられることもなくて。こうしてあたりまえに、流れる雲を追いかけることができたのだろうか？

わからない。

貴族じゃないみんなの普段の暮らしぶりを知らないわたしには、「貴族じゃない自分」を妄想する力が足りなかった。

そもそも貴族というのは、国王から島を管理する役割を与えられた家系のこと、それぞれの島に一家系ずつ存在している。その島が平和であるならば、特になにをする必要もなく、国王が民から集めた税金の一部をもらって生活できるのだ。

そんなふうだから、屋敷に閉じこめられていたわたしですら、遊びにきた女の子たちから「働いてないのにお金もらえていいね」なんて言われるくらいだった。昔はその言葉の意味がよくわからな

ったけど、今ならちゃんとそれが厭味だったのだと、わかる。

(だって、働いてないわけじゃないもの)

わたしとはあまり交流を持つことのなかった両親でも、島のために 国のために、島民からは見えない部分でちゃんと行動していたことを、わたしは知っていた。わたし自身だって、閉じこめられていたことそれこそが、ある意味わたしに与えられた仕事だったのだ。

「もうそんなこと、言わせないんだからっ」

走りながら呟いたのは、この島との決別の意味もあった。

(もうすぐ、わたしの新記録だわ)

あの一本杉を越えれば、まだ見たことのない景色に出会えるはず！  
自然と、動かす脚にも力がこもる。

(そう)

実はわたしが屋敷の外に出たのは、これが初めてのことでない。何度か雲を追いかけ実験をしたことがあるのだけど、そのたびにすぐ見つかって連れ戻されていたのだ。それは、「わたしが島から脱出するまでの時間」よりも、「わたしが屋敷のなかにいないことがばれる時間」ほうが早かったからだ、実験結果を検証して悟った。そうして考えついたのがこの、密室からの大脱出。明日の朝口トウシャがわたしの部屋の鍵を開けるまで、この家出がばれることはないだろう。

これが、わたしの「自分を守る力」 手品。

そして同時に、生活をするための力でもあった。

「……………うわぁ」

ずっと追い越してみたかった一本杉を越えたわたしは、思わずそこに立ちどまり声をあげた。ここに至るまでの道は、草原にむき出しの土だけとたいした見どころのない景色だったけど、そこからひらけていた風景はまるで完成された絵画のようだった。

(ここから急に低くなっているのね)

街を一望できるどころか、海まで見えていた。このまま雲を追い

かけていくつもりなら、あの水平線まで走っていかなきゃならない。  
「これから出港する船、あるかなあ」

ひとつだけ心配ごとを呟いてから、わたしはまた走り出した。空はもうオレンジというよりも灰色に近かったから、急がなければならぬ。港に着くのが遅くなればなるほど、船乗りたちだって船から離れてしまつたろう。

焦る気持ちとは裏腹に、慣れない石畳の道はわたしの足をよけいに疲れさせる。今までこんなに長く走ったことはない。庭を走りまわるといつても程度は知れているし、やわらかい草の上だった。

(でも、もう少しっ)

さいわいだったのは、高い位置から街を見下ろせたおかげで、どの道なら迷わずに行けるのか確認できていたことだ。おかげで足は痛くとも、心はくじけない。

走りながらふと、「港に着く前に島の人に見つかったら、もしかして通報とかされちゃうかな？」と考えたけど、どうやらそんな心配はまったくいらぬようだった。道の両脇に家々が並んでいるものの妙に静かで、外に出ている人をまったく見かけない。外出禁止令でも出されているのかと思うほどだ。

(……まさか、ね)

みんなわたしとは違つのだ、きっといつもこんな感じなのだろう。それに、街は静かでも家のなかからもれてくる光はやさしい。その光は充分にわたしの心を癒してくれた。

そうしてなんとか命からがら港にたどりついた頃には、わたしがいつも自分の部屋の窓から睨みを利かせていた、漆黒の闇が空を陣取っていたのだった。

「うう……も、だめ……」

慣れない長走りで疲れきってしまったわたしは、足もとにトラックを寝かせるとその上に座りこむ。港は港でもここはかなり端のほうで、これから出港する船を探すには、当然もつと歩かなければならないのだけど。「とりあえずたどりつけた」という安心感もあつ

てか、すぐに歩き出そうという気にはなれなかった。

(家出つて、意外ときついよね)

ずっと屋敷のなかにいたわたしはそれだけで、確かに守られていたのだと実感した。

「ポポポ？」

不意に、わたしが動きをとめたのを察してか、胸ポケットからクルツポが顔を出してくる。

「あ！ そうだクルツポ、あなた飛んでなかったんだから疲れてないでしょ？ わたしのかわりに灯りのついてる船探してきて！」

「ポツポ？」

まるで着脱式のように、顔だけ九十度回転させるクルツポ。

「いいい？ これから出港しそうな船よ。できれば、素敵な名前のかつこいい船乗りがいる船にしてね！」

「クルツポー」

わたしの希望をどのくらい理解したのかはわからないけど、クルツポはわたしの胸から離れ飛んでいった。

その白い後ろ姿を見送って、わたしは今うちに息を整えておこうと深呼吸する。

(あーあ、ほんとに素敵な人いないかなあ)

さつきはクルツポに向かってテキストなことを言ったものの、実際に素敵な人を探してきてくれるならありがたいことこのうえない。だってこの家出は、屋敷から出たかったというののもちろんだけど、好きでもない人と結婚したくないというの、やっぱりあるのだ。

(お父さまが決めた結婚相手……二の爵の四男坊だっけ?)

二の爵というのはつまり、二の島・ニティエルの貴族ということ。その四男坊 四番手にいるよりも、わたしと結婚すれば実質六の爵の一番手になれるから、向こうは「よし」としたのだろう。お父さまが泣き脅しで決めたなんて、きつと嘘っぱちだ。

「しかも名前が、ルディギー？ ルディギー、ルディギー、ルディギー……ああ、何度言っても舌噛みそう！」

「全世界のルディギーさんごめんなさい」と思いながらも、言わずにはいられなかった。

（うん、でもおかげで、だいぶ気持ちが戻ってきたわ）  
行かないきゃ、と。

息も整ったことだし、わたしは立ちあがってトランクを手にした。  
「クルツポポッポー」

そこへちようど、クルツポが帰ってくる。心なしか嬉しそうな鳴き声に聞こえるのは、わたしが期待しているからだろうか。

「クルツポ、見つかった!？」  
「キュルルル」

鳩とは思えないような奇声をあげながら、わたしの周りを一回転したクルツポは、再びそのまま飛んでいく。今度はわたしもそのあとを追った。

港には結構な数の船が停泊していたけど、まだ灯りがついていたのは一隻だけだった。しかも港の逆側、いちばん端の。

（なるほど、選ぶまでもなかったのね）

役目を終えたクルツポは満足そうにわたしの胸ポケットへと戻り、あとは人間であるわたしの出番だ。

その船は、停まっている他の船と比べるとひとまわり小さいようだったけど、本物の船を見たことがなかったわたしから見れば、充分に大きいといえる船だった。

船と岸のあいだに渡された木の板、その向こうに見える船室のドアは開けっぱなしになっていて、光がもれている。もちろんいくつかついている丸い窓からも光はもれているんだけど、そこに人影は見えなくて

（もしかして、誰もいないのかなあ?）

声をかける前に気になってしまったわたしは、トランクを海に落とさないよう両手で抱きこむと、勝手に木の板を渡っていつてドアからなかを覗きこんだ。

その瞬間、

「この船になにか用かしらん？」

「きゃあっ!？」

突然後ろから野太い声をかけられたから、驚いてトランクを足もとに落としてしまった。振り返ったわたしは、もう一度叫びそうになった自分の口を自分でおさえる。

(お、大きいおじさん……というか、オカマさん?)

確かに女言葉だったけど、見た目はわたしが本で見た船乗りのイメージそのまま、現実に抜け出てきたかのようなだった。ハムみたいに太い二の腕と太もも、いかつい体つき、おまけに毛深そう。みごと三拍子そろっていた。それなのに、立ちかたがなよつとしていて妙に女性的なのだ。

この人が船長なのだろうかと、思わずじっと見上げていたら。

「ン? どうしたの? アタシの顔になにかついてる?」

(あら……)

実に取っつきにくそうな外見とは裏腹に、オカマさんがふと見せた困り顔は意外にも人懐っこく見えて、わたしは小さく息を吐いた。

(だ、大丈夫そう)

「あのおつ、わたし、この島を出たいんです! もしこれから出港するなら、乗せていってもらえませんか!？」

「これからア? この船は客船じゃなくて一応貨物船なんだけど……」

…

オカマさんは言いながら、わたしを追い越してなかに入っていく。それからくるりと振り返って、

「アンタ、なにやらわけアリっぽいわネ」

にやりと笑ってきたから、

「す、水平線までくらい、長くいわけがあります!」

「アハハ、面白い娘ねエ。普通は山より高いとか、海より深いとか言つのヨ〜」

「うっ」

(そうなんだ……)

でもわたしはまだ、山を高いと感じたことも、海を深いと感じたこともなかった。たださつき、一本杉のところから水平線を見たとき 流れる雲の帰る場所を見たとき、それがはるかに遠い場所であることだけは、はっきりとわかったから。

「……わたし、水平線に少しでも近づきたいんです」

まっすぐに見上げて告げたら、オカマさんの表情が少し変わった。からかうような顔から、真面目な装いに。そしてふいっとわたしに背を向けると、自分の足もとに向かって、

「ねエリラード！ 聞こえてんでシヨっ？ 出てきて返事をしてあげなさいヨ。船長はアンタなんだからネ！」

（えっ？）

オカマさんが船長じゃなかったことも驚きだけど、その唇から発せられた「リラード」という響きの美しさにも驚いた。

やがてコツコツという足音が聞こえてきて、部屋の奥にある階段からひとりの男性が姿を現す。

「しかしユレゼス、私は面倒ごとが嫌いです」

「アンタねエ」

「……っ！？」

わたしは目を見張った。その男性ほど「美しい」と感じた人を、これまで見たことがなかったから。しかもこのオカマさんと比べたらはるかに若い。おそらくわたしより五つ上くらいだろう。 ちなみにわたしは、花も恥じらう十五歳である。

「あれっ？ ねえちゃん鼻血出てるぞ！」

「え？」

その男性の後ろから一緒にあがってきた男の子が、わたしを指差して告げた。自分の鼻の下に触れてみると、確かに生ぬるい感触があった。しかも両方から！

（ああっ、鼻も恥じらってる！？）

「あああら、大丈夫ウ〜？」

オカマさん ユレゼスさんは呆れた声を出しながらも、自分の

袖でわたしの鼻をおさえてくれる。

「う、ごめんなさい。わたし、あんまり美形に耐性がなくなつて」

「耐性つ？ アハハ、やっぱアンタ面白いわネ！」

(うー)

恥ずかしい……でも、リロードさまから目を離すことはできなかつた。長く美しい銀髪を後ろでひとつに束ね、象牙のような白い肌を持ち、顔を顔たらしめているひとつひとつのパーツはまるで、神さまが百年かけて選び抜いたかのように完成されていて ああ、だめ。わたしの語彙ではいくら言葉を重ねても表現できそうにないわ！ おまけにリロードさまは、他のふたりとは違い船乗りらしいゆるい服装はしていなかった。まるでこれからダンスパーティーにでも行くような正装(?)で、リロードさまが船乗りだとわかる要素は、腰に差しているカトラス(剣)くらいしかない。

「笑いすぎですよ、ジェロト」

リロードさまが発したふたつ目の言葉で、わたしは我に返つた。その横を見ると、さっきわたしを指差した男の子 ジェロトくんが思いきり腹を抱えていたのだった。かろうじて、声は出ていなかったけど。

「ごめんなさい。でも、気持ちはわかるなあ。おいらだつて船長の美貌に慣れるのに、だいぶかかったもんね」

「ジェロトー！」

「ひいっ」

わざとらしく両手をあげて、ジェロトくんはリロードさまから離れて窓ぎわに近づいていった。

そのおかげで、見えたのだろう。

「 あ！ おっちゃん、出港準備だっ」

「『おっちゃん』は禁止つて言ってるでシヨ！ で？ ウォレイツが来たの？」

「そそ、多分追われてる」

(えっ?)

急に緊迫した空気が流れ、リロードさまとユレゼスさんが目を合  
わせた。

「どうやら、詳しい話を聞いている時間はなさそうですね」

告げたリロードさまに頷いて、

「アンタ、鼻血は？」

「あ、大丈夫です！」

ユレゼスさんがわたしに振ってきたから、とっさに答えた。ほん  
とはまだとまってないけど、自分でおさえればいい。　むしろ、  
リロードさまを見なければいいのかしら。

仕方なく取り出した手品用のハンカチを鼻にあてて、ジェロトく  
んが見ている窓のほうに近づいた。確かに、岸を走っている影があ  
る。そしてその少し後ろを、走っている光が。

「私が舵を取りますから、ジェロト、手を」

声に振り返ると、リロードさまは船首側のドアへ入っていくとこ  
ろだった。ユレゼスさんがいないところを見ると、下の部屋に行っ  
たのだろう。

「はい！」

ジェロトくんは元気よく返事をして、まだ開けっぱなしのままだ  
ったドアのほうへと向かう。

(手?)

手って、リロードさまに貸すってことじゃないのかな。でもだっ  
たら、リロードさまを追うはず……

考えているうちに、ぐらり船が揺れた。どうやらもう出港するよ  
うだ。

(ああ、そっか！)

「手を」っていうのはきくと、岸を走っている仲間のほうに手を  
貸してってことなんだ。

「わ、わたしも行くわっ」

ジェロトくんのあとを追って、ドアから外に出た。当然わたしが  
渡ってきた細い板は取りはずされていて、すでに岸から少し離れて

いる。

「ウォレにい、急いで！」

ジエロトくんが呼んだのは、相手がもう声の届く距離まで来ていたからだ。わたしからもはつきりと顔が見えた。まだ幼さの残るジエロトくんよりもいくぶん大人びた顔つきをしていたから、呼んだとおりの兄貴分なのだろう。

全速力で走ってきて、そのまま岸を蹴ったウォレイツくんに、わたしとジエロトくんはそれぞれ腕を伸ばして、片手ずつかまえた。反動でわたしたちまで船の外に引っ張られそうになったけど、ふたりがかりだったからなんとかこらえることができた。

「リレード〜っ！」

とてもじゃないけどもう跳べないほど離れた岸から、叫ぶ声が聞こえてきて顔をあげる。ウォレイツくんを追っていた人だろう、ハシチング帽みたいのをかぶっているせいか顔はよく見えなかったけど、どうやらリレードさまと同じくらいの年齢の男性のようだった。

(いい大人が、なんで子どもを追っかけてたのかしら?)

「ねえちゃんっ、もっとそっち引っ張って！」

「あ、ごめん」

自然と抜けていた腕の力を、もう一度こめる。それを支えに、ウォレイツくんが船の上に這いあがってきた。彼は彼ですごい腕力だ。ウォレイツくんが完全にあがったのを確認してから、手を離れたジエロトくんは肩をぐりぐりとまわしながら。

「ウォレにい、今回はぎりぎりすぎ！ ねえちゃんいなかったら危なかったよ」

わたしに視線を向けてきたから、むしろこっちが驚いてしまった。「あら、わたし役に立った？」

「立った立った、大助かり！ だってウォレにいのほつがおいらより重いんだもん。あんまり勢いつけてこられると、とてもじゃないけど支えきれな でっ」

ジェロトくんが言いおわる前に、立ちあがったウォレイツくんのゲンコツが飛んだ。

「しょーがないだろ、おれのほうが身長あるんだから  
それからついと、わたしのほうを見て、

「おまえ誰？」

わたしと身長が同じくらいだった。ついでに、多分歳も。だからタメロなのか、誰に対してもそうなのかはわからないけど。

「わ、わたし、ロロ家のメイリーよ！ よろしくね」

自己紹介をできるのが嬉しくって、胸がドキドキした。先に手を繋いでしまったせいか、睨まれていても怖くはなかった。

「……ふん」

ウォレイツくんは鼻を鳴らして、わたしの横を通りすぎる。かわりのようにジェロトくんが反応して、

「へえ、ねえちゃんの名前、メイリーっていうんだ」

そう告げた後ろから今度は、

「メイリーはいいけど、ロロ家ときたかア」

下から戻ってきたのだろう、ユレゼスさんが顔を出した。

あ

の、人懐っこい困り顔で。

「ねエリラード、やっぱとんでもない拾いものをしちゃったみたい  
ヨー！」

あたりはまっ暗闇なのに、煌々とした灯りはむしろ、わたしが長いあいだ暮らしていた部屋よりも明るいくらいだった。

そんななか。

「かくかくしかじか、というわけなの」

わたしが最初に覗きこんだ大きな船室で、ウオレイツくん以外の三人がわたしの話を聞いてくれていた。「以外の」とはいつても、舵担当のウオレイツくんがいる奥の小部屋へのドアは、まだあいたままになっていたから、わたしの話はちゃんと聞こえていただろう。「ふーん、なるほどねエ」

あぐらをかいて直接床に座っているユレゼスさんは、オカマのくせにひげも伸び放題のあごをさすりながら納得の声をあげた。

そこに、わたしと一緒に椅子に座っているジエロトくんが、「って、おっちゃん今のでわかったのか!? メイリーねえちゃん、かくかくしかじか」しか言っていないじゃん!」

「だーかーらー、『おっちゃん』はやめてって言うてるでシヨ! アンタいつもそこだけ無視するんだから……。で? 話は大体わかるわヨ。おおかた、好きでもない男と結婚させられそうになって家出てきたって、そんなとこじゃないノ?」

(おおっ)

驚いたことに、ユレゼスさんの予想は見事に当たっていた。

「だって嫌に決まってるでしょ!? 一度も屋敷から出られないまま、恋も知らずに好きでもない男に抱かれて、やがては老いて死んでゆくなんて、そんな人生ありえないっ!」

こぶしを握りしめて訴えると、ジエロトくんは半分呆れたような口調で、

「大袈裟だなあ」

「大袈裟じゃない!」

船乗りの一員である彼には、きつとあの窮屈さは理解できないのだ。

「メイリー、『一度も屋敷から出られないまま』、というのは？」

ひとりだけ、壁に寄りかかり立ったままのリラードさまが問いかけてきたから、わたしは急いで視線を動かした。

「そのままの意味よ。小さい頃からずっと、わたしは屋敷の外には出してもらえなかった。庭なんかじゃ、狭くて退屈で仕方なかったわ……ねえ、貴族ってみんなそうなの？」

問いを返したらリラードさまは、表情を変えないまま一度ユレゼスさんと目を合わせ、それからゆっくりと首を振った。横に。

(やっぱり！)

「島から出ない、というのであれば、大抵の貴族はそうでしょう。

だからこそ私たちは今こうして、あなたが船に乗っていることを疑問に思い、話を聞いているのです」

「でも、屋敷からも出さないととなると異常よねエ。それこそわけアリなんだろうけど」

「わけなんて知らないわよ！ わたしはずっと外に出たかった……海だって、今日まで見たこともなかったんだから……っ」

「メイリーねえちゃん……」

「屋敷に連れ戻されるのは嫌」とか、「本当に出られたんだ」とか、いろんな思いが混ざりあって鼻の奥がつんと痛んだ。これはきつと、鼻血のせいじゃない。

「船長、メイリーねえちゃんかわいそうだよ。しばらく船に乗せてあげようよ」

「海さえも見たことがなかった」というわたしの言葉によほど驚いたのか、ジエロトくんの言動は同情的なものに変わっていた。

自分よりも幼い子に同情されちゃうなんてなんだか情けないけど、この際なりふりかまっていられない。

「お願いしますっ、リラードさま！」

両手を組みあわせ、精一杯のうるうる目で訴えた視線の先でわたしは、リリードさまが盛大に脱力したのを見た。

「あ、あの、メイリー？　なんですか、その『リリードさま』って「あー、だっついていかにも『さま！』って感じてしょ。わたし、心のなかでもリリードさまって呼んでるの（はあと）」

「アハハ、まあ確かにこの上なく似合ってはいるけどネ！」

「あなたはやめてくださいよっ？　ユレゼス」

「ハートマークはつけないから安心して（はあと）」

「……………」

「で？　そいつを海に置いてくのか、連れてくのか、結局どっちなんだよ？」

リリードさまが言葉を嚥んだのを見計らってか、イライラしたような声を挟んできたのは奥にいるウォレイツくんだった。

リリードさまは深刻そうな表情に戻して「そうですね」と呟いたあと、

「荷物としてなら、あなたを運びましょうメイリー。家出を助したとして、あとで訴えられるのは面倒ですから」

「それで充分よ」

わたしだつて、なるべくなら他の人を巻きこみたくはないのだから。この家出の半分は、多分わたしのわがままで成り立っているのだから。

「でもさアリリード。荷物なら荷物で、もらわなきゃならないものがあるでシヨ。この娘、どう見ても持ってなさそうなんだけどー？　ユレゼスさんはばかして言ったけど、それには外を知らなかったわたしでもピンときた。

「お金なら、今は確かにないけど、ちゃんと稼いで払うから大丈夫っ」

「稼ぐって……屋敷から出たこともないのに、一体どうやってヨ？」

「あー、わかった！　ねえちゃん手品師だな？　だからそんな格好してるんだ」

「ジェロトくん正解！」

すかさずわたしは椅子から跳ねるように立ちあがると、なにもものが置かれていないところまで移動してトランクを置き、なかから手品用のシルクハットを取り出した。このシルクハットも衣装同様、この小さなトランクに入るよう折りたたみ可能な特注品だ。それをもとの形に復元してから胸にあて、お辞儀する動作を利用して、胸ポケットのクルツポをシルクハットの仕掛けのなかに移す。

「わー、おいら本物見るの初めてだ！」

ジェロトくんが嬉しそうに拍手してくれたからか、リリードさまもユレゼスさんもつられたように手を叩いてくれた。

(よーしっ)

屋敷の人以外に見せる初めての手品は、揺れる船の上。悪くない舞台だ、やってやるうじやない！

気合いを入れて、いつも右のそで口に隠している伸縮自在のステッキを取り出す。シルクハットを左手に持ったまま、右手だけでステッキを伸ばして、その先から赤い花を咲かせた。ある意味お約束の手品だったけど、ジェロトくんは「おおっ」と驚いてくれたようだった。

そのあとも、シルクハットから鳩を出したり、鳩から鳩用のシルクハットを出したり、ごく基本的な手品を披露した。せっかくだからと、さっきわたしが自分の鼻血で汚したハンカチを使って、汚れを消す手品もやってみせたら、ジェロトくんが、

「ねえね、だったらさ、そのメイリーねえちゃんの服についた血も消せる？」

「えっ？」

(ああ、そうだった……)

言われてわたしは、服の胸もとにもしっかりとついてしまった血を思い出した。ジェロトくんの言うとおり、手品で簡単に消せたら嬉しいのだけど。魔法のように見える手品も、そこまで便利なものではないのだ。だいいち、さっきのハンカチだって実際に汚れ

を消したわけではなく、同じデザインのきれいなハンカチを見せた  
だけなのだから。

「これはちよつと無理かなあ」

大切な衣装を汚してしまった哀しさを隠して、おどけるように告  
げたら、

「大丈夫だよー、おいらなら消せるから」

「えっ？」

「おいら、いつもみんなの服洗ってるから、血をきれいに取るのも  
うまいんだよ！」

椅子の上で誇らしげに胸をはったジェロトくんは、小さいながら  
も自分の役目をちゃんと理解している、大人の目をしていた。

「手品を見せてくれたお礼！ ね、いいでしょ？ 船長」

振り返ったジェロトくんと一緒に、わたしの視線も自然とリラー  
ドさまを追った。リラードさまはなにかを諦めたような表情で、ゆ  
っくりとひとつ息を吐くと。

「着替えはありますか？ メイリー」

可も不可も飛ばして、そんなふう聞いてきた。

「ありますとも、リラードさま！」

「その『さま』をやめたら、許可します」

「そんなあ」

「私は偉くもなんともない、ただの船乗りですから」

「名前がかっこいいのと、美しいのはそれだけで正義なのよ！」

自信満々に告げたら、やりとりを聞いていたユレゼスさんが不意  
に笑い出した。

「アハハっ、貴族の考えることはわからないわねエ？ リラード」

「ユレゼスっ！」

一瞬リラードさま……うっん、リラードさんが焦ったように見え  
たのはなぜだろう？

「メイリーねえちゃん、早く下で着替えておいでよ」

「あ、ごめんごめん」

思考半分でジェロトくんに促され、わたしはトランク片手に奥の階段から下の部屋へと向かった。行ってみると、狭くて暗いその部屋の半分は、船を動かすためのエンジンに占拠されていたのだった。（そっか、だから船を動かすときに、ユレゼスさんがここに来てたのね）

階段のすぐ近くにトランクを置いて、わたしはさっそく着替えはじめる。ドレープがたくさんついたようなドレスは、荷物になるだけだから持ってこなかった。とりあえず血のついた上着だけ脱ぐと、シンプルなシャツを一枚はおる。

（ドレスはともかく、手品用の服はもう一着くらいないときついかもなあ）

乗船料の他に余裕ができるくらい稼げたら、まずはそれを買おうと思った。

上に戻ると、すぐに洗ってくれるというジェロトくんに着着を預けて、リリードさんとユレゼスさんからいろいろな話を聞かせてもらった。

まずこの船は、ひと月かけて八つの島を数字順にまわる貨物船だという。つまり六の島・ローロポールを出発した今は、その西にある七の島・ナフェストルに向かっているということだ。なんで九つの島じゃなくて八つの島かというと、中央にある一の島・イースウエルは含まれていないから。

「じゃあまず、七の島・ナフェストルに着いたら、一発ばあーっと稼ぐからね」

借金じみたものはさっさと返してしまいたいから、わたしがそう宣言すると。

「それはいいですがメイリー、あなた、どこまでついてくるつもりですか？」

「うっ」

「待ちなっってリリード、具体的な目的がないのが家出っつてもでシヨ」

(なんかりラードさん、わたしに冷たいのよね)

わたしがいきなり鼻血なんか出しちゃったからかしら？ こうして話しているうちにだいぶ見慣れてきて、鼻がむずむずすることもなくなってきたけど。

「目的は、一応あるの！ せっかく覚えた手品だもん、いろんな人に見て喜んでほしいし……あとね、師匠を捜したいの」

「師匠？ って、手品の？」

食いついてくれたユレゼスさんに頷いて、

「そう、わたしが小さい頃、旅の手品師が屋敷を訪れてくれて、わたしはそのとき初めて手品を目にしたの。それであまりにも感激しちゃって、屋敷に泊まることになった手品師さんの部屋におしかけてね、『わたしに手品を教えて！』って、一晩中すがりついてやったのよ」

ふたりが渋い表情を浮かべたのを見逃さなかったけど、わたしは気にしない。

「それでどうとうその手品師さんも観念して、翌日から泊まりこみでわたしに手品を教えてくれたの！ わたしはね、いつもわたしと遊んでくれてたじいじを喜ばせたくって、必死になって覚えたわ」  
心のどこかで。

(もしかしたらこの手品がいつか、わたしをこの屋敷から解き放してくれるかもしれない)

そう感じていた部分もあるのだろう。

「そのおかげで、今こうして外に出られたの。だから一言、きちんとお礼を言いたくって……」

幼いわたしではまだ、満足にお礼を言うこともできなかった。閉じこめられていたわたしに、淡い恋を与えてくれたことも、なにひとつ言えないまま、彼は去っていったのだ。

「なるほどねエ、貴族の娘がどうやって手品なんか覚えたのかと思ったら、そういうわけだったのネ」

「うんうん」と頷きながら聞いてくれるユレゼスさんとは対照的

に、涼しい顔をしたリロードさんの心中は読めない。

「念のために聞いておきますが、その人のお名前は？」

「あのねっ、リロードさんほどじゃないけど、その人も結構きれいな顔をしてて、髪の毛は透けるような栗色だったわ。あと鼻が高くって」

「名前だけでいいです、名前だけでっ」

遮られたら、ユレゼスさんがまた笑った。なかなか笑い上戸な人みたいだ。黙っていればそれだけで、いろんな意味で威嚇できそうな見た目なのに。

「エフレイシドさんよ」

わたしがおとなしく名前を告げたら、リロードさんの眉がぴくりと動く。

「知ってる!？」

思わず椅子から身を乗り出したけど、リロードさんはすぐに首を振った。

「いえ、どこかで聞いたことがあるような気がする、そんな程度です」

「そっかあ」

「まあ珍しい名だからネ、意外と簡単に見つかるかもしれないわヨ？」

「だといいんだけど……」

しみみりと言葉を切った、そのときだった。

「おいっ、話してないでこの鳩なんとかしてくれ!」

言いながら、奥の部屋から出てきたウォレイツくんの肩に、ちゃっかりとクルツポが乗っていた。

「クルツポ! そっちにいたのね」

そういえばさつき手品をしたときに、放したままだった。「おいで」と指先を近づけてやると、「ポー」と鳴きながらこちらに飛び移ってくる。

「ウォレイツ、疲れてるでシヨ? そろそろ見張りかわるワ」

「よっこいしょ」と立ちあがるユレゼスさんに、ウォレイツくんは。

「いや、いい。それより腹が減ってるんだ。ジェロト待ってないで、先に食べてもいいか？ リード」

「それはかまいませんが、見張りはかわりなさい。船上での分担は平等にすると決めたはずですよ」

リードさんがきつぱりと告げると、さすがのウォレイツくんも「ちえ」と舌打ちをして。

「わかったよ」

そう応えると、なかに入ってきたのだった。

「じゃあ、アタシが先にいただくからネ」

「あ、ずりぞー！」

すれ違いざまにそういう会話をするところは、いかにも年相応の子どもなんだけど。

「……なんだよ？」

「う、ううん」

ウォレイツくんはわたしと目を合わせたとたんに、口を嚙む。クルツポが肩を気に入ってたくらいだから、そんなに悪い子ではないと思うんだけどなあ。

（あ、でも）

そういえば、島を離れるときに大人の人に追いかけてたっけ。「ねね、さっきなんで追いかけてられたの？」

試しに聞いてみたら 思いつつつきり睨まれた。

「おまえには関係ねーだろ！」

（うう、リードさんより度を超して冷たい……）

もしかして、わたしが女だからだろうか。男ばかりで気楽にやってきたのに、いきなり女が交じったらやっぱり嫌なものかな。

「ウォレイツ、そう怒鳴るものではありませんよ。だいいちあなた、同年代の友人が欲しいとか言っていますんでしたっけ？」

半分はとがめるような口調でリードさんが告げると、珍しくウ

オレイツくんが自分からわたしのほうを見た。

「…………おまえ、何歳だよ」

「十五」

「ガキくせー」

「なによっ、胸は人並みにあるつもりよ！」

「なっ…………誰が胸の話をしたよ!? おまえの言動とか思考の話をしてんだ！」

叫ぶオレイツくんの顔は、誰が見てもわかるほどまっかつかっかになつていた。それこそ、「か」がひとつ多くても気にならないくらいに。

「…………オレイツくん、意外に純情？」

「意外でも純情でもねーよ！ あと、気持ちわりーから『くん』なんかっけんなっ！」

びしつとわたしを指差して告げると、「おいジェロト！ 洗濯まだ終わんねーのかよっ」と言いながら下の階に逃げていった。

となりの部屋に行ったユレゼスさんの笑い声が、こちらまで聞こえてくる。

ふと、リラードさんと目が合ったから、

「オレイツさまならいいのかな？」

「冗談を言ったら。」

「鼻血ですまないと思いますよ」

真顔で返された。

またユレゼスさんが笑ったから、今度は船ごと揺れた。

わたしたちが七の島・ナフェストルに着いたのは、翌日の昼のことだった。普通に移動したなら数時間でたどりつく距離なのだけど、わたしたちはわざと海上で夜を明かしたのだ。

（船って結構お金がかかるのね）

なんでも、所属の港以外の港に停泊するときには、その時間が長ければ長いほど多くお金を取られる、という話だった。そしてこの船の所属は、一の島・イスウェルにある港。つまり、昨日のうちにこちらに着いていたとしても、ただ寝るだけなのにお金をよけいに取られてしまうから、海上で時間を潰したという寸法だ。

それでも、海上は海上で、海賊や天気や他の船など、危険なものがいっぱいあるらしい。だから海上で泊まるときははいつも、交替で見張りをしながら休むのだと、「おまえは気楽でいいよな」って厭味つきでウォレイツが教えてくれた。

（ご飯食べたら具合悪くなっちゃったんだから仕方ないじゃない！）

これが「船酔い」ってやつなんだって。

「初めて船に乗ったから、身体がびっくりしちゃったんじゃない？ ジェロトくんはそう説明づけていたけど、あながち間違いではないだろう。寝て起きたあとすっかり回復していたのは、横になっているあいだに慣れることができたからかもしれない。

「よーしっ、じゃあはりきって稼ぐぞーっ！」

トランクを片手に、声をはりあげながらわたしは、岸まで渡された細い板の上を歩いた。空は海を反射したかのように青く澄み、強く吹きつける風がかえって気持ちいい。

（あら、クルツポの仲間かしら？）

白い鳥が飛んでいたからついつい目で追ったら、残念ながら鳩よりもひとまわり大きな力モメだった。

「こら、あんまりキョロキョロして海に落ちるんじゃないわヨ？」

「はい」

後ろから降りてきたユレゼスさんに忠告されて、わたしは返事をしながら振り返ろうとした。

それが逆にまずかった。

「きやつ!？」

突風にあおられて傾きそうになった身体を、先に渡っていたリロードさんに支えられる。

「言ったそばから……」

「ごめんなさい!」

「メイリーねえちゃん、せっかくきれいにした服、またすぐ汚したらおいら怒るからねーっ」

岸にある大きな杭に、船から伸びているロープをくくりつける作業をしながら、ジエロトくんまでが声を飛ばしてきた。

そう、昨日洗ってもらった服は寝ているあいだにちゃんと乾いてくれたから、こうしてまた着ることができたのだ。クルツポだってきれいになった服の胸ポケットに、喜んでおさまっている。

(慎重に、慎重にっ)

また洗ってもらうのはさすがに申しわけないから、そこからは足もとに集中して歩いた。

そうして全員の下船が終わった頃、警備員のような格好をした男性がひとり近づいてきて、

「その船！ 登録証を見せたまえ」

まるで疑わしいものを見るような視線を、容赦なく向けてくる。

(なんだろ?)

他にも船はたくさん泊まっているし、この船が特別目立つというわけでもない。それとも周りで荷運びをしている人たちは、みんなこうして声をかけられたのだろうか？

不思議に思っただけで首を傾げていると、「あれ、検問官だよ」とジエロトくんが囁いてくれた。

リロードさんはさすがに慣れているのか、上着の内ポケットから

小さく折りたたんだ紙を取り出すと、まるでためらいのない動作で検問官に差し出す。受け取った検問官のほうがむしろ、たどたどしい動作でなかを確認していた。

「ふむ……一の島・イスウエルの貨物船か」

確認するように呟いたあと、顔をあげて。

「待て、乗組員の数が登録と違うぞ？ そのの、明らかに船乗りじゃないおまえ！ おまえ何者だっ!？」

思い切りわたしを指差してくる。

「わ、わたしは手品師のメイリーよ!」

「ロ口家のメイリーとは言わないほうがいい」と、昨日リリードさんにアドバイスを受けていたから、そんなふうに応えたのだけど。「手品師だと？ ますます怪しいなあ」

頭のとっぺんから、足のつま先まで。舐めるように這わせてくる検問官の視線は、はっきり言って気持ち悪い。

トランクを両手で抱きしめて思わず一歩退くと、リリードさんがあいだに入ってくれた。

「失礼。この娘は我々の荷物です。乗組員ではありませんから、問題ないでしょう?」

しかしそれは、どうやら逆効果だったようだ。

「かばいだてするとは、さらに怪しいぞ！ おまえ、本当は手品師ではなく泥棒だろう!？」

「な……っ」

(うら若き乙女を捕まえて、泥棒呼ばわり!?)

あんまり呆れてとっさには声が出せなかった。

わたしのかわりに、ジェロトくんが噛みついてくれる。

「こんな目立つ格好した泥棒がどこにいるんだよっ」

(あつ、でもそのフォローはちょっと恥ずかしいかも……)

検問官がいちいち大声を出すせいか、わざわざ立ちどまってこちらを見ている人もいたから、よけいに恥ずかしかった。

検問官のほうはわたしとは逆に、そういう視線も自分の味方だと

思っているのか、気をよくしたようになおも声を張りあげる。

「おまえたちも泥棒の仲間だな？ この登録証だつてどうせ偽ものだろう!？」

「ちよつとオ、勘弁してヨ」

その検問官のあまりにも強固な態度に、ユレゼスさんが呆れたように呟いた。

(なんなのよこの人！)

わたしたちを疑いたくて仕方がないらしい。      もしかしたら、

その対象は誰でもいいのかもしれないけど。今わたしたちが疑われているのは、間違いなくわたしの存在のせいだったから。

「わたしが本物の手品師だつてわかればいいんでしょ!？ 一瞬であなたの視界からこの船を消してあげるから、黙って見てなさい!」  
今乗ってきた船を指差して告げたら、検問官は迷うように視線を泳がせたあと。

「む、むむう……。      いいだろう」

ふいっと、視線を身体ごと船のほうへ向けた。

(チャンス！)

その隙にわたしは検問官の後ろにまわりこみ、その胸に思い切りトランクをぶつけてやる。ありつたけの遠心力を利用し      海に向かつて。

「うわあーっ!？」

不意をつかれた形になった検問官は、頭から海に飛びこんでいった。当然視界は水一色で、船の姿形などあるはずがない。

(相手の視線を操作するのは、手品の基本中の基本よ！)

「あらあら      貴族の娘もなかなかやるじゃないの、アハハっ」

呆れを通り越したような声で、ユレゼスさんは笑ってくれた。

「メイリーねえちゃんかつこいい!」

次いでそう手を叩いてくれるジェロトくんの、後ろにいるウオレイツも、わたしに背中を向けて珍しく肩を揺らしていた。明らかに、笑っているのだ。

「よくやった！ 派手なねーちゃん」

「すつきりしたぞ〜っ」

気がつくと、全然知らない人まで喜んでくれていた。

しかしそんななかでも、リリードさんだけはやっぱり冷静で。

「笑っている場合じゃありませんよ。とりあえず移動しましょう。」

どうせこのままでは、ここで荷物をおろすのも積むのも無理でしょうから」

言われてあたりを見まわすと、港にはびっしりとシャッターのおりた倉庫が並んでいた。でもここで作業なんてしていたら、確かにすぐ見つかってしまいそうだった。

「今夜は久々の宿屋になりそうネ」

笑顔から苦笑に変わったユレゼスさん。応えるリリードさんは、いち早く歩き出しながら、

「メイリーからは、その分多めに乗船料をもらわねばなりませんね」  
きつと半分以上本気の言葉を、吐いてくれた。

(うー)

わたし、よけいなことしちゃったのかな？

乗せてもらっているだけでも、それこそ「面倒」をかけているのに、これ以上は……

と、沈みかけたわたしの心は。

「やったー！ ふかふかベッド〜っ！」

飛び跳ねながらリリードさんを追い越していったジェロトくんのおかげで、あっさりと浮上する。

(そ、そうよね！)

少なくともジェロトくんは喜んでくれているのだ、変に責任を感じるよりも、確実に稼ぐことを考えたほうが建設的というもの。

「面倒」は、それを凌ぐ対価で返せばいい。

わたしの手品で！

港の検問官が、なぜあんな態度だったのか。

わたしたちがそれを知ったのは、宿屋に着いてからのことだった。「おや、船乗りさんたちが宿を取るとは珍しいね。なにかのお祝いかい？」

五人でぞろぞろ並んで入っていったら、カウンターにいた宿屋のおじさんにその声をかけられたから。

「違うの。わたしのせいで、港の検問官に捕まりそうになってしまった……」

他の四人はわたしのせいだなんて言いにくいだろうから、わたしが率先して答えたのだ。

それに続けて、  
「もしかしたら宿屋まで捜しにくるかもしれませんが、大丈夫でしょう  
ようか？」

リリードさんが確認したのは、「捜しにきてもかくまってももらえるか」と、おそらくそういうことなのだろう。

するとおじさんは、同情するような顔で笑ってくれた。

「ああ、どうせ見当違いな疑いをかけられているんだろう？ あの検問官になってからは、そういう苦情がずいぶんと増えているようだ」

「そういえばひと月前ここに来たときは、あの検問官じゃなかったわね」

口を挟んだユレゼスさんの言葉に、わたしは思い出す。

（ああ、そっか）

リリードさんたちは、八つの島をひと月で一周していると言っていた。つまり島単位で見れば、ひと月ごとに訪れているということになるのだ。

「リリード、おれ、船の様子を見てくる」

話が長くなりそうだと感じたのか、ウォレイツがリードさんの返事を聞く前に飛び出していった。

「あっ、おいらも行くよウォレにい！」

次いでジェロトくんも。

「まったく、あの子たちはせわしないんだから」

その背中を見送って、文句を言うように呟いたユレゼスさんだけ、その目に浮かんでいるのはどう見ても心配の色で、

「……もしかして、ふたりのお父さん？」

上目使いに尋ねてみたら、また盛大に笑われてしまった。

「アツハツハ。せめてお母さんと言ってちょうだいヨ」

「え、じゃあほんとに!？」

「アタシに相手がいるように見える？」

「うっ！」

(そもそも、相手が男になるのか女になるのかもわからないんだけど……)

本気で言葉に詰まってしまったわたしの横で、

「ぷっ」

それに反応したのは意外にも、ユレゼスさんではなくリードさんのほうだった。

「あら、珍しくリードのツポに入った？」

「なにを喜んでいるんで く……っ」

おそらく、笑いをこらえて文句を言おうとしたのだろうけど、リードさんはユレゼスさんの顔を見てまた口もとをおさえる。

「まったくウ、アタシの恋人は海だけだっていうのに！ 失礼な人たちネ」

「ご、ごめんなさい……」

ちよつと責任を感じて謝ったら、こちらを見たユレゼスさん是不意に目を細めて。

「貴族は面白い娘が多いの？」

「えっ？」

(どついつの意味?)

聞きようによっては、ユレゼスさんがわたし以外に「貴族の面白い娘」を知っていて、言っているようにも取れる。そういえばユレゼスさん、ことあるごとに「貴族の娘」ってことを引きあいに出していたつけ。なにか関わりがあるのかな?

表情から読み取るうとしてみたけれど、その飄々とした雰囲気迷惑されてなにひとつわからなかった。

それじゃあとリリードさんに視線を振ったら、なぜかそらされた。  
(んんー?)

リリードさんもなにか知ってるのかな。

わたしがそう、考えたときだった。

「おいっ、リリードが来てるってー!?!」

叫びながら誰かが入ってきたから、みんないっせいに振り返る。

(あら?)

リリードさんの知りあいらしいその男性は、屋敷から出たことになかったわたしでも見覚えのある格好をしていた。

「あれ? エンク……?」

リリードさんがその姿を認めて名を呼ぶと、その人はなぜか安心したようにひとつ息を吐き、ゆっくりと近づいてくる。

リリードさんもカウンターを離れて、

「お久しぶりです、エンク」

「って、悠長にあいさつなんて交わしてる場合じゃないだろーっ。

着いて早々捕まったのかと心配したじゃないかあ!」

「相変わらずのマイナス思考ですね。……まあ、当たらずとも遠からずですが」

「へ?」

思ったよりも親しい間柄なのか、ふたりは軽く握手を交わしたあと、リリードさんがこちらを振り返り、

「あちらで座って話しましょう。ご主人、少しのあいだロビーを借りますよ」

わたしとユレゼスさん、そしてその後ろの宿屋のおじさんに向かって告げた。

「はいよ」

と後ろから返事が聞こえたのを合図に、わたしたちもふたりのそばへと歩いていく。

リリードさんが選んだこの宿屋は、そう大きな宿屋ではなかった。簡単に説明すると、わたしが住んでいた屋敷の十分の一くらい。部屋数は、一階と二階を合わせても十部屋くらいしかないだろう。そんな宿屋の名ばかりのロビーだから、ソファがふたつしかなくても驚かなかった。

(こういうの、趣があるって言うんだっけ)

天井も床板もこのソファも、目に見えて古いのがわかるけど、だからこそ「いい」と感じられる部分もある。

「ところでリリード、この奇抜なファツションのお嬢さんは？」

ソファに座ってぐるりとあたりを見まわしていたわたしは、その言葉に視線を戻した。

「わたし、手品師のメイリーです。リリードさんたちの荷物で、決して怪しい者じゃありません！」

斜め向かいに座っているエンクさんに力説してみたけど、エンクさんはとなりのリリードさんをチラリと見やり、

「通訳を頼む」

(あ、ひどいっ)

じいじと同じような小さな小さなレンズの眼鏡をしているくせに、じいじのようにやさしくはないようだ。

「通訳もなにも、本当にメイリーの言うとおりですよ。ローロポールで積みました。どこまで運ぶかは、まだ決まっていますんが」

「ふむ……？ そっちはそっちでなにか面倒そうな事情がありそうだな」

エンクさんはもう一度わたしと目を合わせて、「よし、聞かなかったことにしよう」と呟くと、今度は小さく頭をさげてきた。

「僕はサエル運輸商会のエンクウェイナー。この島に運ばれてくる荷物、この島から運ばれていく荷物の管理を仕事としている者だ」

「運輸商会……ああ！ そっかあ」

わたしが屋敷のなかでも見たことがあったのは、屋敷になにかの荷物を運んでくる人たちはみんな、この人と同じ服 制服を着ていたからなのだ。それが運送会社の人ならば納得がいくし、サエル運輸商会というのはそれだけ大きな商会なのだろう。

「どうしたのん？」

わたしのとなりに座っているユレゼスさんが、不思議そうな顔をして聞いてきたから、わたしは慌てて首を振った。

「ううん、なんでもない、こつちの話だから……それより、だったらあの検問官に困ってるんじゃない？」

「ごまかすように言葉を繋ぐと、案の定エンクさんは大きく頷き、  
「ああ、そうなんだ。近頃島内で窃盗事件が多くてね。手口からしてどうも同一犯っぽいんだけど……なかに犯人がいるとなると国王への示しが見つからないから、外に犯人を求めているんだ。おかげで船の出入りに時間はかかるし、荷物の移動も規制されがちだし、荷物が遅れるとなぜか僕のせいにされるし！ ああもう、クビになるのも時間の問題なんだあつ」

後半は半泣きになっていた。

「なるほどネ、どうりで泥棒扱いされたわけだ」

その反応に慣れているのか、まるで気にせず納得したようにあごをさするユレゼスさんとは裏腹に、俯いたままのリラードさんの表情は冴えない。

「リラード？ まさか、僕の後任がおまえだなんて言い出すんじゃないだろうな！？」

なんの反応も示さないリラードさんが気になったのか、エンクさんが半分切れたように名を呼ぶと、やっと顔をあげ、

「この発端は、ひと月前に貴族の屋敷に入った泥棒、というわけですね」

(えっ?)

今そんな話は出ていなかったのに、リリードさんは確信があるように告げた。

応えるエンクさんの言葉も、どこか肯定を含んでいるようで、

「そりゃそうだろうけど、今問題になっっているのはそっちじゃないからな? 便乗して遊んでいる犯人は明らかに、島の内部にいる。

つまりあの検問官を納得させるには、そいつを捕まえるしかないってわけだ。最悪だよ! きみたち以外に誰が手伝ってくれるっていうんだ!」

「なにヨ、エンク。アンタ、手伝いを要請してきたの?」

呆れたように告げたユレゼスさんに、エンクさんはいっと白い歯を見せる。

「悪いか、こつちも人手不足なんだよ」

どうやらユレゼスさんも結構親しいみたいだ。

わたしがふたたりを交互に眺めていると、

「アタシらはみーんな、もともとサエル運輸商会にいたのヨ」

不思議がっているわたしに気づいたのか、ユレゼスさんが説明してくれた。

続けてエンクさんも、

「そうそう、リリードが独立するって言ったら、腕のいいのがまとめて抜けて大変さ。うっかり僕も抜けようかと思ったくらいだ」

「口で言うほど困っていないだろうに」

憎まれ口を叩いたリリードさんだったが、その口もとはちゃんと笑っていた。

そこにちようど、船の様子を見にいていたウオレイツたちが戻ってくる。

「あいつ、よっぱど腹が立ったんだろーな。濡れた服のまんま、他の船が来ても全部無視しておれたたちの船見張ってた」

「あれじゃあ船に近づけないよ」

覚悟していた事態ではあったけど、検問官の意地も相当なものだ。

ひととおりふたりの報告を聞いたリラードさんは、腕を組んで考  
えるような仕草をしたあと、

「いいでしょう、エンク。その問題はこちらでなんとかします  
よ。私たちだって、船をおさえられていてはどうにもなりませんか  
ら」

「そうか、助かる！ 島内の人間は誰も調べたがらなくてさ……き  
つと密かに僕の失脚を狙っているに違いないっ」

本当に困っていたのだろう、エンクさんはきっぱりとそう言い切  
ると、呆れ顔のみんなを無視して心からの笑顔を見せ、ソファから  
立ちあがって頭をさげた。

「いつもすまない、面倒な役目ばかりおしつけて」

「そんなこと」

「あらアエンク、それはお互いさまでシヨ？ 今さら言いつこなし

」

（ん？）

応えようとしたリラードさんの言葉を遮って、ユレゼスさんが笑  
った。どうもこの三人はさっきから、わたしをのけ者にして視線だ  
けの会話をしている気がする。

エンクさんをじいっと見上げていると、その視線に気づいたのか  
小さく苦笑して、

「お礼と言ってはなんだけど、滞在中の食費はこちらで持とう。と  
なりの食堂に話を通しておくから、なんでも好きなものを頼むとい  
い。僕の財布の中身を心配しながらね！」

「やったー！ ベッドの次はごちそうっ！」

「恥ずかしいからあんまり騒ぐなって、ジェロト」

ソファの定員がいつぱいだったため、横に立ったままだったジェ  
ロトくんが飛び跳ねて喜ぶと、ウォレイツが不機嫌そうに声をかけ  
た。船を見にいったときにもなにか、「恥ずかしい」ことをやらか  
していたのだろうか？

「じゃあ僕、そろそろ仕事に戻るよ。どこで誰が見張ってるかわか

らないからっ」

立ちあがったついでに、そのままソファを離れようとしたエンクさんを、わたしも立ちあがって呼びとめる。

「あ、待って！ この島のなかで、手品を披露できるような場所ってどこかないですか？」

島に住んでいるエンクさんなら、いい場所を知っているかもしれないと思って聞いたのだけど、エンクさんの表情は冴えなかった。

「手品かあ。以前なら、道端でもいろんな芸を見せてくれる人がいたけど。正直、今はやめたほうがいいと思う。街まで行けば安全だろうけど、行くなら時間的にも明日にしたほうがいいよ。人がたくさんいたほうがいいんだろ？」

（それはそうだ）

わたしがこくり頷くと、

「まあ、そのことも一応となり話しておくよ。ただし交渉は自分でしてくれ。じゃあね」

ぼんぼんと二度、わたしの頭を軽く叩いて、今度こそソファから離れていく。そして外へ出る前に一度振り返り、「頼んだよ！」と短く念押ししてから出ていった。まるで「お願い」という名前の荷物を置きにきたのだと、そんな感じだった。

「どーすんだよおまえ。そもそも手品できるところがなきゃ、金稼ぎもできねーんだろ？」

さっきまでエンクさんが座っていた場所にちゃっかりと座りこみながら、半分どころか全体が厭味があった口調で聞いてきたのはウオレイツだ。

（確かにそう）

だけど、わたしはまだ諦めていない。

エンクさんの影を追うように、わたしもそのままソファを離れる。

「メイリーねえちゃん？」

するとジェロトくんが、心配そうな声をかけてきてくれたから、「さっそくおとなり頼んでくるわ！ ジェロトくん、そこに座っ

てていいよ」

一度振り返って告げたら、珍しくわたしのほうが見下ろす視点でリリードさんと目が合った。

「待ちなさいメイリー、わたしたちも行きますから」

「えっ？」

（一緒に行つてお願いしてくれるの!？）

当然そう期待したけど、立ちあがったリリードさんが身体を向けたのは、わたしのほうではなくて。

「ここのところずっと船上で休んでいましたから、みなさんも疲れているでしょう？ 今日早めに休んで、明日の朝に備えるのがいいと思うのですが」

「そうねエ、この島は朝のほうが賑わっているものね」

リリードさんの意見にユレゼスさんが頷いて、それで決まりのようだった。

（つまり、ご飯食べに行くから一緒につてことね）

つくづくリリードさんは、わたしを甘やかしてはくれない。

でも、わたしにとってはそれがなんだか新鮮なことで。屋敷にいたときは、外へ出ることで外ならば大抵のことは叶えてもらえたから。お父さまとお母さまだって、忙しさからそばにいることはできなくても、「ちゃんと気にしているよ」って合図を送ってくれていた。今回のわたしの結婚話だって、逆にいえば気にしすぎるがゆえの暴挙だったのだろう。

小さい頃、じいじがよくわたしに、

「貴族であるということは、それだけで恵まれているのだということとを、決して忘れてはならないよ」

そう話して聞かせてくれたけど、屋敷を出たことがなかった

貴族以外の暮らしを知らなかったわたしには、全然ピンとこなかったものだ。

それでもやっと今、ほんの少しずつだけど、わかってきたような気がする。

(このまま一緒にいられたら、もっと知れるのかな?)

そんなことを考えながらわたしは、リリードさんの手を取って引張った。

「じゃあ早く行こつ、リリードさん!」

「ちょ、ちよつと……つ」

リリードさんは驚いた様子を見せたものの、手を振りほどくことなくついてくる。

(あら、リリードさんの手って結構かわいい!)

身長のわりに、そう大きくはないのだ。だけど内側はしっかり硬くて、普段の船旅がいかに大変なものなのかを物語っていた。

「あらあら、仲の良いことで(はあと)」

冷やかすような声をかけながら、ユレゼスさんもソファから立ちあがる。その後ろからジエロトくんが飛び出してきて。

「ずるいよ船長! おいらも手え繋ぐ!」

残っているわたしの左手に、小さな手を絡めてきた。

( つて、あれ? トランクは!?)

慌てて首だけ振り返ったら、

「つたく、ガキくせーな……」

ぼやきながらも、ちゃっかりウオレイツが持っていてくれたのだった。

「あゝ、楽しかったなあ」

思う存分手品を披露して、お客さんみんなから拍手　とお花をもらって、わたしは満足感でいっぱいだった。食堂から宿屋までのこの、ほんの少しの道のりでも帰るのが惜しいくらいだ。わたしを手伝ってくれたクルツポも同じ気持ちなのか、さっきから空を飛びっぱなしだった。

そんなわたしたちの後ろを歩くユレゼスさんも、

「アタシらも楽しませてもらったヨ。てつきり子ども騙しの手品しかできないのかと思ったら、アンタとんでもないわネ！」

……かなり褒めてくれているのだろう、多分。だって昨日船の上でユレゼスさんたちに見せた手品は、超初級用で素人でもできるような手品だったのだ。それこそ、「子ども騙し」と言われても仕方のないレベルの。

でも今回は

「ほんとにすごかったよ！　メイリーねえちゃんの手がいっぱいあるみたいだったあ」

ジェロトくんはまだ興奮がおさまらないのか、赤い顔をしてわたしを見上げてくる。いちばん前で食い入るようにわたしの手もとを見ていたけど、結局仕掛けを見抜くことはできなかったようだ。

もっとも、テーブル手品にはそもそも仕掛けがないものも多いから、どうやっているのかを見抜くのはかなり難しい。

(そう)

今回わたしが披露したのは、テーブルについて行う手品。主にコインとカードを使ったものだ。

最初食堂のおばさんに交渉したとき、「うちは料理を出すから、激しく動いたりして埃が立つようなのはちょっと……」という話だったから、わたしがそれを提案したのだ。それなら動かさずにひとつ

のテーブルでできるし、お客さんも参加できるからより楽しんでもらえるんじゃないかと思って。

それで実際にやってみたら、小さいテーブルもなんのそのの大好評！ お客さんたちが、「次は誰がそのテーブルにつくんだ!？」と揉めるくらいだった。そこにおばさんが割って入ってきて、「注文した数の多いお客さんからね!」なんて言ったものだから、注文がそこかしこを飛び交って大混乱。でもその分食堂の売り上げはすごく伸びて、帰りぎわにお花の上乗せまでもらってしまった。

ホクホク気分で宿屋のなかに入ったわたしを、クルツポと一緒にウォレイツの意地悪が追いかけてくる。

「けど、それでも宿屋の一泊分には満たないんだろ?」

「うっ、それを言われると……」

わたしはクルツポを胸ポケットにしまうついでに、そのままうなだれた。

さつきりロードさんに値段を確認したら、わたしが思っていたよりも宿代は高くて。そしてわたしが思っていたよりも、お花は少なかった。いかに自分が甘い考えだったのか、思い知ったのだ。

それでも、わたしの後ろから入ってきたりロードさんは珍しくすりと笑って、

「しかし、ここまでの乗船料はもらいましたからね。宿代は次に期待しましょう」

励まして( ? )くれたから、

「ん! 明日も頑張るもんっ」

気合いを入れたら、カウンターにいた宿屋のおじさんと思いきり目が合った。

「元気がいいねえ、おかえり。部屋は二階に用意しておいたよ」  
言いながら、鍵を差し出してくる。

(ふたつ? ああ、そっか)

港に入る時間を遅らせるくらい節約しているのだ、宿を取るに当たってひと部屋ずつ取るわけがなかった。そしてふた部屋というこ

とはきつと男女別で、わたしがいなければひと部屋ですんだのだから。

あのと看、港で検問官を倒したわたしに、リラードさんが「メイリーからはその分多めに乗船料をもらわねばなりませんね」なんて言ったのは、そういう意味もあつたのかもしれない。

鍵を受け取つたままそこを動けないでいるわたしをおいて、みんなは横にある階段をあがつていった。大喜びのジェロトくんを先頭に、ウォレイツ、ユレゼスさんと続き、最後のリラードさんが階段に片足乗せたままこちらを振り返る。

「どうしました？ メイリー」

「あ、えと……」

（謝つておいたほうがいいのか？）

一瞬そう考えたわたしを、

「心配しなくとも、あなたをひとりでは寝かせませんよ」

「へっ!？」

横からぶんなぐるような言葉を、リラードさんは吐いてきた。

「そ、それはどういう意味で……」

「いいから早く来なさい」

「は、はい!」

急かされて、リラードさんのあとを追つて階段をあがつていくと、三人が手前のドアの前で鍵の到着を待つていた。

片方は自分が使う鍵だからと、ひとつの鍵だけユレゼスさんに渡したら、

「こつちの鍵じゃないワ。そつちの『201』が三人部屋だつて、下のおっさんが言つてたでシヨ?」

（あ……）

よく見ると、鍵にそれぞれ数字の書いた札がついていた。なるほど、ドアに書いてある数字と対応しているのだ。

「ごめんなさい」

ユレゼスさんも充分「おっさん」なのに、宿屋のおじさんを「お

っさん」と呼んだことに妙なおかしさを感じながらも、わたしは鍵を取り換えた。

「じゃ、ほどほどにネ（はあと）」

「寝坊するなよ？」

「明日も遊んでね、メイリーねえちゃん！」

部屋の鍵をあけて、三人はそれぞれの言葉を残しながらなかに入っていく。

（や、やっぱりそういう分かれかたなんだ？）

さつきユレゼスさんが「三人部屋」って言ったから、そんな気がしてたけど……。

リリードさんはどういいうつもりなのだろうと、上目使いに見つめたら、

「では私たちも部屋に入りましょうか」

うさんくさいくらしいの会心の笑みを見せられた。

（うっ、美しすぎる……っ！）

ずっと一緒にいたせいで、この美しさにもだいぶ慣れたと思ってはいたけど、甘かったようだ。

「あの、リリードさん」

「なんですか？」

わたしがためらっているのがよっぱど面白いのか、まだ笑顔のままのリリードさんに言っただけで妊娠できそうよ。

「わたし、あなたの笑顔だけで妊娠できそうよ」

「ぶほっ!？」

リリードさんから変な音がしたのと同時に、目の前の部屋からなぜか爆笑が聞こえる。 いや、大爆笑か。

（あ、あれ？）

「ちよ、ちよっと来なさい！」

顔をまっ赤にしたリリードさんは、わたしの右手首を強引につかむとそのままとりのドア前まで引っ張っていった。そして鍵を奪い、ドアを開け、わたしを部屋のなかへとおしこむ。

勢いがつきすぎて、わたしは床に転がってしまった。

「なにをするのよっ、鼻血出さないだけ成長してるのに！」

「そういう問題じゃない！」

(えっ?)

怒鳴ったら怒鳴り返されて、さすがのわたしも少し怯んだ。

「リ、リリードさん……?」

ドアを閉めてわたしに近づいてきたリリードさんは、わたしを見下ろしてひとつ息を吐いたあと、それでも手を差し伸べてくれる。

「とりあえず、ベッドにでも座ってください。あなたに告白しなければならぬことがあります」

「え……」

(こ、告白!?)

それはわたしが屋敷にいた頃、自分にはまるで縁のない世界なのだと、本を読みながら思っていた言葉だ。

心なしか、リリードさんの指先が熱い気がした。ふたつ並んでいるベッドにそれぞれ腰掛け、近い位置で向かいあう。

(あれ、なんか心臓がうるさいっ)

初めて手品を見たときの鼓動に似ていた。

こ、これが恋……?」

しかし。

リリードさんの言葉は常に、わたしの斜め上をゆく。

「宿に泊まることにさえならなければ、別れるときまで黙っていいうと思っただけです」

「がっ!？」

リリードさんがすいと、照れたように視線をそらした。

「私はあなたと同じ女です、メイリー」

「っ!？」

あまりに驚きすぎて、声が出なかった。

でも、「それなら」と思うことはあった。

「あっ、じゃあ『リラちゃん』って呼んでもいい!？」

(すごくかわいいじゃない！)

自信を持って聞いたわたしに。

「  
っ」

今度はリラちゃん(もう呼んじゃう！)が絶句する。ついでに頭を抱えて、深く長い息を吐いた。

「……メイリー、あなた、驚いて最初に思いつくことがそれなんですか？」

「あら、呼びかたは重要でしょ！ 『リラードさま』は譲ったんだから、これは許可してよねっ」

「できません！」

「じゃありらちゃんも『です・ます』はずして！ そしたらわたしも『ちゃん』を取るから」

「でっ……できません」

「それならおあいこでしょ」

「く……っ」

よほど自信がないことなのか、リラちゃんは「観念した」とでもいうふうな、後ろに束ねていた髪の毛をほどくとそのままベッドに身体を沈めた。

それからチラリとこちらを見て、

「あなたは、どこまでも意外な反応をする人ですね」

「そうかな？ わたしから見れば、リラちゃんだって充分そうだけ  
ど」

わたしが女でも、貴族でも、変わらない毅然とした態度で接してくれた。突き放したような言葉の後ろにも、なにか隠れてものがあるような気がして。

(全然嫌な気はしなかったな)

わたしを嫌いだからそう言ってるんじゃないんだってというのは、確かに伝わってきたから。

( ああ、そっか )

「もしかしてリラちゃん、わたしに女だってばれるのが嫌で、距離

を置いてたの？」

「瞬だけ大きく目を見開いたりラちゃんは、頷くようにあごを動かして、

「それだけではありませんけどね。知る必要のないことは、知らなくとも問題なく生きていけるんですよ」

半分はひとりごちのように呟いた。

わたしもリラちゃんに倣って、ベッドに背中を預ける。

「知ってるのは、ユレゼスさんたち三人と……あと、エンクさん？」

「サエル運輸商会のかたがたは、みんな知っています。私が入るときにずいぶんと面倒をくれましたから。船乗りは基本的に男の仕事ですからね。もともと男勝りな私でしたが、本格的に男装をするようになったのはそのためです」

(なるほどー)

昼間エンクさんと話をしたとき、「いつもすまない、面倒な役目ばかりおしつけて」と頭を下げたエンクさんに、リラちゃんが応えようとしたのはきつとこれだったのだろう。

わたしがそのことを思い返していると、

「それより、メイリー。あなたがさきほどやっていた手品は、一体どうやって覚えたのです？ あれだけのテクニク、小さい頃あなたには無理だったでしょうに」

「あ……」

自分のことから話をそらすためだろうか、次にリラちゃんが選んだのは手品の話題だった。

わたしは思わず身体を起こして、

「リラちゃん、手品に詳しいんだ!？」

コインやカードの手品が、仕掛けではなくテクニクによるものなのだを知っていたから驚いたのだ。

横になつたまま頭の下で手を組んだリラちゃん(セクシーポーズ!)は、小さく笑うと、

「島を延々とまわっているとね、いろんな人に出会うのですよ」  
答えになっっているような、いないような、微妙な言葉を返して  
く。

(リラちゃんも旅の手品師に会ったのかな?)

聞いてもどうせ答えてくれなそうだから、そう思うことにしよう。  
かわりにわたしは、自分の答えを投げた。

「リラちゃんが言うとおりね、小さい頃はテクニク系の手品が全  
然できなかったの。でも、師匠がわたしのためにわざわざ手品の本  
を送ってくれたり、じいじが他の手品師を呼んでくれたりして、協  
力してくれたから。今すぐはできなくても諦めちゃいけないって、  
一生懸命練習したのよ」

わたしの手品の師匠・エフレイシドさんの贈りものはいつも一方  
的で、差し出し人の名前しか書かれていなかった。だから、「もし  
かしたらじいじの知りあひかな?」とか、「じいじがなりすまして  
るのかな?」とか思うこともあったけど、じいじが亡くなる前に「  
それは違う」ときっぱり否定してくれたから、今のわたしがあ  
る。(たとえじいじがいなくなっても)

わたしの手品を楽しみにしてくれている人が、この世界にひとり  
はいるんだと思うと、練習にも身が入った。

「それは、家から出るために?」

再び問いをふられて、わたしははっと我に返った。

「そう……わたしは自分を守る力を、手にしたかったの」

「あらあら、どうしたのふたりとも。ずいぶんと眠そうな顔してエ」  
朝、下におりていったら三人はもうとなりの食堂に行ったという  
から、慌てて向かったらユレゼスさんにそんなことを言われてしま  
った。

わたしとリラちゃんは、お互いにクマの見える顔を見やって眉尻  
をさげる。

(だって意外と話が弾んじゃったんだもの！)

考えてみれば、わたしもリラちゃんもそばに親しい同性がいない  
という生活を送っていたのだ。言いたくても言えないことが自然と  
身体の底にたまっていったのか、一度口火を切ったらとまらなかった。

リラちゃんも、そんな自分に戸惑っていたのだろう。ときおり「  
自分らしくないことを言っている」と気づいては、わたしにばれな  
いよう顔をそむけて赤面しているようだった。耳まで赤かったから  
ばればれだったけど。

(まるまる百パーセント、クールなわけじゃないのよね)

きつと半分くらいは、我慢で成り立っている。わたしにはそう感  
じられた。

「こら！ 見つめあってないでさっさと座りなさいヨ。昨夜はよほ  
どお楽しみだったみたいね、ムフフ」

「寝坊するなつて言ったのに……」

「おいらもメイリーねえちゃんとお話したかったよ」

「はいはいごめんなさいっ！」

好き勝手言ってくれる三人を、テキストにあしらってテーブルに  
ついた。わたしの横に座ったりリラちゃんは、苦笑だけで応えている。  
さすがにこの三人の扱いにはかなり慣れているのだ。

ふとテーブルの上を見ると、皿はすでにカラになっていて、三人  
がなにを食べたのかはわからなかった。

(えつと……)

普通のお店では注文しないものが出てこないんだって、わたしは昨日学んでいた。

「リラちゃん、なに頼む？」

メニューを見ながらとなり振ったら、向かいでコップを傾けていたウォレイツがなぜか噴き出した。

「ちよつと！ 汚いじゃないっ」

テーブル上に白い飛沫が落ちる。コップの中身はミルクだろうか？ まだ注文する前でよかった。

「『リラちゃん』って……リレード、言わせといていいのかよ？」

啞然とした表情のウォレイツに、リラちゃんも真顔で返す。

「不本意ながら、交換条件でしたので」

(ああ)

わたしが「リラちゃん」って呼んだから驚いたのか。

「おいら、布巾借りてくるよ」

気の利くジェロトくんがそう椅子から飛びおりたとき、ちよつと両手にトレイを載せて運んできた食堂のおばさんとぶつかった。

「おつと……大丈夫かい？ って、なんだい、ひどいありさまだね」

おばさんはテーブルの惨状を見て笑うと。

「お客さんにやらせて悪いけど、ちよつとお皿を寄せてくれないかい。布巾ならほら、あたしのエプロンのポケットにかかっているだろ」

「あ、ほんとだ」

ひよいと布巾を手にしたジェロトくんのために、わたしたちが皿を重ねてスペースをつくる。あいたところをジェロトくんが拭いてから、おばさんは両手に持っていたトレイをおろした。

「はい、どうぞ」

(まだ注文してないのに?)

トレイに載った皿の上にはトースト。そしてふたり分。明らかに、わたしとリラちゃんのためのものだった。

わたしが不思議に思っているのが表情からばれたのだろうか、ユレゼスさんが目を細めて、

「この島の朝食はトーストと相場が決まっているのヨ」

「あ、そうなんだ」

屋敷のなかでは朝からいろいろなものが出ていたから、わたしにはそういう発想がなかった。またひとつ勉強になった。

(それにしても……)

このトーストはさすがすぎる！ だって上にベーコンエッグが載っているのだ。これはただごとじゃない。おまけに、ナイフもフォークもついていない。一体どうやって食べるって？

皿を凝視したまま動けないでいるわたしに、となりのリラちゃんかなにかの紙を差し出してきた。

「これで手を拭いて、手で食べるのですよ」

「えっ？」

受け取るとしっとり濡れているそれは、調味料なんかと一緒に最初からテーブル上に置かれていたものだ。つまり、本当にその用途で

「……そんなことしたら、お行儀が悪いつてナイフとか飛んでこない？」

確認せずにはいられなかった。

そもそもわたしにとつては、トーストの上にもものが載っているだけでも奇跡なのだ。屋敷ではいつも別々に出され、わたしが面倒だからと上に載せるとこっぴどく怒られたものだった。

しかしみんなはなぜか、それぞれに視線を合わせるとなんともいえない苦笑を浮かべていて。

(な、なにか変なこと言っちゃったかな?)

戸惑うわたしに、まだ布巾を手にしたままのジェロトくんが、

「メイリーねえちゃん、それってナイフ投げるほうがお行儀悪いと思うんだけどなあ」

首を傾げた仕草がかわいくって、同時にその内容にも、わたしは

思わず笑ってしまった。

「確かに、そうね！」

それなら遠慮なく、かぶりつくことにしよう。

両手でトーストを持ちあげて、反対側からベーコンエッグが落ちないように注意しながら、「いざ！」と大口をあけたときだった。

リラちゃんが、まだそばにいたおばさんにこんなことを言ったのだ。

「ではすみませんが、私にナイフとフォークをお願いします」

「ああ、そうだったね。ちょっと待ってな」

わたしはそのまま動作をとめた。

「……なによ、リラちゃんがかぶりつかないわけ？」

「なにぶん、イメージというものがありますので」

「はあ！？」

「そのへんは街に行けばわかるわヨ。さっさと食べちゃいなさい？」  
ユレゼスさんに促されて、わたしはおとなしく頷く。

「……はい」

わたしたちが寝坊したせいで、朝から予定が狂っているのだ。少しでも時間短縮しないと！

そう気合いを入れてわたしは、今度こそトーストにかぶりつく。ナイフやフォークで少しずつ食べることに比べたら、はるかに楽だし早かった。……ただし、手はかなり汚れるけど。

一方となりのリラちゃんはどうと 涼しい顔をして、そんなわたしよりもはるかに早くトーストを消化していた。

（い、一体どうなってるのよ……！？）

トーストを切った次の瞬間にはもう、その切った部分はなくなっている。まるで仕掛けのない手品を見ているかのようだった。これまでに何度か一緒に食事をしているけど、そのときは別に急ぐ必要がなかったから、おそらくわざとゆっくり食べていたのだろう。

（まずい、わたしが足を引っ張っちゃった）

手品師として（？）、ものを消すという行為で負けるわけにはい

かないと、さらにもうひと口。

かぶりついたらとこで

「なあ、『国王に隠し子がいる』って噂、本当なのかな？」

「さあな、一の島・イスウェルでは一時期噂になっていたようだがな」

(え……)

後ろの席から聞こえてきた話題に、わたしは思わず嘖き出しそうになる。焦って両手で口をおさえた。

「メイリー？ 大丈夫ですか？」

呆れ声を隠そうともしないリラちゃんに、わたしはもごもごと口を動かしてから。

「うぐっ……う、うん、大丈夫」

なんとか喉の奥に押しこんで、ウォレイツみたいにテーブル上にまき散らさずにすんだ。

(か、隠し子って……！？ 一国の王さまでも、そんな噂立てられちゃうんだ？)

まるで新聞に取りあげられていた舞台俳優のスクヤンダルみたいだ。お父さまもお母さまも、わたしが屋敷の外のことを知るのを嫌ってわたしから新聞を隠すようにしていたようだけど、わたしはちゃっかりその場所を探しあて読んでいたのだった。

一度トーストを皿の上に戻したわたしは、後ろの席で話している男性たちには聞こえないよう、リラちゃんの耳に口を近づけて尋ねる。

「ねえ、王さまって尻軽なの？」

「ぶっ」

次に喉をつまらせたのは、リラちゃんのほうだった。

「リラちゃん！？ 待ってて、今飲みものを」

「い、いえ、平気ですから」

リラちゃんはひとつ深い息を吐き、それからさっきわたしがしたように、わたしの耳に口を近づけてきた。

「『浮気性か?』という意味なら、その言葉は男性にはあまり使わないと思いますよ。まあ、陛下が側室を持ったことがある、というのは事実ですが」

「ふうん?」

「ただ、王妃さまは気性の激しいかたなので、そのことに関してはずいぶんと怒っていたようです」

「そういえば、『浮気のばれた夫ほど、社会的地位の低いものはない』って、新聞にも書いてあったわ」

確か離婚問題を取りあげた記事のときだった。

「メイリー……あなた、どれくらい私の食事を邪魔すれば気がすむのですか」

「えー? なによそれ」

と、リラちゃんの話聞くため前を向いていた顔を戻したら、リラちゃんは口をおさえて笑っていたのだった。

「こらアっ、ふたりともなにをごちゃごちゃ言ってるのヨ。早く食べなさい!」

「あ、はいっ!」

「すみませんね、ユレゼス」

ユレゼスさんに促され、わたしとリラちゃんは再び食事へと戻った。

早食い競争の結果は やっぱりリラちゃんのほうが早かった。なんか意味もなく悔しい!

この七の島・ナフェストルは、朝早くから昼頃まで行われる朝市で有名な島らしい。よって街への人出が最も多いのは午前中であり、そのためリラちゃんは「朝に備えよう」と言っていたのだった。

さいわいにも昼前には島の中心部にある街に着くことができ

わたしはそこで、いくつかのことに気づいた。気づけてしまった。

広い道に沿ってたくさんの出店が並び、客引きの声や通行人の話し声などが絶えないその空間のなかで。なによりも人の目をさらっていたのは、リラちゃん存在そのものだったから。

(リ、リラちゃんすごい人気……！)

リラちゃんが朝市に一步足を踏みこんだ瞬間、どこからともなく現れた女の子たちが、「キヤー！」とか「リロードさぁん(はあと)」とか叫びながら、いつせいにリラちゃんを取り囲んでしまったのだ。わたしはその圧倒的な迫力におされて、輪の外に追い出された。とっさに周りを見ると、そうなることを予想できていたのだろう、ユレゼスさんたちは最初から離れた位置にいた。そして「先になか行ってる」とジェスチャーで告げると、さっさと逃げてしまう。

(こついうことだったのね……！)

そう、わたしが気づいたいくつかのことというのは、「そのへんは街に行けばわかる」と言っていたユレゼスさんの言葉や、リラちゃんが男装をしている理由だ。リラちゃんは「サエル運輸商会に入るときにもめたから」みたいに言っていたけど、きつとそれだけじゃないのだ。

(そりゃあ、ユレゼスさんみたいな船乗りのおじさんたちに言い寄られるよりは、女の子たちのほうがまだ害がなくていいわよね……)

勝手な想像をして、ひとり笑ってしまった。

そのあいだにも、相変わらず慣れた様子のリラちゃんは、女の子たちを落ちつけながら窃盗事件の話聞き出しているようだ。わた

しは少し離れた位置からそれを見守っていた。あわよくばここでも手品を披露しようと思っていたけど、リラちゃんの人気にはとても敵いそうにない。

不意に。

「っ!?! うぐ……っ」

後ろから口もとと胸のあたりをつかまれて、建物の陰に引きずりこまれた。

(もしかして昨日の検問官!?)

と頭をかすめるうちに、トランクを取り落としバランスを崩して後ろに倒れる。その衝撃に驚いたのか、クルツポが胸ポケットから飛び出していった。

「おっと、危ねえなあ」

それでもなぜかその人がかばってくれたから、わたしは地面に尻や背中を打ちつけずにすんだ。

(でもこの声っ)

どこかで聞いたことが

まだ口もとをおさえられたまま、強引に首を捻って横目で確認すると。

(あつ、六の島・ローロポールでウォレイツを追いかけた人だ!)  
頭の上に載っているハンチング帽を見て、思い出した。

「なあお嬢ちゃん、ちよつと聞きたいんだが」

その人はわたしの耳もとに口を寄せ、囁くように告げる。吐息がかかってくすぐりたい。

「リラードはなにをしようとしているんだ? お嬢ちゃんも、彼女に盗まれたのか?」

「え……?」

(彼女!? この人も、リラちゃんが女だって知ってるのね)

それに「盗まれた」って?

どうやら危害を加えるつもりはないみたいだったから、わたしは少し落ちついて、質問に答えようと口を動かした。話すには、その

人の手が邪魔だったから。

「お、悪い」

やっと自由になった唇で、

「わたしは自分の意思で船に乗ったの！ 盗まれたってなに？ そ  
もそもあなた誰よ！？ なんてリラちゃんのこと追って……ふぐつ  
言いおわる前に、またふさがれた。」

「頼むから小声にしてくれ。じゃないと喋らせないぞ？」

仕方なく、コクコクと頷いてやると。

「よし」

今度こそちゃんと手を放してくれた。

それから、

「俺は探偵のサディトルだ。サディと呼んでくれていい」

「探偵！？ なんてうさんくさい！」

「そんな格好をしているお嬢ちゃんに言われたくはないがな」

「うつ　で、でも、なんで探偵さんがリラちゃんを？」

六の島・ローポールで追われていたのはウォレイツだったけど、  
あのとときもこの人　サディが呼んだのはリラちゃんの名前だった。  
そして今も。

船から見た立ち姿から想像していたように、二十歳前後に見える  
サディは小さく眉間にしわを寄せて。

「俺は　数々の窃盗事件の容疑でリラードを追っている」

「え……」

（それって今この島で起こってる事件と関係あるの？）

一瞬そう思ったけど、そんなわけがない。だってリラちゃんがこ  
の島に着いたのは昨日で、その前に来たのはひと月も前のことな  
だから。

そしてそれ以前に、リラちゃんが盗みなんてする人じゃないこと  
は、昨夜の会話で嫌になるほどわかっていた。そもそも、女とばれ  
るのを我慢してまでわたしと同じ部屋に泊まってくれたのは、屋敷  
から出てきたばかりのわたしをひとりにするのは怖かったからだ、

語ってくれたくらいなのだ。

「リラちゃんは悪いことできる人じゃないわ」

「盗みは悪いことだろう？」

「だから、わたしは盗まれてきたんじゃないってば！」

「いや、そうじゃなくてだな……」

「それよりあなた、本当に探偵なんだたら、本物の犯人を捕まえるの手伝ってよっ」

「へ？」

わたしは昨日エンクさんに聞いたことを話してやった。わたしたちのほうに先に発つたのだからあたりまえだけど、サディもこの島に着いたばかりのよう。島で起こっている窃盗事件のことは、まだ知らなかったみたいだ。

全部話しおわると、サディはやっとわたしを捕まえていたもう片方の手も放して、「うーむ」と唸りながら両手を組んだ。

しばらくそうしていたあと、ふと顔をあげ、

「それを、リロードが調べるって言ったのか？」

「だからそうだって」

「ふーん？ いいだろう、なにかわかったら連絡する」

「ほんと!？」

(なんだ、意外と話がわかる人なんだ?)

それなら「さん」づけしてあげてもいいかな。

好感度がアップしてそんなことを考えたわたしを、なぜかジロジロと見てくるサディ。

「な、なによ？」

「おまえ、見た目より胸あるんだな」

「はあ!？」

「なに言ってるんだよ、エロおやじ。さっさとメイリーから離れろ」

「あ! ウォレイツ……」

気づかれないようにそっと近づいてきたのか、サディの後ろに力

トラスを突き出したウォレイツが立っていた。身体に見合わないその大きなカトラスは、おそらくリラちゃんのものだ。わたしが捕まっているのに気づいて借りてきたのだろうか。

「『おやじ』はひどいなあ。俺がおまえんとこの船長と同じ歳なの、知ってるだろ？」

振り返りながらそんなことを言ったサディは、両手をあげたついでにかぶっていた帽子を脱いだ。帽子を脱ぐという行為には「降参する」という意味があるのだ。

(うわあ、サディって面白い髪の色してる)

リラちゃんみたいなきれいな銀髪と、少し灰色がかかった黒髪が同居しているような、不思議な髪の色だった。

と、ある意味どうでもいいことを考えてしまったわたしの耳に、

「メイリーっ？」

遠くからリラちゃんが呼ぶ声が届いて、でもそれに反応したのはわたし以上にサディのほうだった。

「おっと……じゃあまたあとでな！」

軽く手を振ったかと思うと、素早い動作で立ちあがりウォレイツの横をすり抜けていく。

「おい、待てっ」

とつさにカトラスを振ったウォレイツを、華麗にかわして。

ちようどその背中が視界から消えた頃、逆の道からリラちゃんが顔を出した。

「メイリー、ここにいたのですか。……どうしたのです、そんなところに座りこんで」

「えっ!?! あ、えーと……ちょっと転んじゃって」

なんとなく、サディのことは言わないほうがいいような気がして、ごまかした。

「……ふん」

鼻を鳴らしたウォレイツはリラちゃんに近づいていくと、その腰に差してある鞘にカトラスを戻す。そしてそのまま大通りへと出て

いった。

「ウォレイツ？」

その態度に違和感を覚えたのか、リラちゃんが名前を呼ぶと、

「いったん集合、だろ」

「ええ、そうですが……」

「先に行く」

ひとりでさっさと走って行ってしまったのだった。

その後ろ姿を見送ってから、リラちゃんはひとつ息を吐き、まだ座ったままのわたしに手を差し伸べてくれる。

「難しい子ですが、やさしい部分もあるので、嫌わないうであげてやってくださいね」

「ウォレイツのこと？ 別に嫌いじゃないけど……」

言葉では厭味を言ってきたけど、それに態度は伴っていない。今だって、別にわたしを放っておいてもよかったのだ。サデイはもうわたしから手を放していたし、わたしが自分で大声をあげれば誰かが駆けつけてくれたかもしれない。それでも割って入ってくれたのは

(サデイがいきなり変なこと言い出したから？)

そういえば、ずっと胸のあたりをおさえられていたことを思い出して、急に恥ずかしくなった。

立ちあがってから急に顔を赤らめたわたしに、なにを勘違いしたのかリラちゃんは、

「そうですね」

含みのありそうな言葉とともに、恐ろしくきれいに笑いかけてくる。

「リラちゃん、歩く殺人兵器になりたくなくなったら、あの女の子たちの前でそういう顔しちゃだめよ？」

わたしだつてまだ、鼻の奥がむずむずするのだ。

「どういう意味ですかそれは……ほら、私たちも行きますよ」

リラちゃんは呆れ声で言い捨てると、さっとわたしに背を向けて

歩き出した。こういふときは多分照れているときなのだ、わたしも少しはわかるようになったから。トランクを拾いあげたわたしは、わざと横には並ばずについていく。

（ それにしても ）

サデイはリラちゃんを捕まえるために追っているって言うてたけど、わたしをあのまま人質にしていたらそれも簡単なことだったろうに。そうしなかったところを見ると、なにか他の目的があるのだろうか？

リラちゃんのするりとした背中を眺めて、わたしはそんなことを考えながら歩いた。

事前に集合場所として決めてあったのは、街の中心にあるひときわ大きな木だ。そこに決めた理由は、その木がどこからでも見えるくらい高いから。たとえわたしが迷子になってもたどりつけるだろうということだった。

（ 迷子だなんて失礼しちゃうわ！ ）

最初はそう思っていたけど、リラちゃんの背中を追いかけているだけなのに何度か見失いそうになって、「やっぱり全然失礼じゃなかったかも……」と思いなおした。

「メイリー？ あなた、こんなまっすぐな道でどうしたらはぐれられるのですか」

「だってー」

振り返ったリラちゃんが、文句を言いながらもトランクを持っていないほうの手を取ってくれる。人ごみを歩くことにまったく慣れていないわたしには、まっすぐな道でも充分迷路に見えるのだ。多分トランクを持っていなければもう少しまじに歩けるのだろうけど、そんなに大きくないトランクなのに人と人のあいだを通り抜けるのが難しく、すぐに引っかけてしまう。

（ 六の島・ローポールで屋敷から港に走ったときは、全然平気だったのにな ）

もしかしてそれは人の姿がほとんどなかったからなのかと、今さ

らながらに思った。夕方だったから？ ああ島でも、こんなふうに乗わう時間帯があったのだろうか。

自分の故郷の島なのに、なんにもわからない自分が虚しくなった。

「ほらメイリー、着きましたよ」  
「ん」

顔をあげたら、目の前には身体をそらさないとしてっぺんまで見きれないほど大きな木があつて、幹近くにはすでに三人が集まっていた。ついでに、わたしがサデイに捕まったとき飛んでいったクルツポも、ちゃっかりウオレイツの肩に乗っていた。

(あ！ もしかして……)

あるときウオレイツが来たのは、クルツポが呼んだからなのかな？ そう考えたわたしに答えるかのように、クルツポはわたしのほうに飛んでくると嬉しそうに定位置の胸ポケットにおさまった。

「なんで同じところから来たのに、そんなに時間かかるんだよ……」  
ウオレイツは開口一番機嫌悪そうに告げたけど、それには「またなにかあったのか？」という意味がこもっている気がして、

「ごめんなさい、わたしが人ごみを歩くのに慣れなくて」  
素直に謝ってみたら、予想外だったらしく思い切り顔をそむけられた。

まだ手を繋いだままのリラちゃんの肩が、不意に揺れる。笑っているのだ。

「リラちゃんっ？」

嫌な予感が見上げると。

「ああ、すみません それより、さっそくですがみなさんの収穫を聞きましょうか」

なにごともしなかつたかのように、わたしと繋いでいた手を離れた。それからみんな話しあつて浮かんできた犯人像は、「女の敵！」と叫びたくなるようなものだった。

「ひとり暮らしの女性の家ばかり狙うなんて、最低よっ！」

さいわい、留守のときに忍びこむためその家の女性を襲ったりはしていないようだけど、盗むもののなかに金品以外の下着なども入っているあたり、犯人は男としか思えない。

「襲う度胸がないなら女の家なんて選ぶんじゃないわよ！」

「落ちつきなさいメイリー、その理屈はおかしいですよ」

「うーっ」

リラちゃんも同じ女なら、自分の部屋にいきなり知らない男が入ってくるなんて気持ち悪い状況を理解できるはずなのに。いつもどおり、憎いくらい冷静だ。

あごに手をあて、深く考えるように一度目をつむってから、

「そうですね、まずは被害にあった女性に会ってみましようか。伝聞だとわからないことも多いですし」

「リラードの得意分野だし、って？」

「ユレゼス！」

「そう睨むんじゃないの、ほんとのことでシヨ！」

「……………」

というわけで、リラちゃんを先頭に被害にあったひとりの女性のもとを訪れたのだけだ。

「あ、あ、あ、あ、あのっ、ごめんなさい！ 今は男の人に会うのが怖くって…………ど、どんなに美形でも無理です！ つきあってくださいー！」

「……………かなり混乱しているようですね」

家のドアから半分だけ顔を出してそんな対応されたから、さすがのリラちゃんも戸惑っていた。

（男の人が無理っていったら、見た目がちゃんと女なのはわたしだけじゃない）

ここはわたしが一肌脱ぐしかないようだ。

「リラちゃんどいてっ」

リラちゃんを横におしやって、わたしが前に進み出た。

（クルッポ、おいで）

人差し指を胸ポケットに近づけ視線を送ったら、心得ているクルツポはそこに飛び乗ってくる。その手を女性の目の前まで突き出してから、わたしはゆっくりと口を開いた。

「お嬢さん、この鳩めに話を聞かせてはくれませんか？」

喋るわたしに合わせて、クルツポは器用に首を動かす。これは手品というよりも、わたしのひとり遊びから生まれた芸だった。たとえば、わたしがメイドのロトウシャにいたずらをして怒られたときでも、クルツポがこれをやるとロトウシャは怒りきれずに笑ってしまふのだ。

（動物は人の心を和ませる力を持つてる）

なかでも鳩は愛嬌があつてかわいい鳥だ。いつから手品に鳩が使われるようになったのかはわからないけど、納得の選択といえた。

「あ、あら……この鳩、あなたなの？」

これまでよりも少し多めに顔を出し、女性が聞いてくる。近くで見ると、女性はふくよかな身体つきをしたかわいらしい人だった。

「ええ、わたしの相棒よ！」

答えているのはわたしなのに、まだ顔を動かすクルツポに、女性は笑つて。

「かわいい子ね、ほんとに鳩と喋ってるみたい」

「どうやら落ちついたようだ。」

「……事件のことをだつたわよね」

向こうから振ってきた。

「捕まえてくれるならいくらでも協力するわ。貴族は本気で捜査なんかしてくれないもの」

（ああ）

自分も貴族である身分、やっぱりほんの少し心が痛んだけど、それは「この島の貴族のこと」なのだと思持を切り替える。

わたしはクルツポを自分の肩に乗せると、話を聞きはじめた。そのあいだリラちゃんたちは、一歩どころか二十歩くらいさがった位置で、遠巻きにこちらを見ている。

(えーと……)

でも、聞くつていつてもどういうふうに聞けばいいんだっけ？

自分がその役になることを想定していなかったわたしは、他の言葉を選べなかった。

「あの、犯人に心当たりありますか？」

(あつたらとづくに通報してるわよね……)

と思いつながら聞いたわたしに、

「心当たりはないけど、あたし、実は犯人と遭遇してるの」

「えっ!？」

返ってきたのは予想以上の答えだった。

「あたしおつちよこちよいなものだから、家の鍵を落としちゃうこともしょっちゅうで……だから窓の鍵はいつも開けてるの。それで、その日も鍵を落として窓から入ろうと思ったら、なかに人影があつて」

「で、どうしたの!？」

半分怪談を聞いているような気分になりながら先を促すと、

「部屋のなかに乗りこんでいつて、手あたりしだいにものを投げてやっただわ!」

「おおーっ」

となりの家に駆けこまなくらいには、変に度胸が据わっている性格のようだ。今の状態は、その反動ゆえなのだろうか。

「暗くて相手の顔とか全然見えなかったけど、結構重いものも投げたやつだからダメージはあつたと思うのよね……」

「そのことは、誰かに話した？」

「もちろん! 屋敷に行つて訴えたけど、『そんなことは証拠にならない』『おまえは島民を全員丸裸にして調べるといふのか?』つて、追い出されちゃつた」

「ひどい……」

「それがまたむかつく男で、ますます男性不信よ!」

言いながら、女性の視線はわたしを通り越し、離れている四人を

とらえる。四人がビクリと縮みあがったように見えたのは、多分気のせいではない。

「あ、ありがと、あとはこっちでなんとか調べてみるからっ。じゃあね！」

（これ以上彼女を刺激することもないわよね）

そう考えたわたしは、彼女にお礼を言っつてその場を離れる。「クルッポー」と、クルッポもご機嫌な声をあげた。

「よかつたらまた来てね」。できればあなたひとりで。後ろから追いかけてきた声に、振り返って手を振る。

（傷は思つたよりも深いみたい）

犯人、許すまじっ！

絶対捕まえてあげようと意気こんで、リラちゃんたちに彼女から聞いたことを話した。

「身体のどつかにあざがあるかもしれないってことかア。彼女が襲われたのは三日前だったわネ？ だとしたら確かに、あざがあるならまだ残つていそうヨ」

最初にそう感想をもらしたのは、ユレゼスさん。そのあとにウオレイツが、

「けど、それを調べるにはやっぱ丸裸以外にないだろ？ 無理に決まつてる」

もう諦めたような声音に、つかみかかったのはジエロトくんだ。

「なんで裸にしないといけないのさ？」

「だってあざなんか簡単に服で隠せるじゃねーか。おまえの尻にだつてあるだろ」

「あつ、あるけど！ そうじゃなくて、ものにぶつけてきたあざだったら、触られたら痛いんじゃない！？」

「ああ、そうネ でもそれはそれで、島民全員を触りまくるのかつて問題があるでシヨ。相手が女性なら、さっきの女性以外はリードに喜んで触らせそうだけだ！」

「……………」

(あれ?)

いつもはここで「ユレゼス！」って声が飛ぶのに、リラちゃんは無言を保ったまま自分の足もとを見ていた。

「リラちゃん？」

「困ったことに」

「え？」

わたしが呼ぶと、すぐに顔をあげて続けた。

「困ったことに、触ったおかげで本当にわかってしまったのですよ」

「へ……？」

みんなの視線がいつせいに、リラちゃんへと集中する。

(一体いつ?)

わたしがリラちゃんと一緒にいなかったのは、サディに捕まっていたほんの数分だけ。でもリラちゃんなら、女の子たちに囲まれたところで自分から触ったりはしないだろう。それとも、わたしが見ていなかったときになにかあったのだろうか？

わたしたちの視線を受けとめたリラちゃんは、覚悟を決めたようにひとつ頷くと、

「さきほど私の周りにいた女性たちのなかで、ひとり、あとから近づいてきた女性がいたのですが、他の人におされて倒れそうになったところを、私が支えてあげたのです」

言葉を選んでいるのだろう、ゆっくりと告げた。

「そ、それで痛そうな顔、したんだ……？」

改めて確認したわたしに、もう一度頷く。

(ただの偶然かもしれない)

けど、そんな怪我をしていたら普通、出歩いたりしないんじゃないかしら？ まして人の多いところに入っていったら危ないだろう。「女性を狙っていたのは、犯人を男に見せかけるためと、万が一見つけたときに對抗できるから、かしら？」

ユレゼスさんの的確な予想に、

「あえて私に近づいてきたのも、私が女性たちに事件のことを聞い

「ていたから、気になったのかもしれない」

自然と、みんなの表情が険しいものになる。

「じゃあその女の人のこと、調べてみよっか」

手品師は、ある意味人を騙す職業だ。そして騙すために、あらかじめ仕掛けを準備する。それはなにも目の前で行われるものだけでなく、たとえばわたしが屋敷から逃げ出した手品もそう。一定時間さえ乗り切れば、あとはばれてもかまわない。

そういう部類の仕掛けを、わたしは彼女　　テフラナに施した。  
「じゃ、見まわりに行こっか！」

あたりが暗くなってきた頃、みんなそろって宿屋を出る。その名目は、わたしがはつきりと口にしたとおり「事件が起きないよう島を見まわるため」であつたけど、本当は違つていた。

（テフラナを捕まえる！）

そのために、わたしたちは宿屋を出たのだ。

あのあと、リラちゃんが遭遇したその女の子を捜すため、もう一度街のなかで情報を集めた。そしてすぐ、名前と住所をつきとめることはできたのだけど、問題はそこから先だつた。

わたしたちが彼女を疑つているのは、彼女が身体に「触れられると痛い傷」を持っているらしいから。でも当然それだけでは根拠として弱く、傷をつくつた理由なんていくらでもごまかせる。もし彼女が本当に犯人であるならば、決して言い逃れできないような形で捕まえねばならなかつた。

（　　ああ、もしかして）

と。それを考えたとき、わたしはふと思つたのだ。サデイがリラちゃんを捕まえられないのも、そういう理由なのかもしれないと。もっとも、わたしはリラちゃんが窃盗犯だなんてまったく信じていないけど。

宿屋を出て少し歩いていくと、わたしたちは大きな建物のある角を曲つた。こっちは街に続いている道で、本当に見まわりにいくならはしばらくは戻つてこられない。

しかしその場所で、わたしたちは待機する。

「クルツポ、様子を見てきて」

「ポーっ」

建物の陰からクルツポを放すと、クルツポは一直線に宿屋の二階、わたしたちが使っている部屋の窓に向かって飛んでいった。

「う、うまくいくかなあ」

心配そうに呟いたのはジェロトくん。おそらく、まだ仕掛けの全容を理解できていないからだ。

「大丈夫よ、わたしたちがああの部屋にいないのはしつこいくらい強調したから！ 鍵もわざと開けたまんまだし」

ついでに宿屋のおじさんにも協力を仰いで、裏口から入りこみやすいようにしてもらった。

そして、もうひとりの協力者は

「あっ、クルツポが鳴いてる！ 行くわよっ」

五人で一気に角を飛び出す。いちばん足が速かったのはリラちゃん、次がウォレイツだった。ふたりがそのまま宿屋に飛びこむと、残りのわたしたちがたどりつく前に部屋の電気がつく。本来なら誰もいないはずのその部屋の窓は開かれ、灯りを背にして顔を出したのは、

「よー、お嬢ちゃん。約束どおり捕まえてやったぞ」

「は、放してよっ！」

公式に容疑者を拘束する権限を持つ探偵と、その腕に抱えられて暴れる容疑者。簡単に言えば、サディとテフラナだ。

(そう)

わたしが協力を求めたのは、あるとき手伝うと約束したサディだった。

テフラナは、女性が留守のときを狙って犯行をくり返していた。だから、「わたしたちが部屋を留守にする時間」をテフラナに知らせることができれば、下調べのいらぬ楽な仕事だと思ってやってくるんじゃないかと予想したのだ。

しかし、となりの部屋に三人がいたままでは警戒して入ってこないかもしれない。だからどうしてももうひとり協力者が必要で

（エンクさんが、島の人は大っぴらには手伝いたがらないって言うてたもんね）

だからこの島の者でないわたしたち同様、サデイが適任だったというわけだ。おまけにサデイは探偵だから、もしこのことが七の爵に 国にばれても、なんの問題もないという保証つき。

わたしがそれを知っていたのはもちろん、いざとなったとき探偵の暴挙を許さないといけない立場だったからだけど、味方としてはこれ以上の協力者はいなかった。まあ、リラちゃんにサデイと会ったことを話したら怒られたし、リラちゃんはやっぱりサデイが嫌いらしくって、納得させるのに二時間もかかったのだけど。

そうして結局、いちばん最後に『202』の部屋にたどりついたのはわたしだった。

サデイは改めてわたしの姿を認めると。

「お嬢ちゃん、大胆な作戦を考えたもんだな。この鳩が俺んとこ飛んできたときにあ、びっくりしたよ」

「でも、ほんとに捕まったでしょ？」

「ああ、見事な手品だった」

まだ腕のなかで暴れているテフラナをおさえつけながら、頭にクルツポを乗せたサデイは初めて見る笑顔で褒めてくれた。

「クルツポー！」

リラちゃんの手前素直に喜べないわたしのかわりに、クルツポが鳴いてくれる。このクルツポが伝書鳩として働いてくれたから、わたしは今回の作戦を書いた紙をサデイに届けることができたのだ。空を飛べない人間には、広い街のなかからひとりの人を捜すのは難しい。けれどクルツポなら、サデイにはハンチング帽というわかりやすい目印がある分楽だった。

ちなみに、わたしが手紙に書いたのは、みんな調べて入手した

テフラナの情報と。夜にテフラナのあとをつけてほしいという二点だけ。

「さて　では話を聞きましょうか？　テフラナさん」

凜としたリラちゃんの声に、テフラナは身体の動きをとめた。もしかして、こんなときなのにリラちゃんに見とれているのか。

「……ん？」

自然と、みんなの視線がテフラナではなくリラちゃんに集まっ  
て、

「な、なんですか!？」

慌てた様子のリラちゃんが、なんだかおかしかった。わたしたちも、こんなときなのに思わず笑ってしまう。

その笑い声で我に返ったのか。

「お願い　黙って見逃してっ」

か細い声で、テフラナが訴えた。

(あら……)

明るい光のなかでこうして見てみると、テフラナは声どころか身体全体がやせ細っていて、ともすれば折れそうにも見える。多分年齢はわたしと同じくらいだろうけど、体重は半分あるかないかだろう。そんな身体を脇に抱えているサディは、実のところかなり力加減に苦心しているのかもしれない。

「どうして、盗みなんてしたの？」

(満足に食事もできないくらい、困っているから?)

後半は口に出せなかった。

わたしの心情を読むかのように、テフラナの目から大粒の涙がこぼれる。

「だって……やらないと、弟が死んじゃう……」

その様子を見て、サディも逃げる気がないことを悟ったのか、腕のなかからおろしてベッドに座らせてやった。

その瞬間までは。

おそらく誰も、彼女の次の言葉を予想できなかった。

「弟は、貴族のお屋敷に囚われているの……」

「えっ!？」

(飢えて死にそうなんじゃなくてっ?)

みんなと顔を見合わせた。誰の目も、丸かった。

「詳しく話を聞いたほうがよさそうネ」

告げたユレゼスさんに、いつせいに頷く。

それからわたしたちは、場所をとなりの食堂に移して話を聞いた。食べものを前にしたテフラナは爛々と目を輝かせ、さっきまでとは違ってかわった饒舌ぶりを見せてくれた。

つまりこういうことらしい。

(すべての始まりは )

エンクさんと話をしたとき、リラちゃんが口にしていたひと月前の屋敷での盗難事件。そのとき屋敷に盗みに入ったのは実は義賊で、盗んだものを島民にばらまいていったそうだ。それに腹を立てた七の爵が、盗まれた分を島民から回収しようと、朝市の場所代を値上げしたのだという。

おかげで、朝市で自分のつくった小物を売ることと弟とふたりなんとか生計を立てていたテフラナは、場所代が払えなくなり朝市を追い出された。さらに、これまでの足りない分として弟を屋敷に連れていかれたのだ。屋敷のなかで弟がどんな目にあっているかはわからないけど、多分奴隷として扱われているのだらうと、テフラナは言う。

「それで、弟を返してほしかったら街で窃盗事件を起こせつて。うまくやったら朝市にも出させてやるから……」

「なるほどなあ。屋敷だけが被害にあっただんじゃ、面子が持たないからってわけか。あの港の検問官だって、結局はたんなるパフォーマンスにすぎない 最低だな、七の爵は」

あれこれと文句を言われながらも、ちゃっかりリラちゃんのとなりに陣取っているサディの読みは、おそらくそうはずれてはいないだらう。

「しかしそれなら、あなた以外にも同じことをされている人がいる可能性が」

「いるわ」

リラちゃんの手を遮って、食べる手をとめたテフラナが続ける。「だってあたしがやったんじゃない事件も、いっぱいあるもの……きつとみんな、つらいのよ」

終わった先から、一度はとまっていた雫が落ちた。

「テフラナ……」

自分も充分つらい目にあっているのに、テフラナは他の人のことまで思っ泣いているのだ。盗むのは確かに悪いことだけど、その心までが悪いとはとても思えない。

（ああ）

わたしはまた、あのとときのサディの言葉を思い出した。

「盗みは悪いことだろう？」

そう言いながらもサディが、こうしてリラちゃんのとなりに座っていられるのは。その心までがすべて悪いわけではないと、知っているからなのか。

（でもそれなら）

リラちゃんは本当に泥棒なの？

リラちゃんが前にこの島に訪れたのもひと月前のはずだから、気になっていたので。リラちゃんがそれを知っていたのは、たんにその事件があったときまだ島にいたからだと思っっていたけど。

（もしリラちゃんが、犯人だったら……？）

「ん？ どうしましたメイリー、私の顔になにかついていますか？」無意識のうちに見つめてしまっていたのか、リラちゃんに不審がられてしまった。

わたしは慌てて首を振る。

「う、ううん、相変わらずフェロモンびんびんだなあと思っって」

「フェ……っ」

なにも飲んでいないのに、喉をつまらせたように咳きこんだリラ

ちゃん。

( そう、そうよね )

今はそのことを、考えているときではないのだ。

わたしも貴族だからこそ、七の爵のやりかたは許せない。なんとかテフラナの弟さんを助けてあげないと。

だからわたしは、リラちゃんが復活する前に次の言葉を紡いだ。

「ねえリラちゃん、わたしの手品、第二幕 見たくなあいい？」

翌日の夕方、わたしは七の爵の屋敷近くに立っていた。目的は当然、テフラナの弟の居場所を探り出し、助け出すこと。

（そしてテフラナと一緒に、一の島・イスウェルへ連れていく！）  
本来国王と連携し島の治安を守るべき貴族が主犯格である以上、事件を根っこから解決するにはそれしか考えられなかった。十分な証拠をそろえて直接国王に報告すれば、きつと七の爵を通さずを外側から調べてくれるだろう。そのためには、なんとかして弟くんを助け出さなければならぬ。

だからこそわたしは、旅の手品師として七の爵の屋敷を訪れることにした。うちの屋敷にだってエフレイシド師匠以外にも何人か旅の手品師が来ていたくらいだから、他の屋敷にも訪れているはずで、それならきつと自然に入りこめるだろうと、予想したのだ。

「準備はいい？」

門前で振り返りわたしが確認した相手は、今回助手役として起用されたウォレイツだ。ユレゼスさんやリラちゃんでは助手に見えないし、かといってジェロトくんでは心もとないからという理由でウォレイツが選ばれたのだけど、やっぱり本人はあまり気がすすまなみたいだった。

「手ぶらのおれになにを準備しろって？」

まだ不機嫌さが残る声で、「なにも持っていないだろ」と両手のひらを見せてくる。

でも今のわたしは、その服の下に隠された短剣を知っていた。逆にさっきまで知らなかったのは

（普段は武器を持ってないなんて、思わなかったな）

リラちゃんはよく目立つカトラスを腰に差していたから、みんなそれぞれに武器を所持しているのだと、わたしは勝手に思いこんでいたのだ。でも考えてみれば、わたしがサデイに捕まっていたあの

ときだつて、もしウォレイツが自分の武器を持っていたなら、わざわざリラちゃんのカトラスを持ち出すこともなかったのだろう。

「武器を持つと、それだけで気が大きくなってしまふことがあります。また、いらぬ争いに巻きこまれてしまふことだつてあるのです。ですから私は、ウォレイツとジェロトがある程度の年齢に達するまでは許可しないことにしています」

そのかわりそういう役目はすべて自分が負うのだと、リラちゃんは言っていた。ユレゼスさんなんかは、「アタシは別にいつ死んでもイイと思つてるもの、武器なんかクソくらえ！ ヨ」と豪快に笑つていたくらいだ。

(でも今回は、特別)

ウォレイツはみんなの命を守るために、責任と武器を持つことを許されたのだ。

「助手なのに手ぶらじゃ変でしょ？ はい、これ持つて！」

わたしが手にしていたトランクをおしつけると、舌打ちしながらもウォレイツは素直に受け取った。助手役といつても実際にはそれくらいしか手伝えないことを、ウォレイツ自身だつてきつとわかつていたのだろう。

「ついでに顔の準備もして！ しかめっ面の手品師なんていないんだから。ほら、ここのしわなくして、愛想よくしてよ」

指先でつんと眉間をつついてやったら。

「やめるよっ」

照れたのか、ウォレイツは乱暴にわたしの手を振り払つて横を向いた。

その様子が、照れてわたしに背を向けたリラちゃんと重なつて見えて、

「……ねえ、船乗りつて実はみんな照れ屋なの？」

つい口から出たら、怒鳴られてしまった。

「いいからさつさとチャイム押せ！」

「わかつたわよー」

(ほんとに大丈夫かなあ、ウォレイツで)

さすがのわたしもちょっと心配になる。腕力的には頼りにならなくても、愛想のいいジェロトくんのほうが、まだよかったんじゃない……

(でも、もう遅い、か)  
わたしは覚悟を決めて、大きな門の端についているチャイムを鳴らした。

三回鳴らしたところで、なかからメイドの格好をした女性がひとり飛び出してくる。そのメイドは門を挟んだ向こう側に立つと、

「『なんの用だ?』と、ご主人さまが仰っております」  
まるで抑揚のない口調で聞いてきた。

(……変なの)

なんだか機械が喋っているみたい。

「あの、わたし、旅の手品師でメイリーっていいいます。よかつたらお屋敷で手品を披露させていただけないかと思ひまして!」

わざと対照的に明るく言ってみたら、そのメイドはわたしの上から下までじっくり見えてきて。

「ご主人さまに聞いてまいりますので、少々お待ちください」

ぺこりと軽く頭をさげると、また屋敷のなかへと走ってゆく。

「なんだあれ……もしかして、一言話すことに聞きに帰る気か?」  
後ろから、すでに呆れ口調で告げるウォレイツ。

(もしそうなら、空が暗くなる前になか入れるかしら?)  
ますます心配になった。

やがて、さつきと同じメイドが屋敷から出てきて、

「あの、後ろの男性はどういうかたですか?」

「え? っと、手品の助手をしてくれてるウォレイツですけど」

「では、そのかたもなかに入るんですよね?」

「ええ、できれば……」

メイドは「うんうん」と納得するように頷くと、

「ご主人さまに聞いてまいりますので、少々お待ちください」  
またまた屋敷のなかへと戻っていった。

(これはウォレイツの予想が当たっていいそうね)

心のなかでげんなりしながら、さてウォレイツはどんな顔してるのかと振り返ってみたら。

「……どうしたの？」

なぜか驚いているふうに見えたから、わたしは思わず問いかけた。

「いや」

口ごもるウォレイツは、なにか考えるように一度視線をはずしたあと、

「おまえ、なんでスカートで来たんだよ」

「えー？ わたし、最初会ったときからずっとスカートだったでしょ？ どうしたのよ、いきなり」

「似合わない」

「な……っ」

(なんでこんなときにそんなこと言うの!?)

わたしを怒らせようとしてもしているの？ でも、なんのために？ 完全に後ろを振り返ったまま、次の句を継げないわたしの背中に、「メイリーさま。『入ってよい』と、ご主人さまが仰っております」

「あ、はいっ、ありがとうございます！」  
いつの間に戻ってきていたのか、また同じメイドがいた。さいわい、屋敷のなかの『ご主人さま』とのやりとりはこれで終わりみたいだ。

メイドが開けてくれた門から、屋敷の敷地内に足を踏み入れる。門から屋敷までの距離は、わたしの足で三十歩くらいか。建物に近づいていくにつれ、わたしは自分の知識の正しさを否応なしに確認させられた。

(ほんとに、同じだわ)

わたしがずっと囚われていた、六の島・ローポールの屋敷とまったく同じ。それはこの目に屋敷の姿が飛びこんでくるまで、すっかり忘れていたくらいどうでもいい知識だったのに。

「どうぞ、お入りになってください」

到達した屋敷のドアも、メイドが開けてくれた。まるで自分の家に帰ってきたかのような不思議な感覚に、わたしはどうしても戸惑ってしまう。違うのは住んでいる人と、建物に染みついたにおいだけ？

ぐるりあたりを見まわしていると、

「まずはこちらへ。簡単なお荷物検査を受けていただきます」

「あ、はい」

再びメイドを先頭に、歩きはじめる。

（警戒してるのね）

七の爵は島民に嫌われていそうだから、きっと命を狙われたりすることもあるのだろう。平和ボケっぽいうちの屋敷では、荷物検査など見たことがなかった。

メイドは、玄関から続く長い廊下を抜け、つきあたりの階段を二階へといざなう。そこは小さめの部屋がたくさん並んでいる場所です。そう、うちの屋敷にたとえば、ちょうどわたしの部屋があるあたりだった。

（普通は客間に使われるような部屋なんだ）

もともと離れに住まわされていたわたしは、小さい部屋でももらえたことに満足していたけど

（あ！ そうだわ、離れがあるじゃない）

もし人質として連れてきた人たちを、どこかに閉じこめておきたいなら。構造的には地下牢などないことがわかっていて、いちばん怪しいのは離れといえた。

「では、こちらでお待ちください」

メイドが選んだドアから、部屋のなかへと入る。そこは中央にぽつんと豪華なテーブルがひとつあるだけの、奇妙な部屋だった。もしかして、ただ荷物検査するための部屋なのだろうか。

メイドはわたしたちをなかに入れてしまうと、部屋を出て外から鍵をかけた。屋敷のなかを自由に歩かせる気はないらしい。

ウォレイツが中央のテーブルの上にわたしのトランクを置いてい

るあいだに、わたしは窓に近づいて開くかどうか確認する。

(まあ、そうよね)

当然のように、開かなかった。

「ウォレイツ、あとでわたしが屋敷内の地図を描いてあげるわ」

「へ？」

わたしが振り返りながら告げたら、その言葉がよほど意外だったのか、ウォレイツは訝しげに目を細め、

「なに言ってるんだ？ おまえだって初めて来たんだろ？」

「そうだけど、実は貴族の屋敷の構造って全部一緒なの」

「なんだって……？」

もしわたしが屋敷を出ることのないまま死んでいたら、まったく役立たずに終わるはずだったその知識は、貴族に生まれた者として当然知っておくべきとされる事柄のひとつだった。簡単に言ってしまうえばイースウェル王の国づくり物語なのだけど、わたしはそれを小さい頃にじいじから教えてもらっていた。

「いいかい、メイリー。イースウェル王は九つの島すべてを平等に管理するために、同じ時期に同じ屋敷を建て、同じ方法で選んだ島民を貴族に指名したのだよ」

(そう)

わたしはまだ一の島・イースウェルに行ったことがないから確認したわけじゃないけど、きつと『城』と呼ばれる王の住処すら、まったく同じ形をしているのだろう。「貴族は基本的に自分の島から出ない」という話だって、裏を返せばなにかあったときに疑われないためなのだ。

「だから、どこに捕まってるのかさえわかれば、捜すのは簡単だと思っ」

「……狙い目なのは、あのメイドか」

「リラちゃんばりのたらしこみを期待するわ」

「できるかっ！」

ウォレイツがそう吐き捨てたのと、ドアがノックされたのはほと

んど同時のことだった。

(あら?)

ノックした誰かは、わたしたちの返事を待たずにそのままドアを開ける。荷物検査の担当者だろうかと、心のなかで身構えわたしたつたけど

「やあやあ、待たせてすまないね」

言いながらなかに入ってきたのは、ジェロトくんと同じくらいの歳の男の子だった。違うのは、きれいに整えられた髪と、やけにきちんとした身なり(ごめんジェロトくん)。

「きみは?」

わたしもテーブルの近くに帰りながら、その少年に問いかけると、「荷物の中身を確認させてもらうよ。聞いているだろう?」

「え、ええ」

思い切り見た目と合っていない口調に、わたしは戸惑いながらも頷く。テーブルの上のトランクを開けて、中身を見せてやった。

(これから手品をするっていうのに)

その道具を見せなきゃいけないなんて正直嫌だけど、そんなことも言っていられない。

男の子は興味深そうにひとつひとつ眺めたあと、トランクの隅に入れてあった袋に気づいて、

「これは?」

「着替えよ。あの、下着とか入ってるから、できればなかは見ないでほしいんだけど……危ないのが入ってないのは袋の外から触ってもわかるでしょ?」

「ふむ」

納得してくれたのか、袋の外からペタペタと触りまくっていた。

(大丈夫かなあ、この子……)

散々触って満足したのか、やがて今度はウォレイツのほうを見て、「おまえは? なにか持っていないのか」

ぞんざいな態度で言い放つ。

ウォレイツの眉毛は思い切りひきつっていたけど、さすがに怒り出すことはしなかった。

「なにも いや、これがあつたか」

わざともらったいぶつてウォレイツが取り出したのは、あらかじめわたしが渡しておいた手品用の短剣三本だ。

「ずいぶん危ないものをそのまま持っているんだな」

「危なくないわよ。だってこれ、刺そうとすると剣身が引っこむ短剣だもの」

「なんだ、偽ものか」

あつさりと引きさがつた男の子に、わたしとウォレイツは「作戦どおり」と目を合わせる。

(先に確認させておくと、必要以上に疑われなくてすむのよね)

ある意味これも手品のテクニク。手品を始める前にシルクハットの中身を確認させたり、なんの変哲もないハンカチであることを確認させたりするのと同じことなのだ。

それから少年の視線は、再びわたしに戻り、

「さつきから気になっていたんだが」

「えっ? なに?」

わたしが自分の服のなかに隠しているものなんて、残りの手品の小道具と、クルツポくらいしかない。手品そのものがわたしの武器であるし、なんだかんだ言いつつも、いざとなったときにはウォレイツの働きに期待しているから、それで充分だったのだ。

(一体なにを言うつもり……?)

まさか、目的がばれた?

変な緊張が走り背筋の重くなるわたしのもとに、男の子はゆっくりと近づいてくると、

「そのスカートは、なんでそんなにふくれているんだ?」

「は?」

あまりにも予想外な問いに、わたしは素で返してしまった。

「なんでって言われても、こういうデザインだから……」

改めて、自分のスカートを見下ろす。かぼちゃパンツみたいに太もものあたりでふわりとふくらんでいて、足が出るひざ上でまたきゅっとしぼんでいるこのデザインは、ある程度激しく動いてもほとんどめくれあがらない、わたしにとってはかなりありがたいデザインだった。また、見た目にもやわらかくてかわいいから、かなり気に入っていたのだ。

(まさかそんなことを聞かれる日が来るとは)

わたしのためにこの服を用意してくれたじいじだって、思いもしなかったことだろう。

戸惑うわたしに、なおも近づいてくる男の子は。

「おい、なかになにか隠してるんじゃないのか？ 見せてみる！」  
言うやいなや、こともあるうにスカートのすそをつかんでくる。

「ちよ、やめてよ！ なのも隠してないわっ」

「じゃあおとなしく触らせる」

「はあ!？」

(なんなのこの子!?)

「や……っ」

あまり強く引っ張ったら破れてしまいそうだし、かといって思い切り抵抗したら少年に怪我をさせそうで、うまくかわせなかった。

そこに、ウオレイツの手が伸びてくる。

「いい加減にしろ、エロガキ。おれたちが相手をしにきたのは、おまえじゃなくて七の爵だ」

ウオレイツの手はしつかりと少年の手首をつかんでいて、少年はそれ以上手を動かせないようだった。

「くっ……ならちよっと待ってる!」

わたしのスカートから手を放すと、ぐいと腕を引きウオレイツの手も引き剥がす。少年はくるりこちらに背を向けて、逃げるように部屋を出ていった。

「び、びっくりした……」

わたしはその場にへたりこむ。

(荷物検査って……荷物検査って……！)

「だから言ったじゃねーか。『なんでスカートで来たんだ』って」  
「あんた知ってたの!？」

上から降ってきた声に、睨むような視線を返すと。

「入口でわざわざおれの存在を確認してただろ。だから『本当だ』  
と思った。まさか使用人までそうだとは思わなかったけどな」

「……なんの話よ？」

話が噛みあっていない、ような気がした。

ウォレイツはわたしから視線をはずし、困ったように頭を掻いた  
あと。

「テフラナが言ってたんだ。七の爵に、『盗みが嫌なら自分の愛人  
になれ』って言われたって」

「なっ……七の爵ってロリコン!？」

「待て、つつこむべきところはそこなのかつ？ つーか、おまえま  
だ自分が『ロリ』の範疇にいると思ってるのかよ!？」

「ね、年齢的には厳しいかもしれないけど、見た目なら……」  
ちろりと、ウォレイツが横目でこちらを見下ろした。

「……まあ、乳以外ならな」

「生々しいから乳って言うなーっ!」

「あ、あの……『手品を見せてもらおう』と、ご主人さまが仰  
っておりますけど……」

「あ」

恥を取り戻すかのように、精一杯の手品を披露したあと。

「メイリー、素敵な手品をありがとう。種のわからないものは久々に見たよ」

満足感で高揚していたわたしに、笑顔でそう告げてきたのはさっきの、男の子だった。

（そう、とても最悪なこと）

あの男の子こそが、七の爵その人だったのだ。名を、エムル・ナフェストルというらしい。そして七の爵ということはつまり、この窃盗事件の本当の黒幕だということ。

（子どもなら、まだ納得できるわねえ）

屋敷が襲われたから、街も……なんて幼稚な発想は、やはり大人のものではなかったのだ。

よりもよって事前にトランクの中身を見られていたわたしは、だからあえてそれらの道具は一切使わずに手品を披露してやった。

半分は意地になって、相手が子どもだからといって子ども向けの手品は混ぜずに、本気でかかっていったのだ。

それが、どうやらエムルにとっては嬉しいことだったようで、「楽しませてくれたお礼に、よかったら今夜は屋敷に泊まっていてくれ」

エムルは近づいてくると、わたしに握手を求めながらそう言った。

「あ、ありがとう」

それに応えて、わたしも手を差し出す。

（うっ、これも作戦どおりなんだけどなんか嫌だよ）

あわよくば泊めてもらって、夜のうちに動こうと思って、わざと夕方に訪問したのだけど、今はそれが、少し怖い。テフラナの話がなかったなら気にする必要もなかった、こんななんでもない握手

さえ。

「 どうした？ メイリー。表情が硬いようだが」

きつく手を握ったまま、おかしくてたまらないような表情で、エムルが見上げてくる。

（悔しいけど、相手のほうが一枚うわ手だわ）

ひとつ言葉を呑みこんで、わたしは、

「 どうして使用人のふりをしていたの？」

おそらく自分の身を守るための荷物検査なのに、その場に本人が来てしまつては話にならないと思つたのだ。

するとエムルは、喉の奥を「くっ」と鳴らして、

「ぼくは、会う人間は自分で選ぶのだ。別におかしなことじゃないだろう？ 誰だつて、顔も知らない相手とは結婚したくないはずだ。そして見れば見たで、ある程度選ぶはず」

「うっ」

（ダメージなんて受けてる場合じゃないのに！）

うっかり反応してしまつた。

「それにね、この屋敷に来る者など、今じゃ外の人間くらいしかない。どうせぼくが行つたところでわかりはしないのさ」

につこりと笑うエムル。でもまだ、手は放してくれない。この島の握手つてこんなに長いものなのだろうか。

「あの、手を放して……」

「ああそうか、部屋に案内しないとな。なんならぼくが一緒に泊まつてあげるけど？」

「遠慮するわっ！」

きつぱりと断つたら、さすがのエムルもやつと手を放してくれた。そして「やれやれ」というように両手をあげて、

「そんなに力いっぱい拒否しなくてもいいのに」

「スカートめくられるくらいじゃ、すみそうにないからな」

わたしの横で呟いたウォレイツが、出入り口のドアのところに入ったメイドのほうに逃げていった。

(ちょっと、なに言い出すのよっ！)

「あつはつは、違うない」

笑うエムルの目が、全然笑っているように見えないのはなぜだろう。

「お部屋にご案内いたします」

「あ、はいっ」

促すメイドに、今度はわたしが逃げるようにしてエムルのそばを離れた。その背中を、ずっと見られているような気がした。

それから、来たときもわたしたちを案内してくれたメイドに連れられて、今夜泊まる部屋へと向かう。

その途中に、

「おいメイリー、おまえ、あいつに対して愛想よすぎだ」

「へ？」

エムルとはまた違う乱暴さでわたしの腕をつかみ、耳に囁いてくるウォレイツ。おそらく前を歩いているメイドに聞かれないようにしたいのだろう。

「そんなこと言っただって、相手は貴族なんだし、屋敷にお邪魔するのはわたしたちのほうなんだから……」

「ごしょごしょと応えたら、

「あんな目で見られて、よく平気でいられるな」

呆れたような声音が、むしろわたしを腹立たせる。

(なによーっ)

わたしだつてあんなねっとりした視線で見られるのは嫌だったけど、テフラナや弟くんのために我慢したのだ。

わたしが「ふんっ」と顔をそむけると、

「……まあいい、部屋に着いたら作戦どおり行くぞ」

「期待してるわ」

応えたら、今度はウォレイツがそっぽを向いた。

(よっぼどたらしこむ自信がないのね……)

作戦というのはつまり、このメイドから詳しい話を聞くことであ

る。屋敷には他にも何人がメイドがいるようだったけど、この人がいちばんわたしたちと歳が近く、まだ話がわかりそうな人だったから選んだのだ。

「では、ウォレイツさんはこちらの部屋をお使い　っ」

またドアのたくさん並んだ廊下まで戻ってきて、一室の鍵を開けたメイドごと、その部屋のなかに素早くすべりこむ。ウォレイツは口をおさえるばかりか、本物の短剣をメイドの首筋にあてていた。

（ちょっと用途が違う気がするけど……まあ仕方ないか）

そのまま部屋の奥まで進んで、窓ぎわへ。外はもう暗かったけど、月明かりがあつたから部屋のなかにはぼんやりと見えた。ベッドがあつて机があつて……わたしが昨日初めて泊まった宿と、ほとんど同じような内容だった。

「少し話を聞きたいんだ。大きな声を出さないでくれるか？」

ウォレイツお得意の脅すような声音で聞いたら、メイドはすつかりおびえているのか何度もコクコクと頷いた。

（ちょっとたらず方向性が違う気がするけど……まあ、仕方ないか）  
わたしはメイドの正面に立ち、話を切り出す。

「この島で起こってる窃盗事件の黒幕が、エムルだつてことはもうわかつてるの」

「っ　!?!」

「わたしたちは人質として捕まってる子たちを助けにきたのよ」  
「……………」

無言を貫くメイドの表情が読めないのは、きっと暗いからだだけじゃない。貴族のありかたが問題になれば当然、屋敷に勤めている彼女たちにも火の粉がかかる。

必死に、算段しているのだろう。

わたしはひざ立ちになると、メイドの顔と高さを合わせて、口からウォレイツの手をはずしてやった。

「メイリー……………」

「ねえ、『ご主人さま』の言葉じゃなくて、あなたの言葉が聞きた

いのよ」

「わ、私は……」

「あなたも、エムルのしていることは正しいと思ってる？」

「……っ」

ウォレイツの腕のなかで、メイドは必死に首を振る。そしてか細い声で、

「あの、は、離れに」

「やっぱりそうなのね……」

裏が取れたなら、あとは伝えるだけだ。

「この屋敷で、窓が開くのはどこの部屋？」

おそらくこの客間は開かないだろうと思って聞いたら、

「ご主人さまの部屋だけよ」

「わかった」

「っておい！ おまえ行く気か！？」

「作戦どおりでしょ？ ウォレイツはそのままこの子から話聞いておいてねっ」

「バカ、待て！」

無視して、トランクを片手に持ったままわたしは走り出す。途中物陰に隠れてリラちゃんたちへの報告の手紙 離れの場所などを

綴ってから、クルツポの足にくくりつけてエムルの部屋へと急いだ。

（エムルの部屋はきつと、屋敷でいちばん上等な部屋よね）

うちの屋敷なら、それはお父さまの部屋であった場所。間違いはないだろう。

途中何人かのメイドとすれ違ったけど、わたしがエムルに呼ばれて部屋に向かっていると思っっているのか、誰もとめなかった。一体どういう教育をしているのか。……むしろ、誰かエムルに教育してやって！

でも不思議と、恐怖はなかった。

ただクルツポを放して戻ってくればいいのだ。相手は七の爵とはいえ自分よりも小さな子どもなのだから。確かにスカートをめくら

れそうになつたときは怖かつたけど、あれはあまりにも予想外な行動をされたからでもあつた。最初から警戒している今なら、あんなことは起こらないはずだ。

そんなことを考えながら、やがてたどりついた四階のドアを、わたしはためらいなく乱暴に叩いた。

「エムル！ エムル、いるんでしょう？ ちょっと開けてちょうだいっ」

「メイリー！？」

すぐになかから返事があつて、バタバタと近づいてくる足音が。かなり驚いた声だったのは、まさかわたしのほうから来るなんて思つていなかったからか。

（……そりゃそうよね）

わたしだって、できれば最も近づきたくなかつた場所なのだから。「メイリー、よく来てくれた……あれ？」

エムルが開けたドアの隙間から、素早く入りこんでまっすぐに突っ切る。目的は最奥の窓だ、長いカーテンを強引に？き分け、身体ごとぶつかるようにして開けると、胸ポケットからクルツポを出して飛ばした。

「頼んだわよ！ クルツポ」

クルツポは、返事のかわりにか窓のそばにあつた木を一周まわつたあと、近くに潜んでいるはずのリラちゃんたちを捜して飛んでいった。

「……どういうことだ？」

ひどく冷えた声音に、急いで振り返る。

「メイリー、きみはただの手品師じゃないな？」

一歩ずつ近づいてくるエムルの顔に、表情はない。

（ここはもう、ばらすしかないか）

「そう……ね、わたしがただの手品師じゃないとしたら、貴族の手品師よ」

「なんだって……？」

「わたしはロ口家のメイリー。わたしに手を出したら、ロ口家が黙っていいわよっ。それ以上近づかないで！」

わたしに従ったからかはわからないけど、確かにエムルは足をとめた。

「ロ口家……六の島・ローロポールの？　！　ああ、そうか。

メイリー、きみが『狂い咲き』なのだな」

「えっ？」

（なんのこと？）

驚きを声に出してしまったのがまずかった。

瞬間エムルの顔が楽しそうに歪み、

「そう、知らないか。なら教えてあげよう」

そうしてわたしに、突きつけてきたものは

（ピストル！？）

この国では輸入も所持も使用も禁止されているはずのものが、なぜここに？　わたしだって、本のなかでしか見たことがなかった。

だからそれが偽ものであるか本物であるかわからない。だけど

それが「ピストル」の形をしていることだけは、まぎれもない事実で。その恐怖は、いるかどうかともわからない幽霊に対するものによく似ていた。幼い頃を感じたものと、よく似た恐ろしさ。

「狙われる運命にあるおまえが、なんの力も持たないまま外に出てしまったら、悪いやつらに捕まって終わりだよ」

じいじが口にしていた言葉を、思い出した。

身震いするほどの威圧感をわたしに向けながら、エムルの足が再び動き出す。

同時に口も。

「貴族として島にこもっていても、他の貴族の噂は不思議と届くものでね。となりの六の島・ローロポールでは、新しい花が咲いた頃から六の爵が狂い出したと聞いていた」

「な……っ」

花が咲く　それは人が生まれるということ。六の島・ローロポ

ールで生まれた、新しい花というのはつまり。

(わたしのこと!?)

でも、お父さまは別に狂ってなどいない。

「そんな噂、嘘よっ」

一歩後ずさっただけで、窓のある壁にぶつかった。

「そうか? あの島は朝も夜も死んだように静まり返っているというじゃないか」

「っ……それ以上近づかないでったら!」

トランクを投げてやったけど、あっさりとよけられた。

(なんなのよ……っ)

向けられているピストル以上に、エムルの言葉がわたしを深くえぐってくる。

わたしが街の様子を見たのは、ただ一度。

その静けさが、あたりまえだと思っていたわたし。

この島の朝市を見るまでは 夕方でも普通に出歩いている人がいる、様子を見るまでは。

なんの疑問も、持たなかったのに。

(お父さまは )

ほんとにあの島を変えてしまったの?

それをわたしに見せなかったために、わざわざ閉じこめていた……?  
「……っ」

絶対に違つと、言い切れる自信がないのが

わたしを包んでいたすべては偽りだったのかと、考えるのが

「なぜ泣くの? メイリー」

気がつくと、エムルはもうすぐそばにいた。わたしの胸のまんなかに、冷たいピストルの先があたっている。後ろにはわたしが開け放ったままの窓があるけれど、ここは四階だ。二階の窓からは出られたわたしでも、四階から飛びおりて無事である自信はなかった。

心も身体も、もどかしいくらい行き場がない。

「わからないわ」

だからわたしはただ、素直な気持ちを口にした。

自分でもなにを哀しんでいるのかわからないのだ。いや、哀しいのか、怖いのか、虚しいのか、さみしいのか。それさえもわからない。

気持ちはぐちゃぐちゃだった。

それでも睨む気力だけは、まだ残っていて。

「……メイリー、そんな目をしてもむだだよ」

エムルは壁に残りの手をつくると、息のかかりそうなほど近い距離まで顔を近づけてきた。

「ぼくはね、ぼくが七の爵とわかってても態度の変わらなかつたきみを、わりと気に入っている。まさかその理由が、きみも貴族だからだとは思わなかつたがね」

そこで一度笑って。

「だからメイリー、きみがぼくのおもちやになつてくれるのなら、おかしな騒ぎはもう起こさないと誓おう」

言いながら、ピストルの先がわたしの身体を這い下へとさがつてゆく。

「たんに退屈だつたんだ。誰もぼくには逆らわないから。でもきみは、ぼくを楽しませてくれるよね？　ぼくはきみの、中身が見たい」  
そしてスカートの

「や……っ」

全身の血が、ざわざわと震える。

両手は自由なのに、なぜか動かなかつた。

わたしの、後ろから。

「脅さなきゃ本当に欲しいものは手に入らないなんて、貴族も難儀なもんだな」

「えっ!？」

するりと飛びこんできたなにかが、ピストルをつかんでいるエムルの手を捕らえた。それがウィップの先なのだと理解する前に、闇に覆われた窓の外から、揺れるカーテンとともに飛びこんできたの

は

「サデイっ!？」

リラちゃんたちと一緒に、人質となっている人たちを助ける役にまわっていたはずのサデイだった。

サデイはわたしに向かつて「よっ!」と片手をあげながらも、ウィップを持っているほうの手を引きながらエムルの胸を蹴り飛ばしてやった。

「ぐ……っ」

おかげでエムルの手からピストルが離れ、エムル自身はごろりと床に転がる。さらにサデイはウィップを器用に操ると、ピストルとわたしのトランクを手もとに引き寄せてくれた。

それから、

「どちらのおもちゃも、おまえには手に負えない代物だ。俺が譲り受けよう」

「なんだとっ?」

やっと立ちあがろうとしていたエムルに一方的に告げて、サデイはわたしを小脇に抱えた。

「ちょ……まさか窓からっ?」

(戻るの!?)

「そのまさかだ」

飛びこんできたばかりの窓から外へ、飛び出す。

「っ」

あまりの恐怖に声が出なかった。目をきつくつむって、必死にサデイの服を握りしめていた。

そのあいだ聞こえていたのは、「待て!」とエムルが叫ぶ声としなるウィップが風を切るときの、鋭い音。木々の強いざわめき。

(ああ、そうか)

サデイはきつと、そばにあった木を利用してあがってきたのだと、今さらながらに気づいた。そして今も、その木を使ってウィップでおりているのだろう。あの器用なウィップさばきを見るに、それく

らいできてもおかしくはなかった。

やがて思ったよりも小さな衝撃で地面におりたつたサディは、荷物をおろすような仕草でわたしを立たせると、

「大丈夫か？ お嬢ちゃん」

顔を覗きこむようにして聞いてきた。屋敷からもれる光があるとはいえ、あたりはもうまっ暗だったから、そうしなければお互いに表情を確認できないのだ。

わたしは震える身体を強引に沈めつつ、

「大、丈夫……それより、なんでサディがこっちにいるの？ リラちゃんたちは！？」

するとサディは呆れたようにひとつ息を吐いて、

「戦闘力はリラードのほうが上だが、機動力は俺のほうが上だね。

……それとも、助けが俺じゃあ不満かい？」

「そ、そういうこと言ってるんじゃないわよっ」

わたしの切り返しに、今度は笑った。

「まあいい、話は走りながらだ。行くぞ！」

ぐいと、わたしの手を引いて走り出す。おりたここは屋敷の裏側だ。門から出るためには前のほうにまわりこまなければならぬ。

しかしサディが向かおうとした方向は、

「待って！ 離れはあっち」

「心配しなくても、リラードならうまくやるさ。ひと月前にもここにもぐりこんでいるしな」

「！」

（やっぱり……）

この事件の発端となった義賊は。

島民のために、面倒な仕事をしたのは。

「なんでリラちゃんが！？」

前を走るサディの背中に問いかけると、サディは振り向かないまま声を荒げて答えた。

「俺もそれを知りたいんだよっ。リラードとは腐れ縁の幼なじみで

な！」

「そうなんだ……」

どつりでやけに親しいはずだ。リラちゃんを見るサディの目に全然憎しみが見えないのだから

「サディはリラちゃんが心配で追いかけてるのね」

「っ！？」

後ろから告げたら、サディは思い切り前のめりになってずっとこけた。さいわいとっさにわたしの手は放してくれたから、巻きこまれなくてすんだけど。

「ちよつと、大丈夫っ？」

駆け寄って手を差し伸べたら、サディは「まいったな」と頭を掻いて、

「心配って言うんなら、今はお嬢ちゃんのほうが心配だな」

「えー？　なんでよ」

触れあった手が　そのまま引っ張られる。

「きゃっ」

当然わたしの身体はサディの上に落ちて、近づいたわたしの耳にサディは、

「お嬢ちゃんのほうが、リラードよりよっぽど危なっかしい」

囁かれた声に、わたしは急に恥ずかしくなった。

(なに、これ……？)

さつきエムルに触れられたときとは違う、血のざわめき。

「サ」

「あなたはアホですか！　こんなときに口説いている場合じゃないでしょう！？」

(えっ？)

名前を呼ぼうとしたわたしを遮ったのは、まぎれもなくリラちゃんの声で。顔をあげると、男の子をひとり背負ったリラちゃんがそこに立っていた。

「リラちゃん！　あれ、でもなんでこっち側から？」

離れは逆の方向で、もしリラちゃんが離れからその子を助け出したなら、こちらに来る必要はないはずだった。

リラちゃんはすぐ横まで近づいてきて、わたしだけに手を差し伸べると、

「離れにある井戸と、こちら側にある井戸は底で繋がっているのですよ。どうせ離れから直接門へ向かうことはできませんから、そこを通ってきたのです」

(え……)

それは実際に同じ形の屋敷に住んでいたわたしでさえ、知らなかったこと。

「……詳しいのね、リラちゃん」

手を借りながら立ちあがって告げたら、リラちゃんは珍しくうろたえて、

「えっ!? いや、ほら……メイリーが鳩をよこすまでちょっと時間がありましたから、調べたのです!」

「おい、さっきから鳴いてるの、その鳩じゃないか?」

「あ!」

サデイの言葉に耳を澄ませると、確かに鳴いている声があった。

屋敷の前のほうから

そこでわたしは、思い出す。

「そうだわ、ウォレイツ!」

わたしたちがメイドに案内された部屋の窓は、屋敷の表側に面していた。

「まだ屋敷のなかにいるのか?」

「わからないけど」

騒ぎに気づいてうまく逃げだしたかもしれないし、そうでないかもしれない。でもクルツポはなぜかウォレイツを気に入っているようで、よくそばにいたから、もしかしたらと思う気持ちがあった。

「とにかく行ってみましょう。ちょうど追っ手も来たことですし」

リラちゃんという言葉にあたりを見まわすと、確かに掃除道具を手に

したメイドたちが集まってきた。

(なんでこんななメイドだらけなのよ!?)

それでよく穏便にすんでいるものだ。……いろいろな意味で。

「リラちゃん、その男の子はわたしが背負うわ!」

走り出す前に告げたら、リラちゃんはただ頷いて、

「お願いします」

「大丈夫か?」とは聞かずに渡してくれた。

わたしは一度トランクを地面に置くと、リラちゃんがしていたように男の子を背負ってから、トランクを持ちなおす。

そして、走り出した。

どうせメイドたちが邪魔をしてくるから、そんなに速度は必要なかった。サディはウィップで応戦し、リラちゃんはカトラスで応戦し、それぞれがなるべくけがを出さないように気をつかいながら戦っているのがよくわかる。

(特にリラちゃん、すごく器用だわ)

カトラスは反り返った刃が特長だけど、鋭利なほうで斬りつけたらどう頑張っても怪我をさせてしまうだろう。そこで逆側を使って相手の急所を突くことで、うまく気絶させているのだ。

そうしてやっと屋敷の前側にまわりこんだとき、二階の窓のそばで激しく飛びまわっているクルツポの姿が見えた。

(あ……!)

その窓ぎわに見える人影は、確かにウォレイツのもののようにだけど。

「誰かともみあってる……?」

まさか、あのときのメイド!?

おとなしくしていたのは演技だったのだろうか。

見上げているわたしに気づいたサディが、最後のメイドを倒すと上に向かって声をかける。

「ウォレイツ! ちょっと伏せてろっ」

それが聞こえたかどうかはわからないけど、窓ぎわから影が消え

た。

(またウィップを使ってなにかするつもり?)

とサデイを見てみると、なんとサデイはさつきエムルから奪ったピストルを取り出し、

「えええっ!?!」

撃った四発で、ウォレイツがいる部屋の窓枠をはずした。落ちてきた窓枠とガラスを、伏せてやり過ごす。

「相変わらず、でたらめな腕ですね」

呆れ半分のリラちゃん言葉に、サデイは「探偵の資格試験にあつたんだよ」と冗談めかして笑ってから、

「ウォレイツ! 受けとめてやるから飛びおりろっ!」

叫んだら、一度顔を出したウォレイツはためらいなく飛びおりてきた。

(なかなか度胸あるじゃない! ……ん?)

感心したのも束の間、サデイに抱きとめられたウォレイツの胸もとはなぜか思い切りはだけていて……

「……あんだ、あの暗がりでなにをもみあつてたのよ!?!」

「違っ……これはあいつが勝手に……!」

涙目になりながらも、必死に首を振り否定するウォレイツ。なるほど、主人が主人ならメイドもメイドなのか。

「さて、みんなそろつたところで港に向かうか」

サデイはウォレイツを地面におろしながらそう告げたけど、

「あれ? そういえばジェロトくとユレゼスさんは?」

「先に港に向かつてもらっています 追いつきましょう」

そう言つて、リラちゃんはわたしの背中から男の子を引き取つてくれた。

今度こそ、屋敷から離れるために全速力で走り出す。「この子が弟くん?」とか、「他の子はいたの?」とか、いろいろ聞きたいことはあつたけど、全部後まわしにして。だつてエムルの伝令より先に港へ着かなければ、出港を妨害されるおそれがあつた。

( つて、もう妨害されてたんだっけ )

あの検問官はどうしよう？ もともとエムルの息のかかったものなら、犯人がエムルだったと言ったところで無駄だろう。

しかしどうやら、タイミングはわたしたちに味方したようだ。

「だーかーらーっ、オレは二の島・ニティエルのルディギー・ニティエルだつて言ってるだろ！？ この島には婚約者のメイリーを捜しにきたんだ」

「メイリーだとお？ あの怪しい小娘か！ あやつを追っているなんて、おまえも充分怪しい！ 詳しく話を聞かせてもらおうかつ」

リラちゃんたちの船に背を向けて、検問官は新しい相手に夢中になっていた。しかも相手は、きつとお父さまの差し金でわたしを捜しにきたのだからルディギー。検問官の陰に隠れているから顔は見えないけど、その妙に甲高い声は苦手だった。

「 婚約者、だつて？ あいつが言っているのはお嬢ちゃんのことかい？ 」

みんなで倉庫の陰に潜んで、船に乗りこむチャンスを探しながら見守っていたら、腑に落ちないような顔で聞いてきたのはサディだ。「そうだけど、お父さまが勝手に決めた相手よ。まだ会ったこともないわ できればこのまま永遠に会いたくないけど」

「へえ？ なんだつて貴族に見初められたんだ？ 他の屋敷でも手品を披露したことがあるのか？」

( ……？ )

なにが気になるのか、なおも聞いてくるサディに、

「ああ、そういえばサディはまだ知りませんでしたっけ。メイリーは六の爵の娘ですよ」

「え」

リラちゃんが告げたら、サディは思い切り動きをとめた。それからじつと、わたしを見下ろして、

「は……ははっ、他にもここまで無茶する貴族がいるとはな！」

こともあろうに、声を立てて笑いはじめたのだ。

「ちよつ、あ、ほら！ 見つかつちやつた！」

笑い声に気づいた検問官が、こちらを振り返っている。

焦るわたしの頭に、サデイはぼんぼんとやさしく触れると、

「大丈夫だ、ふたりとも俺が引きつけてやるから、その際に船に乗りな」

「え？」

「どうせ俺はおまえたちの船と一緒に乗っていくわけじゃないしな」

(サデイ……)

その表情にさみしさが見えたのは、気のせいだろうか。

それからサデイは、自ら検問官たちのほうに飛び出していった。

「あんたらが捜してるメイリーって子なら、屋敷のほうで見たぞ？」

「なんだって!?!」

「ど、どこだ！ 案内しろっ」

にわかにもその場から動きだす面々と 船の上からこちらに手を振っているのは、ジェロトくとテフラナだ。

わたしたちは検問官たちが完全にいなくなったのを確認してから、堂々と船に乗りこむ。

「ジェロトくん、よく船に乗れたわね」

あの検問官は、おそらくずっとここにいただろうに。

するとジェロトくんは、少し恥ずかしそうに笑って、

「実はエンクが、荷物のなかに隠して乗せてくれたんだよ。この船に積んである荷物がないと困るとか、半泣きになりながらいろいろと理由つけてさ」

「エンクさんが？」

(半泣きはともかく、なんでサエル運輸商会の人が……)

不思議に思ったわたしに答えてくれたのは、ジェロトくんではなく下の部屋を見にいったリラちゃんだった。

「どうやら、検問官の目を盗んで荷物の積み替えをやってくれたみたいですよ。私たちはサエル運輸商会から独立したといっても、やっていることはサエルの下請けですからね。積み荷のことならむし

る彼のほうが詳しいのです」

苦笑を浮かべながら説明してくれたところに、結局は独立しきれ  
ていない悔しさがにじんでいるように思えた。

「出発するわヨーっ、舵を頼むワ！」

まだ下にいるユレゼスさんの声が聞こえてきたら、だいぶ復活し  
たらしいウオレイツが服の前を合わせながら。

「おれがやる」

そう言って、となりの舵室に入っていったのだった。

やっと落ちついてリラちゃんたちから話を聞いたところ、エムルの屋敷に囚われていたのは全部で五人いたそうだ。しかし弟くん以外の子はちゃんと意識があったから、鍵さえ壊してやったら自分で逃げる事ができたのだという。ただ弟くんだけはひどく衰弱していて、もし捕まったら危なかっただろうと、医学の心得があるらしいユレゼスさんが言っていた。

その弟くんは今、テフラナがつきつきりで看病している。

「一の島・イスウエルに着いたら、ちゃんと証言できるようにするからっ！」

助けたわたしたちに感謝してか、テフラナはそう言ってくれた。

こつちだつて、そんな身体で証言させなければならぬことを心苦しく思っていたけれど、その言葉で気持ちは少し軽くなった。

(やっぱりテフラナはやさしい子だわ)

そのやさしさゆえに、盗むことを選んだのだ。

……じゃあ、リラちゃんは？

甲板で風にあたりながら、黒い空と黒い海に囲まれたわたしの脳裏も、同じくらい黒く染まっていた。感情の色がいくつも折り重なって、もはや最初の色を保っている場所はない。

(リラちゃんは、島のみんなのために屋敷に忍びこんだのかな)

でもサダイのあの言いかたじゃ、まるで何度もそんなことをしていたかのようだった。そもそも船乗りというのは仮の姿で、義賊のほうが本当の姿なの？

わからない。

考えてもわからないことばかり。

わたしの島……六の島・ローロポールのことだつてそうだ。

(「狂い咲き」ってなによ)

わたしが生まれたから、お父さまは狂ったの？ 狂ったつてどう

いうこと？

わたしが見ていた「普通」は、偽りだったの？ 「間違いない」と、先に見せられていた　まるで手品の前準備みたいな。

（わたしが見ていた世界は）

あの屋敷は。

やさしい微笑みは。

本当は、どこにもなかったものなのだろうか　？

「メイリー？　夜の海は冷えますから、風邪を引く前になかに入っただほうがいいですよ」

しばらくそうしていたら、船室からリラちゃんが出てきて、わたしの肩に自分の上着をかけてくれた。

「ありがとう……」

それでもそこを動けなかったのは、この闇を照らしている月ならば、わたしの悩みをも照らしてくれるかもしれないと、なんとなくそう感じたからだ。

（月があれば　　）

こんな夜でも、雲の流れが見える。わたしがずっと追いかけていたと思っていたそれは、この黒い世界でもちゃんと動いていた。

（わたしも、動き出したい）

だけど心はそう簡単に、いうことを聞いてくれない。

「　　なにかあったのですか？　私に話せることならば、話してください」

背中を海に向けるようにして手すりに寄りかかると、リラちゃん

は、  
「女同士でしょう？」

照れくさそうな表情をして、こちらに顔を向けた。

（リラちゃんがこんな顔するなんて）

会ってまだ数日なのに「珍しい」と感じてしまつくらい、女性らしい顔がそこにはあった。

「ねえ、リラちゃんって船乗りになってどれくらいなの？」

一体どれくらいのおいだ、その顔を封印して生きてきたのか、ふと気になって聞いてみたら、

「五年ほどですよ。独立してからはまだ半年しか経っていませんが」  
答えてくれたリラちゃんの目は、「それがどうかしましたか？」と聞いていた。

（五年、か）

それならリラちゃんも、あの話を知っているのかな。

「じゃあ、六の島・ローロポールの噂を聞いたことはある？ 以前は七の島・ナフェストルみたいに明るい島だったのに、今は暗い島だって。それは、わたしが生まれたせいだって」

「えっ!？」

リラちゃんが本気で驚いているのは、その表情からわかった。そして必死に、フォローの言葉を探していることも。

「……確かに、六の島・ローロポールは他の島と比べても静かな島ですが、私はその穏やかさをとても気に入っていますよ？ 私自身は八の島・ハルメイルの出で、六の島・ローロポールの昔の姿は知りませんが、一体なんだってそんな話になっているのです？」

「わからないけど……エムルがそう言ったの。わたしが生まれたから、お父さまが狂ったんだって。わたしは『狂い咲き』なんだから……」

自分で口にしたなら、よけい哀しくなった。

（なんでそんなこと言われなくちゃいけないの？）

同じ貴族で、同じ屋敷で、同じ命を生きているはずなのに。だいち、わたしから見ればエムルのほうがよっぽどおかしいのだ。そんな人に「狂っている」と評されたお父さまは

「あいつ、あたしはその噂聞いたことあるよ」

「え……?」

不意に割りこんできた声に振り返ると、船室に続くドアのところからテフラナが顔を出していた。

「ごめんなさい、盗み聞きみたいになっちゃって……弟が目覚ま

したから呼びにきたの」

「あ、ほんとつ？ 今行くわ」

嬉しい情報に、やっとそこから離れられそうなたしだっただけど、「待ってメイリーさん。あのね、あたしが聞いたのは、社交的だった六の爵が、子どもが生まれたのを境に正反対になっちゃったという話なの。そのせいで、各島との定期船も減ったんだって」

「……！」

足をとめざるをえなかった。

逆にテフラナのほうが、ゆっくりとこちらに近づいてくる。ゆっくりと、言葉を紡いだまま。

「でも、あなたはそれを信じられないでしょ？ 信じられないくらい、ちゃんと両親に愛されていたんでしょ？ だったらそんな噂に惑わされる必要なんかないよ。あなたはただあなたの両親を、誇りに思えばいいんだわ」

「あ」

月明かりに照らされた、テフラナの目に浮かんでいた色は、まぎれもなく羨ましさだった。

（テフラナの、言うとおりだわ）

なんでわたしは、実態のない噂なんかにも心を揺さぶられていたのだろう。自分が見てきたものが嘘かもしれないなんて、疑いはじめてしまったら自由に息をすることさえできないのに。

お父さまもお母さまもじいじも、口ではなにを言っているても、わたしを見返す視線はいつも穏やかに澄んでいた。そんなあたたかさにも包まれて、流れていた時間も雲も、すべてがづくりものだったなんて思えない。屋敷の外に出してくれなかったのだから、きつとわたしを守るためののだと、本当はうすうす気づいていた。

（それでも出たいと思ったのはわたしで）

出た先で聞いた噂に惑わされるとは、「それ見たことか」と指をさされても仕方がない話だ。

結局のところ、どれが真実かなんて自分で選ぶしかなくて。

そんな単純なことに、弟とたったふたりきりで生きてきたテフナに諭されて、初めて気づくなんて

急に恥ずかしくなって、思わず俯いてしまった。わたしの肩に、リラちゃんがそっと手を乗せてくる。

「さあ、なかに入りましょう?。」

「うん」

頷いたわたしは、今度こそ足を動かすことができた。

しっかりと、顔をあげて。

ちょうど夜が明けた頃、わたしたちは一の島・イスウエルにたどりついた。この船はここ所属の船だから、港に長くいても他の島みたいに料金は発生しないらしいけど、深夜に着いたところですから国王に会えるわけじゃない。それがわかっていたから、他の船の邪魔にならないよう海上で時間調整していたのだった。

国王の住まう島の港は、さすがに検問官の数が多く、この船にも着いたとたんにふたりの検問官が近寄ってきた。しかし、リラちゃん顔を見るなり、

「ああ、サエル運輸商会の。話は聞いています、陛下に面会されるのはどなたですか？」

話が早い。どうやらエンクさんが、事前に連絡をまわしてくれていたようだった。

「テフラナ、お城までついていなくて大丈夫？」

弟くんの肩を支えながら、船室の出口に向かおうとしていたテフラナに問いかけたら、

「ここままでしてもらっただけで充分だよ。あとはちゃんと、自分の言葉で伝えられるから」

顔だけ振り返ったテフラナはそう告げると、ふっと目を細めて続けた。

「この乗船料は、リリードさんが来月七の島・ナフェストルに来たとき必ず払うからね」

それを聞いていたリラちゃんが、横から、

「いりませんよ。このあとちゃんとメイリーから徴収しておきますから」

「えっ！？ ……と、うんっ、まかせて！」

(そうよね)

あとわたしができることなんて、それくらいしかない。大切なこ

とを気づかせてくれたお礼も、そんなことでしか叶えられないのだ。  
「……ありがとう」

ふわり笑ったテフラナは、やっぱりどこかさみしそうに見えた。  
そうして、わたしたちはイースウエルに上陸することなく、  
テフラナと弟くんだけをおろして、船は当初のルートである八の島・  
ハルメイルへと向かうことになった。

「まったくウ、ご丁寧に八の島・ハルメイル行きの荷物しか載せな  
いちゃっかりぶりがエンクねエ」

もしや一の島・イースウエルにおろす荷物が載っていないかと、  
下に確認に行っていたユレゼスさんが呆れたように告げる。

「予定外の荷物をおろしたら、さっさと日常の業務に戻ってこと  
だろ」

それに応えながらわたしのほうを見てきたのは、珍しく船室のな  
かにいるウオレイツだ。今かわりに舵を取っているのはジェロトク  
んで、実はウオレイツよりジェロトクんのほうが舵取りはうまいら  
しい。だからウオレイツはあえて自分から舵室に入ることが多いの  
だけど、さっきまで入りっぱなしだったせいでリラちゃんに交代命  
令を出されたのだった。

(今はそれも、ありがたいことだけ)

ジェロトくんはわたしを慕ってくれている。船室内にいるときは  
大抵わたしのとなりに座って、他愛もない話をしたり簡単な手品を  
やって見せたりしていた。

でも今は そのとなりが怖いのだ。

(ジェロトくんが純粹にいい子だったことは、ちゃんとわかってる  
のに)

ジェロトくんはちょうどエムルと同じ背格好で、髪型も明るい雰  
囲気も似ていたから……心のどこかに残る恐怖が、突きつけられた  
ピストルが、わたしの身体をこわばらせてしまう。

「ん？ おいメイリー？」

(あっ)

わたしが反応しなかったからか、呼びかけてきたウォレイツの声で我に返った。

「……その『予定外の荷物』のなかに、わたしも入ってるってわけ？」

さつき変に強調して言うてくれたから確認してみたら、ウォレイツは、

「どうだかな」

鼻で笑って顔をそむけた。ほんとかわいくない！

(エムルの屋敷では、ちよつと心配してくれたみたいなのにな)

あのメイドに襲われたおかげで、ウォレイツも異性不信になってしまったのか。

「心配しなくても、未払い分はちゃんと返すからね！ 八の島・ハルメイルでは見てなさいよっ」

本当は七の島・ナフェストルでどうにかしたかったけど、結局食堂でも一回しか稼げなかったし、エムルの屋敷で披露した分には、たてはただ働きになってしまったのだから仕方がない。

わたしが意気こんで告げたら、水を差してきたのは意外にもリラちゃんだった。

「そのことですけど、ユレゼス。八の島・ハルメイルではなく、九の島・キーエリドールに向かうことはできませんか？」

(えっ?)

でも八の島・ハルメイルって確か、リラちゃんの故郷のはずなのに……。

リラちゃんの視線を追って、一緒にユレゼスさんを見上げたら、「リラード、ここまで来てまだばれたくないと思ってるの？ いつも八の島・ハルメイルでの給油に合わせるもの、九の島・キーエリドールまでじゃ燃料がちよつと足りないわヨ」

リラちゃんに対してでも、遠慮なく呆れ声を出せるユレゼスさん。それでも瞳には、相変わらずのやさしさが宿っていて、

「だいいち、これから八の島・ハルメイルに行くのだから予定より

早いのにサ、九の島・キーエリドルになんか向かったら、よけいに ああ」

喋っている途中で、リラちゃんの意図に気づいたようだった。

「だから、嫌なのネ」

「ええ、この際ばれるのはもう仕方がないと思っっていますよ」

「? ?」

でもわたしには、ふたりの会話がさっぱり理解できない。思い切り首を傾げていたら、

「おまえ、あの鳩みてーだぞ」

こともあろうにウオレイツに笑われてしまった。

そのあと昼頃、わたしたちは八の島・ハルメールにたどりついた。事前に聞いた話によると、八の島・ハルメールは地下資源が豊富な島らしく、特に島の中央あたりでは船の燃料などに使われる油がよく採れるらしい。ただ、あまり採りすぎると島が沈んでしまうのではと心配する声もあり、地下開発賛成派と反対派で争いが起こることもしばしばあるという。

「それでも、基本的には平和でいい島ですよ」

リラちゃんは最後にそうまとめてくれたけど、その表情に笑顔はなく

(なにか引つかかるところがあるのかな)

わたしが六の島・ローロポールに対し、感じていた違和感と同じように。

島から離れることで、リラちゃんにも見えてきたものがあるのだろうか。

八の島・ハルメールの港でも、他の港同様に検問官によるチェックがあった。そしてまたまた、登録証に記載のないわたしのことにつつこみを入れられていたけど、この島の検問官はちゃんと理解してくれたようだ。

(ほらっ、全然怪しくないじゃない!)

わたしだって黙っていれば普通の女の子なんだから……と思った

のも束の間。

「ではリロードさん、あちらに。すでにファンクラブのみなさんがお待ちです」

(え)

簡単に通したのは、どうやらリラちゃんを早く連れていきたかっただけのようだった。

「……………そうですか」

続けた検問官に応えようと、リラちゃんはわたしのほうを向いて「やれやれ」と肩をすくめたあと、検問官の促した方へと歩いていく。

(ファ、ファンクラブっ!?)

七の島・ナフェストルでも人垣ができるくらい人気だったリラちゃん。でもここじゃあもつと人気らしい。一体何人の乙女心をもてあそべば気がすむの!?

俄然興味がわいたわたしは、慌ててそのあとを追いかける。

港に倉庫が多いのは、利便性の問題からかどの島も共通していたけど、驚いたのはその倉庫群を抜けた先だった。

「あつ、リロードさまよ!」

「予定より早いわっ」

「嬉しい! あたしたちのために早く来てくださったのね(はあと)

広がっていたのは花畑で、そこで寝転んだり花輪を編んだりして遊んでいた女の子たちがいつせいにこちらを向いたのだ。そして走り寄って 来るかと思っただけど、意外にも礼儀正しくみんな二列に並んだ。

「お帰りなさいませ、リロードさま!」

リラちゃんが通る道をあけて、両側からそろって挨拶してくる。

(さ、さすがファンクラブ!)

七の島・ナフェストルと違って統率が取れてる!

わたしがそう、変な方向に感心しているあいだに、

「ただいま」

落ちついた声でリラちゃんが返したら、恐ろしく黄色い歓声があった。わたしは思わず両手で耳をふさぐ。

(なんて超音波攻撃なの……っ)

「あ……大丈夫ですか？ メイリー。あなた、ついてこなくてもよかったのに」

そんな声にも慣れているのだろう、涼しい顔で振り返ったリラちゃん。そうか、この攻撃があるのがわかってるから、みんなついてこなかったのか……。

しかし攻撃は、種類だけではなかった。

「リ、リラードさまっ!? その娘はなんですか？ まさか……まさか!？」

次に聞こえてきたのは悲鳴。ああ、違う意味で鼻血が出そう……  
「彼女は手品師のメイリーですよ。今私が運んでいる荷物のひとつです」

リラちゃんがそう答えたら、さすがファンだ、誰もその発言を疑わず静かになった。

(恋は盲目ってどういうこと?)

……なんか違うか。「恋」という言葉にあまり近づいたことないわたしには、よくわからない。

でも、ひとつだけ。

「ねえ、ファンクラブの会長ってどなた？」

「はい？ 私ですけど……」

「ちよつとメイリー、なにをする気ですかっ？」

なぜか慌てはじめるリラちゃんを、軽く無視して。

わたしは前に進み出てきてくれた会長さんに向かって、

「わたしも入会させてください!!」

「あらっ、同志なの？」

「メイリー……」

がつくりとうなだれるリラちゃんをしり目に、わたしたちは手を取りあった。

「わたし、初めてリラちゃんを見たとき、あまりの美しさに鼻血出しちゃったの！」

「あら、鼻血の量なら負けてませんわよっ」

「一緒に増血メニユーを考えましょう」

「なんの話をしているのですか、あなたたちは……」

他の女の子たちも近づいてきて、きゅっきゅと盛りあがっていたら、リラちゃんに首の後ろを引つ張られた。そしてそのまま、みんなから少し離れた位置まで連れていかれて、

「なによー、リラちゃん。今いいところなのー！」

「あのねメイリー、あなた、ファンクラブってどういうものかわかっていますか？」

なぜかこそそと聞いてくる。

「わかってるわよ？ 定期的に会報が送られてきたり、生写真もらえたりするでしょ（はあと） だってわたし、世界的に有名な手品師・アレイグレスのファンクラブに入ってるもの！」

そう、わたしが屋敷を出る際に最も心残りだったのは、その会報を見られなくなることだったのだ。

わたしの答えに、リラちゃんはまた困ったように眉をさげると、

「あー……わかりました、わかりましたよ。私の写真でよければあとであげますから、ちょっと静かにしててください」

「サイン入りね！」

「はいはい」

「……もう遅いわヨ？ リラード」

「えっ？」

すぐ近くから聞こえた声に振り返ると、そこにはユレゼスさんたち三人と、見知らぬ女性がひとり立っていた。

「リラード、久しぶりですね」

女性はいち早くこちらに近づいてくると、リラちゃんの手を取り両手で包みこむ。リラちゃんと並んでも違和感がないほど、女性にしては背の高い人だった。それでも、きちんと結いあげられた髪や、

高貴さをつかがわせる上品なドレスが、女性らしさをしつかりと際立たせていた。近くで見ると意外に歳がいつていることがわかる。四十代くらいだろうか。

「お久し、ぶりです……」

はきはきとした女性とは裏腹に、リラちゃんは珍しく戸惑った声を返す。

（静かにしろって、もしかしてこの人に見つかりたくなかったのかな？）

さっきのユレゼスさんの言葉から、わたしはそう予想した。

リラちゃんのとりにいるわたしに気づいて、ひとつ笑顔をくれたその女性は、それから少し離れた位置にいるファンクラブのみんなに向かって、

「すみません、みなさん。わたくし、リラードと会うのは二年ぶりです。どうかゆつくりと話をさせてくれませんか」

（うわ、大胆なこと言うなあ）

感心しかけたわたしは、やっぱり裏切られる。

「ええっ、二年ぶりですか!？」

「それはかわいそう……どうぞお話になってください!」

「私たちはもう行きますから」

「ごゆつくり、八の爵さま」

（え!?! この人が八の爵っ?）

どつりでみんな遠慮するはずだ。

あつという間に、その場にはわたしたちだけになってしまった。

「……………」

海風が花のにおいを含んで、ふわり舞いあがる。そんななか無言で向きあふふたりが、実に心地 悪い。

思わずわたしは、ふたりのそばを離れてユレゼスさんたちのほうに逃げこんだ。そしてさつきリラちゃんにされたみたいに、ウォレイツの首根っこをつかんでさらに離れた位置まで引っ張っていく。

「ねえっ、あれってどういうこと!？」

小声で怒鳴ったら、ウォレイツはなぜか目を丸くしていて。

「ウォレイツ?」

「おまえ、いつもならシエロトを連れてきそうなのに」

「うっ」

(す、鋭い……っ)

いつもとは同じ態度を取れないわたしを、ウォレイツはちゃんと見抜いていたのだ。

顔をしかめて、低い声で聞いてくる。

「あのエロガキに会いにいったとき、またなにかされたんじゃないだろーなっ?」

「い、今はわたしのことなんていいでしょ! それよりリラちゃんのことよっ。あの女の人なんなの!？」

強引に話題を変えたら、ウォレイツも諦めてくれたようで。ひとつ息を吐いてから、答えた。

「あれはリラードの伯母だ。んで、リラードの爵位を継いだ人でもある」

「……………なっ」

(それって、リラちゃんか貴族だったってことっ?)

「なんですってええええええ!？」

高く響いたわたしの素っ頓狂な声に、クルツポさえ胸ポケットから飛び出していった。

屋敷へと向かう道を、リラちゃんとリラちゃんの伯母・チャレーファイアさんを先頭に歩いていた。「ゆつくり話がしたいから」と、まとめて屋敷に誘われたのだ。

わたしは列の後ろのほうを歩きながら、リラちゃんのことについていちばん詳しくそうなユレゼスさんから話を聞いていた。

「あの人は月二回、自分で視察するためにああして港にやってくるんだけどネ、リラードはいつもそれと遭遇しないようタイミングをずらして訪れていたのヨ」

だけど今回、諸々の事情から七の島・ナフェストルでの滞在期間が予定より短くなってしまった。しかし一度一の島・イスウエルまで行ってしまったため、海上で長く待機できるほどの燃料もない。そんなわけでこの八の島・ハルメイルに早めに着いてしまったから、見事にチャレーさんと遭遇してしまったのだった。

(そういえば、リラちゃんに会った二年ぶりって言うってたわね)

「なんでリラちゃんさけてるの？ あの人のこと、嫌いなのかな」「どうかなア……嫌いじゃないだろうし、感謝もしていると思うけど。ただ、本人はせっかく『普通の船乗り』の自分に慣れてきているっていうのに、あの人に会えば嫌でも貴族扱いされるからネ。単純にそれが嫌なんでシヨ」

「ふーん」

わたしはそつと、その後ろ姿を盗み見た。

わたしが貴族であると知っても、厳しく接してくれたリラちゃんはきつと。自分が貴族から船乗りになったとき、壁となったたたくさんのことを、「貴族」という殻から出てしまえば誰も甘やかしてなどくれないことを、わたしに伝えようとしていたのかも知れない。

(リラちゃんは、どうして船乗りになったんだろ?)

リラちゃんが船乗りになったのは、五年ほど前のことだと言って

いた。つまりリラちゃんは、十五のあたりまで貴族だったということになる。

七の爵のエムルも子どももの貴族だったけど、親がどうしたとかそのへんの事情を尋ねる余裕は残念がらなかった。おそらくは、もともと爵位を持っていた両親が亡くなってしまったから、子どもエムルがそのまま引き継いだということなのだろう。

(それなら、リラちゃんの両親も　?)

ユレゼスさんに聞こうと思えば聞けたけど、わたしはやめた。そこはやっぱりリラちゃんに直接聞いたほうがいいと思ったのだ。

(女同士、だものね!)

わたしもリラちゃんが抱えているものを軽くしてあげたい。話を聞いてもらえるだけでも心は軽くなるんだって、身をもって学習してきたから。

「ねね、メイリーねえちゃん」

不意にぐいと、トランクを持っていないほうの手を引かれて、「うえっ? あ、な、なに? ジェロトくん」

わたしは反射的に手を引っこめてしまった。

見上げてくるジェロトくんの表情は、とても不思議そうだ。

「おっちゃんと内緒話ばかりしてないで、おいらとも話してよ」

「え、ええ、いいわよ」

前を歩いていたウォレイツが、振り返ってこちらを見てくる視線が痛い痛い。

(大丈夫、ちゃんと話すから!)

ジェロトくんはエムルとは違うもの。

違うの、違うの、違うの。

より自然に話すために、自分自身に暗示をかけた。

わたしからジェロトくんに手を伸ばしたら、ジェロトくんは嬉しそうに重ねてきてくれて、「へへっ」と笑う。

「あのね! このあたり、そこら中に大きな穴があいてるでしょ?

あそこの下から、船の燃料とかになる油を採ってるんだって」

「そつえば、すごいにおいね……」

船の下の階に行つたときも、同じようなにおいがしていたけど、島の奥に進めば進むほど強くなつてくるこのにおいは、もはや比較にならないくらいだ。あたりを見まわしてみると、ジェロトクんの言うようにいたるところに穴があいていて、近くにはたくさんのテントが張つてあつた。おまけに、そのへんにいる人たちはみんな、いかにも「力仕事してます！」という感じの、船乗りには引けを取らないほど屈強な男性たちばかりだつた。

(むしろ、リラちゃんの船の面々は負けてるわね……)

まともに船乗りに見えるのはユレゼスさんくらいだ。

そのユレゼスさんは、苦笑を浮かべると、

「でも港はあまりにおいしなかつたでシヨ？ 風が島の奥に向かつて吹いているのと、倉庫裏の花畑のおかげでだいぶ緩和されているのヨ」

(ああ、なるほど)

あの不自然な花畑には、そういう意味があつたのか。リラちゃんを歓迎するただけに植えられたわけじゃないのね。

そんなことをわたしが考えているうちに、

「メイリーねえちゃん、おいらがそのトランク持つてあげるから、鼻ふさいでいなよ。おいらたちは慣れてるから平気だけど、メイリーねえちゃんきつくない？」

そのジェロトクんのあまりのやさしさにめまいがした。こんな子を、エムルと重ねて見るなんて失礼も甚だしいことだ。

(ごめんね、ジェロトくん……)

お詫びの意味も兼ねて、わたしは宣言する。

「大丈夫よ！ いざとなつたら鼻に鳩でも詰めとくからっ」

「でも、一匹じゃ片方しか防げないよ」

「アツハツハ」

そのジェロトクんのあまりにも真面目な切り返しに、ユレゼスさんが大声をあげて笑つた。先頭を歩いていたりリラちゃんとチャレー

さんもこちらを振り返ったくらいだ。

「バーカ」

ウォレイツがいつものようにからかうと、ジェロトくんは頬をふくらませて、

「なんだよ、別に変なこと言っていないもんっ」

（ああもう、ほんとかわいいんだから！）

ぐりぐりと頭をなでてやったら、すぐ笑顔に戻った。

それから屋敷に着いたあと、わたしに与えられたのは手品を披露する時間だった。どうやら、道中にリラちゃんかわたしの説明をしてくれたらしく、わたしに乗船料&宿泊料を稼ぐチャンスを得られるという。

用意された部屋には、わたしたち以外に屋敷で働いている人々や、なんと島民たちも集まってきた。この島では屋敷の一部が島民に解放されていて、こうして気軽に入ることもできるし、様々な催しものが行われるらしい。

（どつりで、チャレーさんもリラちゃんも人気があるはずだわ）

そんなふたりに招待してもらった形になっているのだ、ここは失敗できない！

手品を披露するわたしの手にも力がこもった。クルツポも、いつもとは違うわたしに気づいているのか、気合いの入った鳴き声で応援してくれる。

まずはいつものシルクハットを使った手品から入って、港近くの花畑にいたときこつそりトランクのなかに詰めこんでいた花をシルクハットから取り出すと、室内はかなりわいた。つかみは上々みただ。

（じゃあお次は ）

わたしがいつも持ち歩いているトランクは小さく、大きな道具が必要な手品はできない。だからわたしはいつも、人体切断とか人体貫通とか、人の身体が必要な手品ではかわりにクルツポの身体を利用していた。

「おいで、クルツポ！」

小さな箱をかまえて待つていると、お客さんの上を飛びまわっていたクルツポが戻ってくる。箱に入り、ひよっこりと首だけ出したクルツポに、

「かわいい〜」

「お利口さんね！」

その仕草だけでお客さんを笑顔にってしまう分、人間の身体でやるよりもある意味お得だった。

「さて わたしは鳩を殺しません。でも、これからこの短剣を刺します」

クルツポの箱を、用意してもらったテーブルの上に置いてからわたしを取り出したのは、例の短剣。そう、エムルの屋敷に入る時、ウォレイツに貸していた仕掛けつきの短剣だ。

「えいつ！」

とわざと声をあげて刺したところで、剣身が引っこむだけで箱に刺さるわけではない。だから箱の向こうまで剣先が貫通することなど、当然あるわけがなかった。

「なあなあねーちゃん、その短剣ほんとは刺さってねえんじゃ？」

観客から飛んできた鋭い突っこみに、わたしは待つてましたとばかりに答える。

「あら、よく気づきましたね。そう、この短剣はこういう仕掛けがあるにせものです！」

短剣を箱から離して、わざと目の前で剣身を引っこめて見せたら、あちこちから忍び笑いがもれる。

(そう、これもテクニクのうちのひとつ)

あえて先に失敗を見せることで、次を信じこませるのだ。

「では今度こそ、本当に刺しますからね！」

もう一本同じ短剣を取り出して宣言したら、部屋のなか全体がぐくりと息を？んだ。

「えーいつー！」

わたしが刺した短剣は、箱とクルツポの身体を突き破り、向こう側から顔を出す。それでもクルツポはご機嫌で「クルツポー」と鳴いたから、忍び笑いはあつという間に拍手に変わった。

（よくやったわ、クルツポ！）

そう、取り出したのは同じ短剣なのだから、やっぱり箱には刺さっていないのだ。それなのに向こう側に貫通しているように見えるのは、クルツポが足で仕掛けを操作しているから。わたしとクルツポのチームワークのよさが、わたしの手品の最大の魅力なのである。そのあともいろいろな手品を披露して、わたしが最後に選んだのは

「実はわたし、今こうして手品をやりながら、みなさんのなかに五枚のカードを隠しました。これからこの鳩が捜しにいきますから、見つかったらおとなしく立ってくださいね」

言いおえたとたんに、笑いどよめきが室内に渦巻く。その頭上を、再びクルツポが羽ばたきはじめた。

最初に向かったのは、リラちゃんのところだ。

「えっ？ 私ですか!？」

クルツポに髪どめを突つつかれ、そのなかから出てきたのは「アリの絵」のカード。

続いてはジェロトくん。

「おっ、おいらにも持ってないよ？」

と不思議そうな顔をしたそのポケットから、「リスの絵」のカードが。

そしてウオレイツの「ガチヨウの絵」、ユレゼスさんの「トンボの絵」と続いて、最後に。

「わ、わたくしもっ!？」

クルツポが近づいていったのは、チャレーさんの足もとだった。失礼ながら長いスカートのすそをめくってみると、そこに「ウサギの絵」のカードが。

みんなからそれらを回収して並べたところで初めて、観客のひと

りが声をあげた。

「……ああ、そうだわ。最初だけ繋いでみれば、『ありがとう』ね！」

わたしはすかさずシルクハットのなかから花を取り出すと、応えてくれた女性に手渡す。

「お姉さん正解っ！　　そんなわけで、みなさんありがとうございます  
いましたっ！」

「クルッポー！」

それからそろってあたまをさげたら、盛大な拍手と歓声がわたしたちと包みこんでくれた。

その五枚のカードは当然事前に仕込んでおいたものだったけど、リラちゃんたちはみんなそれに気づいていなかったみたいで。むしろ当人たちがいちばん驚き、その反応があまりにも自然だったから、誰もリラちゃんたちがサクラだなんて考えなかったようだ。

（作戦の勝利ね！）

おかげで本物じゃないお花のほうもいっぱいもらえて、これなら充分に返せそうだった。

「ねえリラちゃん！　わたしが払う分つていくらだったっけ？」

集まっていたお客さんたちがみんな戻ったあと、通された居間でとなりのリラちゃんに振ったら、

「その話はあとにしてください」

（あれ？）

チャレーさんに会ってからこっち、なんだか機嫌の悪いリラちゃんはまだ直っていないかった。

「ねね、メイリーねえちゃんはお金払ったら船おりちゃうの？」

またちゃっかりと、逆側のとなりに陣取っているジェロトくんが口を開いても、

「ですから、その話はまたあとにしてくださいと言っているでしょっ？」

怒鳴りはしないものの、きつい口調でリラちゃんは告げる。

その様子を見て、向かいに座っているチャレーさんは、  
「まあまあ、落ちつきなさいな。今飲みものでも運ばせますから」  
そう一度区切ってから。

「それにしてもメイリーさん、先ほどの手品はとてもよかったですよ。ずいぶん前にも旅の手品師が訪れたことがあったのですが、彼にもひけをとらない素晴らしい出来だったと思います」

「彼」という言葉に、わたしはピンとくる。

「え……っと、それってもしかして、エフレイシドっていう名前の  
人じゃなかったですか？」

するとチャレーさんは、軽く考えこむようにあごに指をあて、

「ああ　確かそんな名前だった気がしますね」

(やっぱり!?)

やっとな繋がった。師匠が訪れていたのは、思ったとおりうちの屋敷だけじゃなかったのだ。

「そ、その人が今どこにいるかって、わかりますか??」

思わず身を乗り出して聞いたわたしだったが、

「さすがにそこまでは……ただ、まだ旅の途中だということをおっしゃっていた覚えがあります。今も旅をしている可能性はあると思いますよ」

「そうですか……」

残念だけど、仕方のないことだ。

とたんにしぼんでしまったわたしに、気を取り直したようにリラちゃんが話しかけてくる。

「その人、メイリーの手品の師匠でしたよね」

「まあ、そうなんですか？」

「ええ、小さい頃ずっとくっついて手品を習ってた……わたし、大好きだったの」

手品が好きだったのか、師匠が好きだったのか。今でもよくわからない部分はあるのだけど、そこにあつた感情はまぎれもなく

「初恋というやつですか。それはそれは……」

ニヤニヤ笑ってくるリラちゃんの発言が、やっぱりいつもとは違う気がして。

「なによーっ、リラちゃんだって初恋くらいあったでしょ!？」

「えっ？」

わたしも照れて告げたら、リラちゃんの表情から一瞬にして笑みが消えた。

(あ、あれ……?)

「私に、そんな俗物的な感情は存在しませんよ」

冷たい声音でそこまで言い放つと、不意に立ちあがって、

「失礼」

そのまま居間を出て行ってしまった。

(リラちゃん……?)

あいたとなりの席が、妙に寒い。

「お、怒らせちゃったかな」

「メイリーさんのせいではありませんよ。あの子、初恋にはいい思い出がないから……」

チャレーさんがそう応えたとき、リラちゃんと入れ替わりのように飲みものを運んできたメイドが入ってくる。

そうしてお茶をしながら、やけに話が弾んだのは　そう、そのリラちゃんの初恋話だった。

(ごめんリラちゃん!)

心のなかで謝りつつも、興味津々で聞いてしまった。

リラちゃんは、本格的に男装するようになる以前から、そんなところの男子よりよほど人気があったらしい。やんちゃな性格で言葉づかいも荒く、今のリラちゃんが「です・ます」にこだわっているのは、そうしないと地が出てしまうのを恐れているゆえだそうだ。そんなリラちゃんだったから、小さい頃初恋の相手に告白したものの、「おまえみたいな男女にそんなこと言われたって気持ち悪いだけだ」と、こっぴどく振られてしまったという。しかもその相手が、あのサディの兄・ルノクトールさんだというから驚きだ。

(腐れ縁の幼なじみって言ってたっけ)

きつと兄弟そろってそうだったのだろう。

「じゃあそのルノクさんは、今どうしてるんですか？」

サデイが探偵だから、やっぱり同じような職業かな？ と。

何気なく聞いたことを、わたしは後悔した。

「……ここには、いません」

「え？」

チャレーさんの表情は重く沈み、明るかった空間は一瞬にして崩れ去る。

(あたし、聞いちゃいけないこと聞いちゃった……?)

事情を知ってそうなるユレゼスさんに視線を合わせたら、「やれやれ」と息を吐いていた。

そこに、

「すみません、メイリーさんに面会したいとかたがいらしているのですが」

ノックとともに入ってきたのは、さっき飲みものを運んできてくれたメイドだ。

「わたしに？ 誰ですか？」

(タイミングからしたら、追いついたサデイかしら?)

立ちあがって尋ねたら、メイドは首を振り。

「わかりません。尋ねても名乗ってくれなくて……」

(ああ ルデイニーのほうか)

世間知らずな貴族なら、そんなこともやりそうだと。自分もそうであることを柵にあげて、わたしは思った。

「わかりました、今行きます」

本当は行きたくない。会いたくない。でも、だからって他の人に迷惑をかけたままにしておくのも気が引けて。ドアのところに向かうと、ちょうどそこから、

「メイリー!? ここか!」

「!」

大袈裟に開けて入ってきたのは、声からして確かにルディギーだった。

「あなた、勝手に入ってきたのですか!？」

呆れた声で怒鳴るメイドを無視して、ルディギーはそばに立っていたわたしを認めるとむんずと手をつかんでくる。

「やつと見つけたぞっ、メイリー・ローポール!」

どうやらわたしの顔は知っているらしい。お父さまが写真でも送っていたのかしら。

わたしとたいして変わらない体格のくせに、意外と力は強く、わたしをぐいぐいと引っ張りながら廊下を歩いていく。

「なぜオレから逃げるんだ？ オレは六の爵が決めたおまえの婚約者なんだぞっ?」

「だからってあなたは、好きでもない娘と結婚できるのっ？ どうせロ口家に入りこむことだけが目的なんでしょう!？」

「う、うるさい！ 黙れっ!」

手首がはずれてしまいそうなくらい強くつかんで、ルディギーはそのままわたしを引いていく。後ろに目をやったらみんな不安そうな表情を浮かべて追ってきていた。きつと相手が貴族であり、そしてわたしの婚約者であることは一応本当だから、手を出していいものか迷っているのだ。

それでも、いざとなったらきつと助けてくれるだろう。そういう安心感があったから、わたしは変に抵抗せずルディギーに引っ張られていた。

(屋敷のなかで暴れたらチャレーさんに迷惑がかかるしね)

面倒が嫌いなリラちゃん機嫌だって、これ以上損ねたくはなかった。

そしてとうとう屋敷の外に出て、門へと向かおうとしていたところ

(あら?)

見覚えのある人影が立っていた。

「あ！ お、おまえは七の島・ナフェストルで僕を騙したやつじゃないかっ！」

サデイだった。

「ちよいと失礼っ」

サデイはそんな掛け声とともにぶんとういップを振ると、その先は見事にルデイギーの手首をとらえて。

「いつ……いたたたた」

ぎりぎりと言が聞こえるくらい、強く絞めあげた。おかげでこっちの手が放れる。

「そんなに強くつかんでいたら、お嬢ちゃんだって痛いだろっが！」  
確かに、つかまれていたところはまっ赤になっていた。

「メイリーっ！」

屋敷のほうからリラちゃんも走ってきて、わたしとルデイギーのあいだに割って入ってくれる。外に出てきたおかげで、窓からわたしが連れていかれそうなのが見えたのかもしれない。

「な、なんだよおまえたちはっ！？」

威勢よく声をあげるものの、ルデイギーはすでに及び腰だった。

それでもリラちゃんはためらわず、腰のカトラスを抜くと剣先をルデイギーに向ける。

(ちよ……リラちゃんっ？)

なんでか知らないけど、かなり本気モードだ。

「男は好きでもない女を抱くことなど快樂のひとつと割り切れるかもしれないが、女はそうもいかない。おまえはそれをわかっているのかっ？」

「……っ！？」

リラちゃんが低い声で脅すように告げたら、至近距離で見つめられたルデイギーの顔色はどんどん赤みを帯びていき。

「坊ちやまあゝ、大丈夫ですかあゝっ！？」

遠くから聞こえてきた仲間(?)の声に、はっと我に返ると、

「ぶ、ふんっ、今回はこれで許してやるけどな、次は絶対連れ戻す

「からな！」

なぜかわたしではなくリラちゃんに向かってそう告げると、後ろにいたサディを「邪魔だ！」と押しのけて門から出ていったのだ。た。

「あつ、坊ちやま！ ばあやをおいていかないでくださいましょ。このとおりあまり足が速くないんですからあゝ」

「うるさい！ 行くぞっ」

「もうですか？ ちよつと坊ちやまっ？ ずいぶんと顔が赤いですが……」

「だからうるさいって！」

（うるさいのはどっちよ……）

遠ざかる声に考えてから、わたしはリラちゃんをついと見上げる。

「ん？ なんですか？」

「こともあろうにルディギを落としてしまった自覚がないのか、首を傾げたところが妙にかわいらしくて憎らしい。」

「ううん、かばってくれてありがとう。リラちゃんがあんなこと言ってくれるなんて思わなかったよ」

「ごまかして告げたら、珍しくリラちゃんのほうは直球で、

「それは……仕方がないでしょう？ 私たちのなかで女としてあなたをかばえるのは、私しかいませんから」

「おまえ自身も、バクターに言い寄られてだいぶ苦労したもんなあ」

「サディっ！」

「からかうようなサディの発言に、叫ぶリラちゃんはもういつもどおり。」

「バクターって？」

「わたしが聞いたら、サディは片目をつむりながら、

「サエル運輸商会のトップさ！」

「ああ」

「リラちゃんがそこから抜けたわけを、思い切り納得した。」

「メイリーさんっ、大丈夫でしたか！？」

問題児がいなくなったのを確認してか、チャレーさんも屋敷から出てくる。

「すみません、うちのメイドたちがなにもできなくて……」  
「いえ」

エムルのところみたいに、掃除用具を武器に嬉々として襲いかかられても正直困るから、それでよかった。

「ひとりいる警備員には、ちょうど買いものをお願いしていて……」  
チャレーさんがそう続けたら、

「相変わらずなんだな、あんたも」

応えたのはサディだった。

「サディトール……あなたも島に戻ってきていたのですね」  
「たった今ね」

肩をすくめたサディに、チャレーさんはくすりと笑った。

「よかつたら、みなさん今日は泊まっていつて。久々に賑やかな夜を過ごしたいわ」

その夜わたしは、リラちゃんと同じ部屋に泊まった。本当はわたしの分の部屋も用意してくれたのだけど、リラちゃんが断ったのだ。（なにか話したいことがあるのかな？）

そう思う反面、ひとりで過ごさずにすんだことに安堵していた。だってひとりでいたら嫌でも思い出してしまう。突きつけられたピストルの恐怖と、近づいてくる指先。

当然この屋敷だって、構造は同じなのだから。

「こんなふうに寝転がって会話するのは、これで二回目ね」

並んだベッドに横たわり、同じ天井を見上げて、わたしは口にした。初めてリラちゃんが女性なのだを知った日。向かいあって話すよりも、なぜか自然に言葉があふれてきた。

わたしの言葉に小さく笑ったりリラちゃんは、次の瞬間には真面目な声をして、

「メイリー、今日はすみませんでした」

「……別に、謝られることはしてないと思うけど」

（わたしもリラちゃんの初恋話、勝手に聞いてちゃったしね！）

後半を口に出さなかったら、リラちゃんは続けて、

「機嫌が悪いと思ったでしょう？ 何度かみんなにやつあたりしました。もちろんあなたにも」

「人間らしくっていいじゃない！ 普段のリラちゃんが落ちつきすぎなのよ」

「よく、言われます。だからときおり、自分はひどく冷たい人間なのではと、思ってしまうほどです」

「はあ？ どこが？」

わたしは思わず変な声を出してしまった。

（確かに初めて会ったときは）

凜とした、冷たい印象を持ったのは本当だ。

でもその裏にあったやさしさは隠し切れるものではなく、だからこそわたしは自然とそばにいられた。

「リラちゃんは全然冷たくないよ。だいいち、冷たかったらユレゼスさんたちだつてついてきたりしないでしょ？」

サエル運輸商會を最初に辞めたのはリラちゃん、他のメンバーはそれに付随する形だったのだと、エンクさんが言っていた。つまりみんなはリラちゃんを慕ってついてきたということなのだ。そうでなければあんなあたたかい雰囲気ができるわけがない。

「……ありがとう、メイリー」

嬉しさを含んだ響きに、横を向いて確認したらリラちゃん表情は笑っていた。枕もとに小さな灯りをひとつだけつけているから、ぼんやりと見えるのだ。

(うーん、やっぱり美しい)

もしリラちゃんがそのままこの屋敷にいたら。

八の爵として暮らしていたら。

この屋敷はイースウェル王国最大の観光名所になっちゃうくらい、有名になっていたことだろう。

惜しい。

実に惜しい。

「ねえ、リラちゃんは どうして船乗りになろうと思ったの？」

今日一日中、ずっと聞きたいと思っていたことをやっと聞いたら、リラちゃんもチラリとこちらを見て、

「両親を捜したかったからですよ」

(え……?)

さみしそうな笑顔で、そう答えてくれた。

リラちゃんの両親は、リラちゃんが五歳くらいのおきに、海に出たまま帰ってこなかったのだという。貴族は基本的に自分の島からは出ないと言われていたとおり、リラちゃんの両親もそれが最初で最後の航海になるはずだった。国王から一の島・イースウェルに呼ばれて、どうしても行かなければならなかったのだと。

「だからずっと、私は海に出たいと思っていました。どんなに小さな手がかりでもいいから、自分の手で見つけたいと。それが認められたのが十五のときで、国王陛下の了承を得て叔母に爵位を譲ったのです」

「そうだったんだ……」

海での捜しものをするなら、船乗りは確かに適職だ。国中をまわりながら捜すことができるのだから。

「それで、なにか見つかった？」

尋ねたわたしに、リラちゃんは無言で首を振る。

それから、

「見つけたのは、貴族の管理が島中にまるで行き届いていない現実ですよ。私はなまじ自分が貴族だっただけに、情けなくて許せなくて……」

「それで、義賊みたいなことしてたんだ？」

「やはり気づいていましたか」

そこでリラちゃんが浮かべたのは、苦笑だ。

「気づいたっていうか、サデイが教えてくれたのよ」

「サデイが？　ああ、彼はあなたを気に入っているようですが、あらね。気をつけなさいメイリー。彼は悪い人間ではないですが、あなたとくつつくのは私が個人的に気に入りません」

「ぷっ」

そのあんまりなもの言いに、わたしは噴き出してしまった。そしてついでのように、思い出したことがある。

「あ、そうだ。チャレーさんに、サデイのお兄さんのルノクさんのこと聞いたらね、なんか固まってただけ」

と語るわたしの視線の先で、リラちゃんまで固まっていた。

（もしかして振られたことまで思い出しちゃった！？）

「リ、リラちゃん？」

少し遠慮がちに呼んでみると、

「……ルノクは、私の両親に同行した唯一の人間です」

「え？」

「そして一緒に、行方不明になったままなのです」

(ああ)

だからチャレーさんはあんな反応で。

だからサデイも、リラちゃんを追いかけられることを口実に国中を飛びまわっていたのか。

さまざまな疑問が一気に氷解して、わたしはその夜、きつとすつきりとした気分で眠れると。小さな灯りも消したあと、目をつむる瞬間までそう思っていた。

(甘かった)

わたしはそこまで能天気には、できていなかったのだ。

両親を捜して船乗りになったリラちゃん。

親がいなくても必死に生きようとしているテフラナと弟くん。

聞いた話によると、ジエロトくんだって親を亡くしてサエル運輸商會に引き取られた子どもだったらしい。

(みんな、会いたくても会えないのに)

両親がいながら屋敷を飛び出してきたわたしは？ あたたかく包んでくれる手が、誰にでもあるものだと思いきや、自分がまぎれもなく幸運のなかにいるのだと、気づけなかった。

楽園のなかにいるのだと

(心配……してるよね、きつと)

今は自分の意思で会わないけど、いつかわたしだって会いたくても会えないときが来るのだろう。それは一年後かもしれないし十年後かもしれない。もしかしたら、明日かもしれない。

戻ったほうがいいのか？ と。

心のなかに迷いが芽生える。

リラちゃんへの支払いの件はもう解決したも同然で、今後もし一緒にに行けるのかなんてわからない。船に乗りつづけければ、登録証に船乗りとしての登録がない以上荷物として扱われるしかないけど、それだって限度というものがあるだろう。

(また面倒をかけるよりなら)

自由はもう楽しんだのだ、屋敷に戻って両親のそばで、孝行でもしてあげたほうがいい？ でもそれは同時に、ルディギーとの結婚にも繋がってしまう。それは嫌だった。

どうすれば、いいんだろう？

考えはじめたら一向にとまらず、わたしはなかなか寝つけない。

そんななか、ドアの向こうでなにかが倒れるような音がした。

(ん?)

耳を澄ますと、もう一度。

倒れているんじゃないかと、誰かが床を叩いているのだろうか？

上半身を起こしてとなりを見てみると、話してすっきりしたのか、リラちゃんは安らかな寝息を立てていた。きりりと気を張っていないリラちゃんの横顔は、普段と違ってかわいらしく見える。

(ちょっと見てくるだけだもの、わざわざ起こすこともないわよね) 起こさないように静かにベッドの横におりると、自分がついていくといわんばかりに窓辺にとまっていたクルツポが飛んでくる。

「あは、ありがとう」

小さく呟いてから、そつとドアのほうへ。

音を立てないように少しだけ開き、その隙間から様子を窺ってみた。

(ん？ 物音はもうしないみたいだけど……)

さらに開いて、一步廊下に出た、そのとき

「……………っ!？」

ドアの陰のほうから伸びてきた手に、口をふさがれた。いや、ただの手ならまだよかったのだけど、その手は白い布を持っていたのだ。

(これっ、薬……?)

それ以上考えることもできずに、意識が遠のいてゆく。身体からも力が抜けて

わたしは、夢を見た。

じいじが死んで離れにひとりになったとき、やっとわたしに手を差し伸べてくれた、両親の夢。

「今まですまなかった」と。

「やっと覚悟ができた」と。

やさしくわたしを抱きしめてくれた。

「これからは私たちがおまえを守る」と。

「他の誰にも渡さない」と。

強く手を握ってくれた。

「おまえは私たちの子なのだから」と

何度も確認するように、口にして。

ときには厳しく接しながらも、離れることはなく。

わたしを見守ってくれていた、ふた組の目を思い出す。

(どうして?)

幼い頃は気づかなかったのに、どうしてあの目はこんなにも、切なさに満ちているの……?

記憶が彩られているからか。

わたし自身に罪悪感があるからか。

それとも

「……!」

夢のなかで戸惑ったまま、わたしは意識を取り戻した。一瞬、自分の置かれている立場を忘れていた。

(あれ? わたし、どうしたんだっけ?)

確か夜に、部屋から出ようとして……ああそうだ、誰かに襲われたんだった。まだネグリジエの、自分の格好を見て思い出す。多分、今のわたしがよけいに戸惑っているのは、そのわりに縛られたりしていなかったからだ。

それをいいことに、上半身を起こしてあたりを見まわしてみると、どうやらここは船室のようだった。ただリラちゃんの船とは明らか

に違い、船室そのものが大きいし置いてある棚なども豪華なつくりのものだった。

さらに窓へと目を向ける。

(空が明るい)

気絶させられているあいだに、夜が明けてしまったのか。

この船はなんなの？

一体どこに向かっているの？

情報を得るためにふらり立ちあがったわたしは、しかし部屋に入ってきたひとりの女性を目にして動けなくなる。

「目が覚めましたか？ メイリーさん」

「チャレーさん……」

八の爵、そしてリラちゃんの伯母さん　とてもこんなことをしそうな人には見えないのに、どうして？

「なんで、わたしを？」

聞きたいことはたくさんあったけど、口から出せたのは結局それだけだった。

チャレーさんはそんなわたしに、やさしげな笑みをひとつ見せる  
と、

「かわいそうだから縛ったりはしないけれど、お願いだからおとなしくしていてちょうだいな。用事がすべて終わったら、ちゃんと帰してあげます」

「用事？ 用事ってなんですか！？」

近づいてすがりついてみても、チャレーさんは答えずにわたしの手を振り払った。

それから強く睨みつけてきて。

「　そんな格好ではなんでしょうから、服を用意させます。着替えなさい、メイリー・ローロポール」

(えっ!?)

そこに、まぎれもなく憎しみが見えたような気がした。

乱暴に閉じられたドアに、わたしはまたも動けない。

(なんで……?)

わたしというよりも、口口家を憎んでいるの？ でもとなりの七の島・ナフェストルならともかく、八の島・ハルメールとは接点なんてないはず。

もしかして、わたしが「狂い咲き」と呼ばれることと、なにか関係があるの？

忘れようとしていた。考えないようにしていたことが、再びわたしの脳裏を支配する。

(狂ってしまったお父さまは)

知らないうちに、人を傷つけていたのだろうか……？

それからチャレーさんが持ってきてくれたのは、わたしでもこれまで着たことがないくらい上等なドレスだった。ネグリジェのまま人前に出るのはさすがに恥しいから、仕方なくそれに着替えたけど。

(こんなのを着せるってことは、それなりの場所に行くってこと？ それなり　なんて言っただって、他の屋敷にも手品師の衣装で入っちゃうわたしには、それ以上の場所など城くらいしかない。

「あ！　城……」

自分の考えに、ふと気づく。

(そうだわ、きつと一の島・イスウェルに向かっているんだ)

船室から出れば島が見えるかしらと、ドアノブに手をかけたら意外にもあっさりとまわった。どうせ船上には逃げ場がないからと、チャレーさんは割り切っているのかもしれない。

どうやらこの船はリラちゃんの船よりもひとまわり大きく、船室もいくつがあるようだった。見つからないようにそっと覗いてみたら、となりの部屋では数人の男性たちがカードゲームで盛りあがっているらしく、外まで声が聞こえてきていた。わたしは身をかがめて船の後ろのほうにまわりこむと、すいと空を仰ぎ見る。

(雲の流れは　)

リラちゃんの船に乗っているあいだも、暇さえあれば空を眺めて

いた。わたしならきつと、雲の流れる方向から目的地を予想できるはず。

幼い頃何度も広げたこの国の地図と、八の島・ハルメイルの位置、そして雲の流れを頭のなかで描き重ねて。

「 やっぱり、そうだわ」

向かっているのは一の島・イスウエルで間違いないようだった。そこに。

「ポツポ―！」

（えっ？）

聞こえた鳴き声に振り返ると、わたしにずっとくつついてきたのがクルツポが勇ましい立ち姿で船室の屋根のところにとまっていた。

「クルツポ！」

（よくついてきてくれたわっ）

これを使わない手はない。

わたしは急いでもといた船室まで戻ると、なかに備えつけてあったメモ帳に「チャレーさんと一の島・イスウエルに向かっていきます」と書きこんで、細長く折りこんだ。それをクルツポの足にくくりつけると、またドアの外に出てクルツポを飛ばす。

（距離的にはちよつと厳しいだろうけど）

今はクルツポに頼るほかない。

「頼んだわよ！ クルツポっ」

「クルツポ―っ！」

相変わらずいい返事をして、その場でぐるり旋回してから、クルツポは船とは逆の方向へ飛んでいった。

「 見いーちゃった」

「あ………！」

いつの間にとりなりの船室から出ていたのだろう、声に振り返るとひとりの男性がそこに立っていた。そのラフな格好からするに船乗りではないようだけど、身体つきは同じくらいがっしりとしている。もしかしたら、チャレーさんがわたしを一の島・イスウエルに連

れていくために雇った、用心棒みたいなものなのかもしれない。

「今の伝書鳩かあ？ 捕まってる最中だったのに、悪い娘だな」  
にやりと笑う男の顔が、気持ち悪い。

（この人、ろくでもないこと考えてるんじゃない……）

エムルとの一件から、ピンときたわたしの予感は、

「まあしかし、あんたが俺たちの遊びにつきあってくれるなら、黙  
つてもいいけど？」

残念ながら当たっていたようだ。男の言う「遊び」がカードゲー  
ムだなんて、とてもじゃないけど思えない。

（もうあんな目にあうのは嫌よっ）

でも今はまだ、逃げる道がある。

わたしは竦みそうになる足をなんとかこらえて、

「あ、遊びにつきあうのはかまわないけど、その前にわたしもカー  
ドゲームに交せてよ。ね？ そのかわり、わたしがゲームに負けた  
らなにをしてもいいから」

「……本当か？」

男が生唾を呑みこんだのがわかった。ほんとわかりやすい人だ。

（カードはわたしの商売道具！）

たとえ種も仕掛けもなくとも、テクニクだけでイカサマをする  
ことは簡単なのだ。

わたしが負けるわけ、ないのにね。

そうしてなんとか無事に(?)たどりついた一の島・イースウエル。昨日訪れたときはテフラナたちをおろすだけで上陸はしなかったけど、今度こそわたしも足を踏み入れることになった。

さすがに地上ではわたしを自由にするつもりはないらしく、両手を後ろで縛られた状態で船をおりる。すぐあとにはチャレーさんがついてきて、駆け寄ってきた検問官になにか質問されていたようだけど、なにを話しているのかは聞き取れなかった。

(どうせ、なにか罪を犯した娘だって、そんな感じなんだろうな)  
だってチャレーさんは八の爵なのだから、島で悪さをする者を捕まえる権利がある。わたしがこうして実際に縛られている以上、そう説明されて疑う者はいないだろう。

「メイリーさん、こちらに」  
ロープの先を持ったチャレーさんに促され、よく整備された道の上を歩きはじめる。

(国王のいる島かあ)  
すべての面において国いちばんといわれるこの島を、いずれはまわってみたいと思っていた。でもまさか、こんなわけのわからない形で来るはめになるとは、一体誰が予想できただろう? 戸惑いは大きいけど、だからといって好奇心はとめられずわたしは、あたりを見まわしながら歩いた。

港近くは他の島同様倉庫が並んでいた。でも、そこを抜けたら別世界。一本の道を中心に、きれいに島が分かれていたのだ。半分は、三角屋根の低い家がたくさん並んだ空間。それはわたしが、六の島・ローポールの一本杉のところから見下ろした景色とよく似ていた。そしてもう半分は、四角くて高い建物が並んだ空間。ところどころに煙突も見えていて、白い煙を吐き出していた。なにかをつくっているのだろうか?

それらふたつの空間に見入ってしまったって、わたしは思わず足をとめた。

するとチャレーさんは、ゆっくりとこちらを振り返り、

「右手側は居住区として安らぎの場所、左手側は労働区として稼ぐ場所。この島ではきつちりと分けられていて、過剰な労働も怠惰も防げるようになってるんですよ」

顔はこわばったままだったけど、教えてくれた。そしてまた、その中央を貫いているこの道を歩きはじめた。

（って、向かってるのってもしかしてお城！？）

この位置取りからして間違いないだろう。そのまま歩いているとやがて、姿も見えてきた。やっぱり基本はわたしたちが住んでいた屋敷と同じだったけど、ところどころちゃんと城に見える工夫が施されているところが、なんだか微笑ましい。

だからわたしは、一瞬自分の立場を忘れて笑みさえ浮かべていたのに

門の前まで来たとき、チャレーさんによって首筋に突きつけられたナイフで、すべて思い出した。

「チャ、チャレーさんっ？」

「わたくしはチャレーフィア・ハルメール！ 手土産を持って国王陛下に会いにきました。どうかお取り次ぎくださいな」

門番らしき人物にそう告げると、ふたりいたうちのひとりが跳びあがるようにして城のなかへと入っていった。残ったひとりには、チャレーさんの尋常じゃない気配に目を白黒させている。しかし、わたしにナイフが突きつけられているからか、うかつに動くことはなかった。

（チャレーさん……一体なにを考えているの？）

やがて戻ってきた門番は、よほど急いできたのか息を切らせた声で、

「陛下が、すぐに、お会いに、なると……」

「部屋はどこ？」

「まっすぐに進めば、謁見の間が」

かわりに残っていた門番が答えた。どうやら城は、中身もいろいろといじっているらしい。

「わかりました」

あくまでも丁寧な口調で返して、チャレーさんは歩き出す。まだわたしの首筋には冷たい感触があるから、わたしも歩幅を合わせて歩くしかなかった。

( 怖い )

怖いよ、リラちゃん。

ナイフの感触よりも。

もしかしたら、ピストルを向けられたときよりも。

( これからなにを言われるの？ )

どんな真実が待っているの？

なによりも、それが怖かった。

それでも、足をとめることはできない。

強制的に歩かされること数十歩、やがてたどりついたのは、たくさん椅子が並んでいる広い部屋。その中央、最奥にはどこからでも見えるように高い椅子があり、その上にひとりの男性が座っていた。

( この人が、国王……？ )

イスウエル王国のあるじ、その人なのか。

口もとには立派なひげを蓄えているものの、若々しさが伝わってくる爛々とした瞳が印象的だった。年齢はわたしのお父さまより少し上くらいだろうけど、太り気味のお父さまとは全然違い、王族の正装がちゃんと似合っているすらりとした体型をしていた。

そんな場合ではないのに、じつくりと見惚れてしまうわたし。

この人がいなければ国は成り立たない。そんなすごい人物の前に今立っているのだと思うと、ふつふつと緊張がわきあがってきた。

わたしを、また現実に戻したのは。

「痛っ」

首筋に一瞬走った、赤い痛み。わざとなのかはわからないけど、少し切れてしまったようだ。

「チャレーさん……?」

( ! )

横目で様子を窺ってみたら、チャレーさんは恐ろしいほどの怒気を含んだ目の色をしていた。

それでも言葉だけは、どこまでも穏やかで。

「イスウエル国王陛下、どうかお答えください。この娘はあなたの本当の娘ですか?」

「えっ!?!」

一体なにをどう繋いだら、そういう話になるのだろう。

そう戸惑う反面、不意に思い起こされるのは、七の島・ナフェストルで聞いた国王の隠し子の話。

(まさか……ほんとだったの?)

しかもそれが、わたしだっていうの……!?!

ありえない。

ありえないとわかっていなのに、驚きを隠すこともできない。

(王さまはどう答えるの?)

子などいないと断ち切るだろうか。

それとも

複雑な気持ちで国王を見あげるわたしの前で、

「違うと言ったら、そなたはその娘を殺めるのかね?」

特に驚いたふうもなく紡がれた国王の言葉は、どこか哀しみに満ちているようにも思えた。

(一体、なんなの……)

チャレーさんはやっとわたしからナイフを離すと、わたしの身体を国王の前に突き出すようにして、

「いいえ、みなに聞いてまわります。この娘がいかにも『彼女』に似ているのかを!」

初めて語尾を荒げる。

「そなたの望みはなんだ？」

対する国王は、まだ穏やかに笑ってさえいて。きっとその態度が、チャレーさんを煽るのだ。

「簡単なことです！ ルノクトールを返してくださいっ！ わたくしは過去のことを騒ぎ立てたいのではありません。ただ愛しい人を取り返したいのですっ」

（えっ！？）

半分は悲鳴のようだった、言葉の端に含まれていた名前は　　リ  
ラちゃんのお兄さんと一緒に行方不明になったままの、サデイのお兄さん。

わたしは今さら、「ルノクさんはどうしているの？」なんて無神経に聞いてしまった自分の浅はかさを悔やんだ。

そしたら国王はなぜか、チャレーさんではなくわたしのほうをはずきりと見てきて、

「いいだろう、ルノクトールを返そう。こちらもそろそろ潮時と思っておった。いつまでも隠しだてはできんし……ちようどメイリーが屋敷を飛び出したと、連絡が入ったところだったからな」

「え　　」

（やつぱり、そうなのっ？）

わたしがただの貴族の娘なら、わたしが家出したくらいで国王に連絡が来るはずもない。わたしを見おろす視線はじいじがわたしに向けていたもののようにやさしく、でもその事実を簡単には喜べない自分がいる。

茫然と立ちつくすことしかできないわたしの身体から、やがてチャレーさんの手が完全に離れ、同時に倒れる音が聞こえた。望みを受け入れてもらって安心したのだろうか。

気づいたわたしが振り返るよりも早く、見守っていた警備員たちが近寄ってきて、チャレーさんを抱き起したり、わたしの腕から口ブをはずしてくれたりした。

「あ、ありがとう」

と、わたしがお礼を言っているうちに、チャレーさんを抱えあげてどこかに連れていこうとする。

「あのっ、待って」

とっさに呼びかけた、わたしの後ろから、

「大丈夫だよ。心配しなくても、落ちついたらちゃんと彼女が望んだようにしてあげるから」

すぐ近くで聞こえた声に振り返ると、まず映ったのは、わたしと同じ少しくすんだ金の髪。

（誰……？）

わたしより頭ひとつ分背の高いその人と、会ったことがないことだけは確かだった。

それなのにその人は、人懐っこい笑顔をわたしに向けてくると、「無事でよかった、メイリー！　ずっときみに会いたいと思っていったんだ」

思いつきり抱きしめてくる。

（きゃあああああ）

な、なにごと！？

この人誰かと間違えてるんじゃないのっ？

わりと本気でそう思ったけど、さっき呼んでいた名前は確かにわたしで。

わからないことだらけだし、なぜか抱きしめられているし、頭からクルッポでも飛び出しそうよ……

半分ぐらぐらしはじめたわたしの耳に、次に届いたのは、

「ウォンレイハールさま、大切な妹姫さまが混乱されておりますよ？」

今度は意外にも、聞き覚えのある声だった。

顔を動かして、視線を向けると、

「エフレイシド師匠！？」

できれば会いたい。会ってお礼を言いたいと思っていた、手品の師匠だった。別れてからずいぶん時間が経っていたけど、ひと

目見てわかるくらい変わっていない苦笑が、さがった目尻が、困ったように頭を掻いていた。

「師匠はやめてくださいよ。それにしても、あれからもちゃんと鍛錬なさっていたのですね。あなたの指先を見れば、よくわかります」

「も、もちろんです！ エフレイシドさんみたいな手品師になりたいと思つて、わたし、頑張りましたから！ ……つて、あれ？」

人の腕のなかで熱く語り出そうとしたわたしは、ふと我に返る。（さつき、「ウォンレイハールさま」つて言つてなかった？）

それは世間知らずなわたしでも知つている、この国の王子の名前で。ただの旅の手品師だったエフレイシドさんが、どうしてそんな王子と一緒にいるの？

そもそも、なんでわたしは王子に抱きしめられてるの！？

「ずるいぞエフ、僕だつてメイリーと話したいのに」

「だつたらまず、その手を放しておあげなさい」

「あ、そうか」

エフレイシドさんに指摘されて、王子はやっと腕を放してくれた。でもそう簡単に、体温は離れない。

（し、心臓に悪いよっ）

わたしは自分の身体を今度は自分で抱きしめるようにして、小さくなつていた。

そんなやりとりを玉座の上から眺めていた国王は、

「はっはっは。世話をかけるな、エフレイシド。この件に関しては、最初から最後までおぬしに頼りきりだった」

「いえ……」

エフレイシドさんが控え目にぺこりと頭をさげると、国王はこぶしを握つて続けた。

「わしがふたりの女を同時に愛してしまつたばかりに、こんなことになつて……メイリー、おぬしにも謝りたい。このバカな父親を許してくれとー！」

(あ、あれ……?)

なんかさっきまでとキャラが違う！むしろわたし自身のノリと似ていて　本当に、わたしは国王の娘なの？　じゃあわたしを育ててくれた両親は？　「狂い咲き」は？

「……っ」

そこにあるなにも、反応できなかった。許す許さない以前に、わたしは自分の存在がわからない。わたしには情報が足りなすぎたのだ。

ふらりと、倒れそうになったわたしの肩を王子が支えてくれて、「そこに座りなさい。ちゃんと話をしようじゃないか。ちゃんと」  
国王がそう促した。

きつとそこが、わたしの「幸せ」の絶頂だったのだ。突きつけられる現実はあまりにも重く、わたしは上手に呼吸することさえできない。

わたしは本当に国王の娘で。

国王が側室に産ませた子どもで。

でもその人はすぐに亡くなってしまっ

王妃にわたしを育てさせようとしたけど断られて。

国王は仕方なく、わたしを八の爵に預けることにした。

(八の爵を選んだのは、その人柄を気に入っていたことと)

リラちゃんを生んだことで、すでに子育ての経験があったからだという。

いくら側室の子とはいえ、わたしが王家の血を引いているのは確かだったから、下手をすればその立場を狙われかねない。そのためやり取りは秘密裏に行われた。だからこそ、八の爵夫妻が自分で迎えにいったのだ。

そして無事にわたしを譲り受け、八の島・ハルメールに帰る途中に　事件は、起こった。

「お父さまとお母さまが、リラちゃんの両親を……？」

(殺したのだと)

残酷な運命は言う。

「証拠はない。だが、子どもができないことを悩んでおつて、「もし預けるなら自分に」とローポールが言っておつたのも事実。そして事件の直後、彼らが赤子を手にしていたことも」

「っ……そんな……！」

ふたりはわたしを手に入れるために、本当に殺したのだろうか？ 殺すように命じたのだろうか？

(わたしを見る目が)

なんでか、いつもつらそうだったのは隠しきれない罪悪感のせいだったの？

「赤子が乗っていたはずの船には、なにひとつ残されていなかった。そう、死体さえな。だがあとになってルノクトールがここに流れついていたことがわかったのだが……残念ながら、彼は記憶を失っていた」

「ああ」

だからすぐに帰さなかったのか。いつか思い出すかもしれない、それで事件の真相がわかるかもしれない、と。

(みんな……わたしのせいで縛られて)

自由に生きることができずに！

「メイリー、きみが泣く必要はないよ」

王子が横からわたしの涙をぬぐってくれる。でもそれはやるだけむだなことで、あとからあとから水はわきでてきた。

「エフレイシド、おぬしがなんとかしろ」

国王のそんな無茶苦茶な命を受け、それでもエフレイシドさんはわたしの目の前にしゃがみこんだ。いつも顔を見上げてばかりだったわたしは、少し不思議な気分になる。

「六の島・ローポールのお屋敷で初めてあなたを見たとき、すぐにわかりました。髪の色もそうですが、本当にティリオットさまとそっくりでしたので」

それからそつと、わたしの手に触れて。

「あの頃の私は、旅の手品師に扮して各島をまわりながら、貴族らの様子を記録する視察官という役割でした。同時にあなたを探す役目も授かっていましたが、六の爵はなかなかガードの堅いおかたでして。あなたがよく懐いていたあのおじいさまがいなければ、私もあなたと会うことはなかったでしょう」

「……じいじ？」

「そう、あのかたは私が何者なのかを悟っていた。そしていつか、あなたがあの屋敷を出るときのために　あなたに手品を教えるほしいと。いつかあなたが真実を知るときが来ても、『もっと生きていたい』と思えるようにと、私に頼んでいたのです」

「……っ」

(そんなこと)

「そうだ、じいじだつてつらかつたはずなのだ。わたしをどんなに愛してくれたつて、わたしはさらわれてきた子どもで。でもそれを責めることもできずに、ただわたしの未来を心配してくれていた。

そこにあるのは、本当に愛じゃないのかしら。

血が繋がっていないければ、家族愛は成立しない？

血の繋がりを聞かされても、わたしにはこの王子や国王が、家族であるとは思えない

「おいエフ、ますます泣いてしまったじゃないか！」

「そ、そんなこと仰られましても……」

「あと、さりげなく手を握るな！」

「さりげなくつねらないでくださいっ」

間近でくりひろげられるふたりのやり取りに、わたしはつい泣いたまま笑ってしまった。

でもその笑いすら　一瞬で凍りつく。

「メイリーっ！」

謁見の間の外から聞こえたのは、確かにリラちゃんの声だった。

「っ……！？」

とっさにわたしは立ちあがると、その場から駆け出す。

(今は、無理よ)

リラちゃんの顔をまっすぐに見る自信がない。笑顔を返す資格もないのだ。

リラちゃんがドアを開けた瞬間に、その横を通りすぎた。チラリと見たらサデイも一緒だった。クルツポの手紙を見て追いかけてきてくれたのだらう。

(手紙なんか書かなきゃよかった……！)

わたしは生まれて初めて、クルツポの働きを恨んだ。

「メイリーっ？」

背中に届く呼び声も無視して、わたしはただ走る。

(神さま、もしいるなら教えて)

わたしはどうすればいいの？

リラちゃんのこと好き。

お父さまとお母さまも、好き。

わたしをずっと閉じこめていたのは気に入らなかつたけど、今ならその理由もわかる。ふたりはきつと、わたしのことがばれて取りあげられるのが怖かつたのだ。それくらい、わたしを必要としてくれていた。大切に思ってくれていた。

(でも、だからってリラちゃんの両親を……)

それだけが、痛かつた。

そもそもわたしが存在しなければ、リラちゃんの両親は死ぬこともなく。リラちゃんはきつと、貴族としてなに不自由のない生活を送れたのだ。

わたしの存在が、リラちゃんの人生を変えてしまった

「お嬢ちゃん、待ちなっ」

屋敷の裏手にあつた林のなかを、たいして前も見ずめちやくちやに走っていたら、後ろから追ってきていたのはサデイだった。それがリラちゃんじゃなかつた分だけほつとして、同時にがっかりした。わたしの心は、あまりにもわがままだ。

とまれない足が、そんなわたしに対抗するようによるめいて

「危ないメイリーっ！」

サデイが追いついてくれなかったら、わたしはきつと海のなかだつたろう。林の先は切り立った崖になっていたのだ。

後ろからわたしを抱きしめて、ほつと息を吐いたサデイは、そのまま木陰に座りこむ。

「頼むから、驚かせるならほどほどにしてくれよ」

「ごめんなさい……でも、もっと驚かせないといけないかも」

「へ？」

サデイの上に乗ったまま、身体を捻ったわたしは。

「わたしの両親が　リラちゃんの両親を殺した犯人だったの」

「……はあ！？」

「わたしもう、リラちゃんと顔合わせられない……っ」

再びあふれてくる涙は、そのままサデイの服に吸いこまれてゆく。

「ゆっくりでいいから、詳しく話してくれ、お嬢ちゃん」

「ん……」

促されるままに、わたしはぼつぼつと語った。ときおり自分の呼吸に邪魔されながら　わたしが本当は何者なのか、教えてほしくつて。

どうすればいいのかを。

生きていていいのかを。

しかし。

「おまえの本質はなんだ」

すべてを聞きおえたサデイが、わたしをその場に立たせてまず選んだのは、そんな言葉だった。

「本質？」

「人を驚かせようとする事だろうか？」

「！」

（手品……）

わたしが自分を守るために、手にした力。そしてその本質は、考えかたは、確かにいろんな場面でわたしを助けてくれた。

サデイはわたしの両肩に手を置き、決して甘やかすためではない言葉を紡ぐ。

「元気になれ、メイリー。そして俺たちを驚かせてくれ。わかっていると思うが、おまえが今頑張らなければ、ロ口家はおしまいなんだ」

「あ」

（そう……だ）

普通に考えれば、リラちゃんの両親を殺してまでわたしを奪ったロ口家は、処罰されても爵位を剥奪されてもおかしくはない。でも、これまでわたしを育て守ってくれた功績は、わたしが考えるよりもきつと、ずっと大きいものなのだ。わたしがふたりをかばえばきつと、ふたりは救われる。

「それともおまえは、自分が身がわりでしかなかったと、その程度の愛情しかもらわなかったと、言えるのか？」

「……ううん」

首を振ったわたしのなかに、確かに宿る想いがある。

（そんなこと、ないよ）

わたし、ちゃんと愛されてた。

それだけは自信がある。

そもそもお父さまとお母さまだって、わたしの立場をいくらでも利用することができたのだ。でもそれをせず、ただわたしを守ることだけを考え、島中から心を閉ざしてまで、わたしを慈しんでくれた。

（それが、「狂い咲き」の正体だったのね）

わたしをすべてのものから守るために

「わたし、ロ口家が好きよ。ずっと、ローロポールなんて変な名字嫌だっと思ってたけど、今なら愛しいと思えるの。でも、こんなわたしをリラちゃんは許してくれないかもしれない……」

問題はそれだった。

わたしが両親をかばうことはつまり、リラちゃんの両親を殺した

ことを肯定する意味に取られても仕方がないのだ。

しかしサディは、それがひどくバカげたことだと言わんばかりに笑って、

「そんなことはないだろう？ 少なくとも、リリードにとってはお嬢ちゃんが初めての『友だち』だ。初めて自分の内面まで見て、対等につきあってくれたと、俺にそう話していたよ。あのリリードが、心から嬉しそうに、な」

わたしの頭を乱暴になでながら告げた。

「ほんと？」

思わず抱きつくようにして顔をあげたら、

「ん？ お嬢ちゃん、首のところから血が出てるぞ。さっき引っかけたか？」

「ああ……」

(話に驚きすぎてすっかり忘れてた)

「違うの。これ、ちよつとナイフで切られただけで……もう全然痛くないから平気よ」

手で隠しながら告げたら、逆効果だったみたいだ。

「ナイフで！？ …… あつ、もしかしてチャレーフィアが連れていったときか？ どれ、ちよつと見せてみな」

「わっ」

サディはわたしの手を引き剥がすと、首筋に顔を近づけてくる。

(な、なんかすごく恥ずかしいんだけどっ！?)

「うん、確かに血はとまってるな」

そう告げたあとに、ぺろっと

「ひゃあっ！？」

「こらっ！」

わたしが思いきりサディを突き放したのと、木陰から飛び出してきたリラちゃんがサディを引っ張ったのは、まったく同時のことだった。おかげでサディの身体はあっさりわたしから離れ、危うくさつきわたしが落ちかけた崖から転がりそうになる。

「おととととつ、あつ、危なっ！」

間一髪、サディはなんとか木の根につかまって難を逃れたけど、放っておいたら落ちそうな状態だ。

しかしリラちゃんは、そんなサディに手を貸すどころか横目で見やっつて、

「まったく、油断も隙もない」

吐き捨ててから、あっさりと背を向けた。そしてわたしと顔を合わせ、

「行きましようメイリー、こんなバカは放っておいて」

(あ……！)

普通に話しかけてくれたのが、なによりも嬉しかった。さっきサディが言っていたことは、ほんとかもしれないと思えた。

(簡単に振り切ることはできないけど)

そばにいていいのだと。

だからわたしは、大きく頷いて、

「そ、そうね！ わたし、リラちゃんに話したいことがいっぱいあるのっ」

「私ですよ、メイリー」

並んで歩き出す。

「おいっ、待て！ 俺を助けてから行けっ！」

外野の声は聞こえなかった。

## 【エピソード】

「さあて、次は九の島・キーエリドルね。張り切っていきましょうっ！」

わたしが気合いを入れたら。

「おーっ」

と一緒に手をあげてくれたのは、ジエロトくんだけだった。

「もう、みんなノリが悪い！」

「だってエ……まだ話についていけないのヨ。結局どういうこと？」

大真面目に聞いてきたのはユレゼスさん。

対してそれに勝手に答えたのは、

「ようは、こんな奔放娘はいらないから勝手にしろってことだろ？」

「ウォレイツ……あんたねえ」

でもこのかわいげのなさが、「ああ、また船に戻ってこられたんだな」って気分にしてくれる。

そう、結局わたしはリラちゃんに船に戻ることになったのだ。正確には戻るといふより、正式に乗組員として登録してもらえることになった、ということなのだけだ。

「はいはい、私から簡単に説明しますよ。輸送業務としては、基本的に今までと変わりません。ひと月に一周のペースで島をまわって、これまでどおり荷運びを行います」

（おお、さすが船長）

リラちゃんの話には、ウォレイツも真面目に耳を傾けていた。……なんか腹立つけど。

「仕事が増えたのは、私とメイリーです。国王陛下から直接、新たな視察官として働くよう指示を受けましたので、今後は荷運びと同時状況調査も行います」

「視察官って？」

問いかけてきたジェロトくんの顔が、わたしのほうを向いていたから、

「貴族の働きを観察して、記録をつける役目なんだって。七の島・ナフェストルのエムルがあんなになるまでばれなかったのは、ここ数年視察官がいなかったせいみたいなの」

リラちゃんのかわりに、わたしが答えてあげた。

以前エフレイドさんがやっていたその役目は、一の島・イースウエルの内部で「王は新しい側室を探しているんじゃないか」とか、「どこかに隠し子がいて探しているんじゃないか」とか（これは実際にたわけだけど）、「王子の花嫁を探しているんじゃないか」とか、そんな噂が立って動きにくくなってしまったから、一時的にやめていたのだという。七の島・ナフェストルの食堂で隠し子の話をしていた人たちは、きつとその噂を聞きかじったのだろう。そうして視察を怠っていたせいで悪質化した貴族に気づくのが遅れ、今回わたしたちがテフラナたちを送り届けるまで、国王はそれに気づくことができなかったのだ。

ちなみにその七の島・ナフェストルの件は、現在外部調査中みたい。あのあとまだこの島にいたテフラナたちとも会わせてもらったけど、元気そうでよかった。

まあそんなわけで、七の島・ナフェストルの告発をしたわたしたちにこの話がまわってきたのだった。わたしたちなら一の島・イースウエルの者ではないし、表向きは王家の者でないから、変に噂を立てられることもない。

「ではみなさん、出港の準備を」

リラちゃんがそう促したら、それぞれに返事をして、ユレゼスさんとジェロトくんは下に、ウォレイツは舵室に入っていった。

それを見送ったあと、リラちゃんは不意にわたしのほうを振り向いて、

「私たちは甲板のほうに出ましようか」

「うんっ」

ふたりそろって船室から外へ。

わたしとリラちゃん仲は、すっかりもとどおりに　いや、きつとそれ以上に、なっていた。

と、いうのも

あのあと国王が口口家の両親を召喚して話を聞いたところ、さらなる真実がわたしたちの眼前に現れたのだ。

国王を前に低く頭を下げたお父さまは、「信じてもらおうなどとは思っておりませんが」と前置きしたあとで、

「わたくしどもが使いを頼んだ男の話によると、その者が八の爵の船に近づいていったとき、逃げるようにして八の爵夫妻の船から離れていった船があるのだと」

静かにそう、口にした。

そして息を呑むみんなのために一拍おいてから、さらに、

「その者が船内に入ったときにはすでに、八の爵夫妻や他の乗組員の姿はなかったと聞いています。残っていたのは、戸棚に押しこめられていた赤ん坊だけ　そう、このメイリーです」

「お父さま……」

わたしが呼ぶと、お父さまはチラリとだけこちらを見た。お母さまはずっと泣きっぱなしで、言葉を発する余裕などないようだった。そうしてこっそりとわたしを手に入れたお父さまは、その後八の爵夫妻を殺した(？)船について調べたのだという。使いの者によるとその船には目立つ旗が立てられていて、それについていた紋章から探っていたのだ。結果、その船はイースウェル王国近海にときおり現れる、非常にたちの悪い海賊だということがわかった。

わかってしまったからこそ、それ以上は手出しできなかった。なぜなら、「貴族」というものはあくまでも国内でのみ通用する身分であり、少なくともイースウェル王国の者ではないその海賊にはなんの効力も持たないからだ。海を知らない男ひとりで、海賊に立ち向かえるほど甘くはないことを、お父さまはちゃんと理解していた。「だからせめて　せめて八の爵のかわりに立派にメイリーを育て

てやろうと……」

そう、お父さまがわたしを隠していたのは、「返せ」と言われるのが怖かったからという理由だけではなかったのだ。

「お父さま……！」

わたしの足は自然とお父さまに近づき、そしてわたしの手はそのためについているかのようにお父さまを抱きしめた。

（お父さまはリラちゃんの両親を殺したんじゃない……）

それどころか、ふたりのことを想ってわたしを育ててくれていたんだ！

胸が熱くなった。

疑ってしまった自分を悔やみ、けれどそれ以上に喜びは大きい。

わたしたちは、誰も間違っていなかった。

きつと。

わたしが隠されていたことさえ、本当は正しいことだったのかも  
しれない。

そのあとわたしは、落ちついたお母さまからも話を聞いた。

（お母さまの食事会の話だって、嘘だったんだって）

わたしに、島のみんなとうまくいっているように見せるために必死だったのだと、「やっと解放された」というような苦笑を浮かべながら教えてくれた。

わたしが知らなかっただけで、あの屋敷はずっと島から孤立していたのだ。

そうまでして、わたしを守ってくれていた。

（わたしが生きようとしなくて、誰が生きるというの？）

消えた命を想って、わたしは強く生きようと心に決めた

数時間前のことを思い出しながら、リラちゃんと並んで海風を受けていた。

不意に、

「それにしても、さっきのあなたはかっこよかったですねメイ  
リー」

笑い出したリラちゃんも、わたしと同じ場面を振り返っていたの  
だろうか。

「さっきのって、あれ？」

確認してみたら、案の定リラちゃんは笑顔のまま頷いた。

実はすべての真実が明るみに出たあと、国王の子であったとわか  
ってしまったわたしの今後をどうするのかと、みんなが好き勝手に  
悩もうとしていたから、

「わたしは口口家のメイリーでいたい……でも、もう家に閉じこめ  
られるのは嫌なの！ リラちゃんたちと一緒に、もつといるんな場  
所をまわりたいわ。退屈そうに生きてる人たちを、驚かして元気づ  
けてあげたいのよっ！」

きっぱりとそう言っただけだったのだ。つまり、視察官の話はわたし  
のこの希望を叶えた形でもあるのだった。

（国王陛下って、意外と話がわかるのよね）

お父さまに見習わせたいくらいだわ。

そう考えたらおかしくって、わたしもひとりで笑ってしまった。

「あ、メイリー。ウォン王子が手を振っていらっしやいますよ」

「えっ、どこ？」

リラちゃんが指差した方向を見たら、港から少し離れた位置で本  
当に手を振っている王子が見えた。

（港まで出てきたらさすがに騒ぎになるから、自粛してるのかなあ）  
島民のことをいちばんに考えている王子は、兄としても誇らしい。

「毎週手紙を書くんですって？」

「最初は毎日って言ったのよ」

わたしも手を振り返しながら、エフレイシドさんから聞いた話を  
思い出す。

王子はエフレイシドさんからわたしの話を聞いて、わたしに会う  
のをとても楽しみにしてくれていたのだという。国王はあんな調子  
なのに、意外にもきょうだいができずにひとりっ子だったから、そ  
れなりにさみしかったみたい。

(王子だもの、抱えている荷物の重さが最初から半端ないのよね)  
わたしの手紙で少しでもその重さを受けとめられるなら、それも  
いいだろう。

「リラード！ 船を出してもいいかしらっ？」

下からユレゼスさんの大きな声が聞こえてきて、リラちゃんも負  
けじと大声で返す。

「ええっ、お願いします！」

床板一枚隔てているから、それくらいやらないと聞こえないのだ。  
「ウォレイツ、安全運転をお願いしますよ」

それよりも近い位置にいるウォレイツにも声をかけたら、ウォレ  
イツは窓越しに親指を立ててみせた。

(あら)

その肩には、いつの間に入ったのかちやつかりクルツポが乗って  
いた。よほどウォレイツの肩を気に入っているらしい。わたしと同  
じくらいの高さだから、違和感がないのかしら？ 口に出して言っ  
たらウォレイツに怒られそうだから言わないけど。

やがて甲板に戻ってきたジェロトくんが、出発の笛を吹く。考え  
てみれば、六の島・ローポールを出たときも、七の島・ナフェス  
トルを出たときも、急いでいたからそれを聞いたことがなかった。  
笛の音はひどく澄んでいて、ゆっくりと空にのぼりとけてゆく。

わたしもそれを追って、見上げた空には今日も変わらず雲が流れて  
いた。

(わたしはずっと、雲を追いかけたかった)

まだこれからも追える時間を、やっと手に入れた。

でも、その雲がなにできているのかなんて、考えたことは  
なかった。

「そっか……雲の半分はきつと、笛の音できてるのね」

わたしが呟いたら、リラちゃんは珍しく声に出して笑って、  
「あなたのそういう考えかた、私は結構好きですよメイリー！。

よかったら、これからは『リラード』と呼んでください」

「えっ？ それって」

「なるべく早く、自然に話せるよう頑張りますから」

やさしく微笑んだ笑顔は、わたしにとって最強の

「ちょ、ちょっとメイリー、あなた、なに今さら鼻血なんて……っ」

「リリードが不意打ちで本気出すからよーっ！」

最高の、楽園に至る鍵だったのだ。

（了）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2807u/>

---

船乗りと手品師

2011年7月10日00時17分発行